

東京医療保健大学大学院

医療保健学研究科 医療保健学専攻 博士課程

妊娠期から育児への移行期にある夫婦の家事・育児における
認識の違いに基づいた夫婦の関係調整プログラムの開発

2015 年度 入学

2023 年 3 月 15 日 博士課程

医療保健学研究科 医療保健学専攻 看護学領域
学籍番号 HD115001 氏名 内田 貴峰

研究指導教員 米山万里枝教授
副研究指導教員 廣田栄子

論文題目	育児への移行期にある夫婦の家事・育児における認識の違いに基づいた夫婦の関係調整プログラムの開発
氏名	内田 貴峰
所属	東京医療保健大学大学院 医療保健学研究科 医療保健学専攻 博士課程看護学
助成金	なし

東京医療保健大学大学院 医療保健学研究科 医療保健学専攻
博士論文 要旨

妊娠期から育児への移行期にある夫婦の家事・育児における
認識の違いに基づいた夫婦の関係調整プログラムの開発

東京医療保健大学大学院
医療保健学研究科 医療保健学
専攻博士課程
領域名 看護学
学籍番号 HD115001
氏名 内田 貴峰

背景 (Background or Introduction)

育児期は、夫婦にとって親役割を担う家族発達段階の移行期であり、この時期は家事や育児に時間を費やされ、互いのコミュニケーションの時間を十分に取ることができないため、家族の発達形成における危機に直面しやすい。育児期の夫婦は、個々の価値観やコミュニケーションのパターンの違いを知り、お互いの気持ちや考え方や受け止め方を学んでおくことなど夫婦の関係調整が求められる。

欧米では、家族の発達形成における危機を想定して、父親も参加して親役割への移行に重点をおき、夫婦関係を強化しながら、家事・育児分担などの各々が役割を考え、また、生じる可能性のある夫婦間の葛藤などの問題を軽減することを目的とする出産準備教育プログラムが検討されている。日本においては、諸外国で実施されている内容が組み込まれていないだけでなく、時間的制約という状況の中で、妊娠中の経過や立ち会い分娩に備える教育プログラムでとどまっている。

そこで、育児への移行期にある夫婦に対して、家事・育児に対する認識の違いに基づいた夫婦の関係性における葛藤の実態を明らかにし、夫婦が関係調整をできるためのプログラムを構築し、その有用性を検討した。

目的 (Objective)

育児への移行期にある夫婦の関係調整ができるためのプログラムを構築し、その有用性を検討して、今後の助産師としての支援について考察することを目的とした。

方法 (Methods)

本研究は、下記のように研究 1, 2, 3 で構成した。

1. 研究 1 「妊娠期から育児への移行期にある夫婦の家事・育児分担を通しての関係調整に関する研究—育児期にある妻が夫に抱く葛藤と回避のプロセス—」: 質的記述的研究育児期にある妻に対して夫に対する葛藤と回避のプロセスを明らかにすることで、夫婦への支援のあり方を検討した。
2. 研究 2 「妊娠期から育児への移行期にある夫婦の家事・育児を通して、夫婦の認識の実態の研究」 量的研究、自由記載は質的に分析した。児への育児行動が安定し易いとされる 3, 4 ヶ月の夫婦の関係調整の実態を明らかにし、支援方法を検

討した。

3. 研究 3 「妊娠期から育児への移行期にある夫婦の関係調整を構築するためのプログラムの

検討」夫婦の関係調整と支援方法のプログラムを構築して、その有用性を検討した。

結果(Results)・考察(Discussion)

1. 研究 1 では、インタビューの結果から時間経過に伴い、出産直後期、混乱期、調整期、学習期、葛藤回避期、関係再構築期に分類できた。その時期別に、葛藤とその回避の内容から、【出産後の困難と妻の受け止め】【夫の対応に妻は混乱】【妻の葛藤】【妻から夫へ対話を求めて】【夫への対応の二極化】【葛藤に対する】【新たな関係性】7つの項目で構成されていることがわかった。
3. 研究 2 では、ペアレンティング調整は、妻が夫より促進行動が高かった。自分の相手への態度は、「威圧」「無視・回避」は夫が妻より高い傾向にあり、妻は自分の気持ちを夫に抑圧、無視されていることから夫婦間でのコミュニケーションが十分に取れていない可能性がある。対処行動は、問題焦点型において妻が夫より対処行動がとれない傾向にあり、夫のサポートを要することが明らかになった。
4. 研究 3 では、妊娠期に産後に起こりうる問題を想定して、夫婦の関係調整をはかるプログラムを体験した。それを通して、夫婦で育児について話す機会や産後の夫婦の状況を疑似体験する機会を得られ、夫婦の関係調整を図ることにつながっていた。

結論(Conclusions)

1. 妻は、夫に対して自分の辛い気持ちを受け止め、それに答えて欲しいと考えており、夫に対して、自分の気持ちを察して家事・育児をするように求めるのではなく、夫にやって欲しいことを、具体的に言葉で伝えることが重要であることが示唆された(研究 1)。
2. 時間経過に伴い、出産直後期、混乱期、調整期、学習期、葛藤回避期、関係再構築期に至ることが示され、夫婦関係の調整には、葛藤と回避のプロセスに注目した支援と関係調整期以降の時期に合わせた支援を検討する(研究 1)。
3. 夫婦に相互に考えや希求すること、コミュニケーションの様相、ストレスに関するコーピング行動に差が見られたことで、夫婦個々に相違があることが示唆された(研究 2)。
4. 夫婦関係の調整に困難を示す夫婦には、妊娠中の安定期に産後に起こりうる問題について話す機会や産後の夫婦の状況を疑似体験する機会を得ることは、夫婦の関係調整を図ることにつながっていた。(研究 3)。

キーワード(Key Words)

妊娠期、育児期の移行期、夫婦、夫婦の関係調整

序章 緒言

近年少子化、核家族化の進行による家族形態の変化、女性の社会進出、価値観の多様化、育児を支える社会のネットワークの弱体化など、社会の変化がみられる。そのため、地域や家庭での子育ての機能が低下し、育児の孤立に伴う不安の増大など、子育てに関する問題が生じており、母親への育児負担の増大が懸念されている。

2021年国民生活基礎調査によると、一家族内の人数は年々減少し、平成4年に2.99人となり、初めて3人を割り、令和2年の平均世帯人数は2.27人であった。

¹⁾ そのため、子どもを育てるには、それぞれの両親の手伝いがある場合もあるが、晩婚化の影響で両親が高齢となり、育児を手伝うことができない場合や両親がまだ現役で働いている場合のため、基本的には夫婦で行うことになる。夫婦は、第一子の出生により親となるが、この時期は、親としての新しい役割を自覚し、育児という役割行動を修得する時期であり、2者関係から3者関係となり新しい家族関係が形成される。

家族関係も時代と共にその形態は変動（変化）しており、直系制家族から夫婦制家族へ移行してきている。直系制家族とは、夫婦と1人の既婚子とその配偶者、および彼らの子どもからなり、2つ以上の核家族が世代的に統合した形態である。夫婦制家族とは、夫婦と1人の子どもから成るもので、いわゆる核家族が単独で存在する家族形態である。²⁾

核家族化という最小単位の家族にとって、夫の育児における担う役割は大きく、妻にとって夫は身近にいることから、夫が育児に携わる機会の増加や、妻への心理サポートの役割も期待されている。

令和4年版男女共同参画白書によると、わが国では昭和55年以降、共働き世帯は年々増加し、平成9年以降は、共働き世帯数が男性雇用者と無職の妻からなる世帯数を上回っている。第1子出産前に就業していた女性の就業継続率は、上昇傾向にあり、平成22年（2010）から平成26年（2014年）に第1子を出産した女性では53.1%であった³⁾。

令和3年では、専業主婦世帯は全体の23.1%であり⁴⁾、多くの世帯では夫婦共に就業していることになる。そのため、家族に育児という新たな役割が加わることによって、必然的にそれまでの生活を再編成し直していかなければならなくなる。場合によって児の出生は、家族にとって大きなストレス要因ともなり、家族機能の破綻を来すとといった危機状態に陥る可能性も考えられる。家族を形成するにあたり、多くの親は、自身の被養育体験が意識的または無意識的に影響する⁵⁾。夫婦は、お互い違った環境で育っているため、自身の被養育体験が影響するとされている。そのため、夫婦で生活を再編成するには、お互いがストレス源とならないようにすることも求められる。

近年増加傾向である不妊治療後の出産は、妊娠出産すること自体が目標となり、

出産後の育児や家庭生活など新たな役割をイメージができていく場合があると言われている。⁶⁾

そのため不妊治療を経験した夫婦は、関係性が産後悪化する場合があることから⁷⁾、産後の夫婦関係に影響を及ぼす因子となる報告もされている。

これらのことから、親への移行期にある夫婦は、親役割を担う家族発達段階の移行期であり、発達の危機に直面しやすいと言われている。子どもが生まれると、家事や育児に時間を費やされ、家庭内での仕事・課題が増える一方で、互いのコミュニケーションの時間が十分に取ることができない。育児期の夫婦は男女の価値観やコミュニケーションのパターンの違いを知り、お互いの気持ちや考え方や受け止め方を学んでおくことが重要であると述べている⁸⁾。

わが国の文化として夫婦では、「主張を通さない」「譲歩的な態度」と妻が折り合いをつけながら夫婦関係の安定につながる傾向があり、欧米では、「言語化」し「確認」し合うことが夫婦関係の安定に必要とされている⁹⁾。

欧米では「夫婦が親になること」が家族システムにおける課題や問題性をはらむと指摘され、移行期の夫婦関係の危機は準備によって困難さを軽減できると考えられている。出産後に夫婦が危機に直面しないためには、夫婦の相互理解と協働感が高まるような夫婦関係の構築の必要であり、効果的に意志や感情を相手に伝え夫婦関係を強化することが問題解決に効果的であるとされている。そのためには、親になることで生じる生活の変化や葛藤に対して、準備し問題を予防するプログラムが出産準備教育として行われている。

欧米の出産準備教室としては、はじめて親になる夫と妻が円滑に親役割の取得するための準備教育として、父親も参加しての親役割への移行に重点をおき、その中で夫婦関係を強化しながら、親になるための葛藤や問題行動などを軽減することを目的としている。

日本の出産準備教育の内容は、妊娠中の過ごし方、分娩の仕組み、赤ちゃんの沐浴方法、ケアの仕方などで構成し、親になるための教育というより、立ち合い分娩に備える要素が強いと思われる。そこで、わが国における妊娠から育児への移行期の夫婦の抱える葛藤や問題について実態を明らかにすることが喫緊の課題であり、さらに、欧米の出産準備教育プログラムを参考にしながら、日本の文化や実情に合わせて参加しやすい回数や内容などを考慮しつつ、新しい家族を迎えた夫婦が、夫婦関係を強化しながら、親になるための葛藤や課題の軽減する専門的支援について明らかにすることが要請されている。

第 1 章 研究背景と問題

第 1 節 研究背景 育児期の夫婦における役割・調整に関する研究動向

1. 1. 育児期における夫と妻の役割

育児期にある夫婦は、第 1 子誕生により新婚期からへ養育期ライフサイクル上で推移し、この時期は、親役割獲得とともに配偶者との関係調整、生活習慣の変化、夫と妻の出生家族との関係性の再構築などの多くの課題を抱えることになる。

それは、子どもが生まれると、家事や育児といった家庭内の仕事・課題が増える一方で、互いの時間の確保や夫婦間での話をする時間を十分にとることができず、予測していなかった困難に直面して、争いや対立、怒りなどの葛藤を経験する場面が増え、結婚の質や夫婦関係の満足度、愛情の度合いなどの夫婦関係の良好さが、特に女性の側で顕著に低下することが明らかになってきている¹⁰⁾。妻は、子どもが生まれ、日常生活での負担は増し、そのため、妻の日常での満足度は低下し、一部で関係は悪化傾向が示されている。それは、育児不安や育児ストレスを抱えるなどの育児負担が、生じているためである。

核家族においては、妻の身近にいるのは夫であり、子育てについて夫（父親）の役割は重要になっており、夫（父親）の関与は増加傾向にある。

厚生労働省は、平成 22 年（2010 年）からイクメンプロジェクトを提唱し働く男性の育児への積極的な参画や育児休業取得を推奨している¹¹⁾。育児を担う男性を「イクメン」と称し、育児休業を取得して子どもとの時間を楽しむなど積極的な行動を起こす男性の意味合いを有する¹²⁾。

夫は子どもが生まれることで、父親の役割を担うことになる。父親の役割は、家族システム内に存在する夫婦関係や父子関係に対し、社会の要請にも 応答しつつ、父親として葛藤しながらも責任をもって主体的に関わり続けている¹³⁾

しかし、妻の側からは育児や家事などの大変さを夫が理解しておらず、家庭のことを夫に期待できないと捉えている妻は、約 30%と報告されている¹⁴⁾。妻は、自分の気持ちを打ち明け、受け止められれば孤立させずに、母親として心理的安定感と、充実感をもたらす¹⁵⁾ことが指摘されている。相手を支援する、相手から支援を受けるという考え方ではなく、“協働”という双方向的な育児が求められている¹⁶⁾。そこで、出産後に妊娠期から育児期に移行する際には、夫婦はお互いの果たす役割を認識し、実行することが求められており、円滑な移行ができない場合には、その支援が要請されている。

1. 2. 育児期における夫婦関係の変化

子どもが生まれることで、今までの夫・妻の関係から父親・母親の役割が追加される。Belsky によると、育児期はこれまでの夫婦二人の二者関係から、妊娠・出産を期に子どもを含めた三者関係へと移行が必要であり、夫婦が協力して、この移行期を乗り越えることの重要性を指摘している。¹⁶⁾

しかし、どう乗り越えるかには個人差が生じ、移行期に適切に対応できなければ夫婦関係は悪化する点を指摘している¹⁷⁾。その理由として、妻は、育児や家事などの大変さを夫が理解してくれることを願うにもかかわらず、仕事に忙しい夫に対して期待することが出来ないと感じている。そのような妻の気持ちを夫に打ち明け、受け止めてもらうことで、心理的安定感と充実感が得られている。そこで、妻を孤立させず、妻がこれで大丈夫なのだという感じを持てるような関わりが重要といえる。すなわち、日常生活における家事・育児に関連して、夫婦は、価値観やコミュニケーションのパターンの違いを知り、お互いの気持ちや受け止め方を学ぶことが重要であり¹⁸⁾、出産後に父親・母親の役割を果たすには夫婦関係の変化が必要になる。

その際に、基本的に夫（父親）が妻（母親）の気持ちを受け止めることが必要になる。子育て中の妻に対して夫には理解しようとする共感的な態度が必要であり、夫が妻の気持ちに寄り添うことで、妻（母親）の親役割の達成を支え¹⁹⁾、孤立することなく心理的に安定し充実感を得られながら育児をすることができる。特に1歳未満児では、育児に手がかかり夫の役割は重要であると考えられる。

しかし、当事者視点で、1歳未満児を持つ妻（母親）が夫（父親）との関わりから、自身の気持ちについて説明が要請されるもの研究は乏しい。そこで、著者らは、研究1で育児期の妻（母親）に対して面接調査を行い、育児の分担や役割などに関する自身の心理状況と夫に対しての具体的な思いについて把握することとした。

1.3. 夫婦関係に影響を及ぼす背景と要因

妊娠期から育児期へ移行する際に、夫婦は子どもを中心とした関係に変化を求められる。妻が妊娠し、子どもが生まれることについて田中は「夫婦間のコミュニケーション・相互性の観点では、上辺だけのコミュニケーションではなく、育児に従事する母親が父親からしっかり理解されているという実感がもてるかどうか、あるいは夫がどう引き受けてお互いの問題としていると捉えているかが、夫婦関係に良好な影響を与える要因となる」²⁰⁾と指摘している。

母親が育児を行う役割を担い、家族として円滑に機能するには困難を伴うものであり、夫婦関係は子どもの心身の発達にも大きく影響され、夫婦間の関係調整のあり方について研究が報告されている²¹⁾。岩尾らは「現代の多くの妊婦は核家族であり、妻の出産後の主な支援者として92.7%の妻は夫を挙げ、85%の夫は妻の主な支援者として意識している。」²²⁾と指摘し、妊娠期からの夫婦関係の調整の重要性が示唆される。

妊娠期の妻は、身体的かつ精神的な変化を日々体験しており、夫の言動や態度、思いやりなどが妻の心身に影響を及ぼすことは十分考えられる。明野によると「父親の発達に影響を及ぼす要因には、妊娠時の気持ちや父親としての自覚、妻へのいたわりや夫婦関係、子どもに対する親和性や関わり、育児行動と関係する」²³⁾と指摘している。

一方で、父親の側のアイデンティティ形成には、援助者の認識や援助の在り方、

夫婦の関係性の状況も関与する。妊娠期から育児期の移行時に円滑な夫婦生活を営むためには、夫と妻が相互の認識の差異を理解することが欠かせない。さらに育児期に良好な夫婦関係を維持するためには、夫婦間の認識の相違の理解に基づき夫婦の信頼関係を深めることが重要であり、その経緯と必要な支援の観点を明らかにすることが要請されている。

1.4. 海外の夫婦関係

多数の夫婦関係の研究が報告されている欧米の研究を以下に概観した。Fauber et. al は、夫婦関係の状態が親の養育行動に与える影響を検討して報告している²⁴⁾。この研究は、離婚サンプル 51 人および核家族サンプル 46 人の青年期の子どもに対して、夫婦関係が親の養育行動を媒介して子どもに影響しているかを実証的に検討した。夫婦関係の状況について、夫婦間の葛藤の有無によって評価した。

その結果、夫婦間での葛藤が増すほど、子どもに対して親が拒否的あるいは回避的な行動 (rejection / withdrawal) をとり、心理的な統制を行っており、夫婦間での葛藤が増すほど、親が子どもとの接触を避け、罪や不安を与えながら子どもを統制しようとする傾向がある²⁵⁾ ことを報告している。ケース数が少ないことから結果の一般性に課題も残るが、夫婦関係の悪化が親子関係の質の低下と関連しているという結果は「流出仮説」を支持している。

「流出仮説」とは、夫婦関係が悪化すると親子関係も同様に悪化すると論じた仮説である。夫婦関係の指標を離婚への可能性で測定しているが、この変数の数値が高い親ほど、子どもに対する情緒的サポートが低下する傾向が有意に示されている²⁶⁾。

仕事と家庭とのバランスや役割間の影響について、分離 (segmentation)、補償 (compensatory)、流出 (spillover) の 3 つから検討されてきている²⁷⁾。分離とは両方の役割が相互に独立していること、補償とは一方の役割での不満を他方の役割での満足によって補い、均衡を保つこと、流出 (Spillover) は、一方の役割での状況が他方の役割での状況に、肯定的あるいは否定的に影響することが仮定されている。家族心理学や産業心理学では、流出仮説を中心に仕事役割と家庭役割との間の役割間葛藤 (work-family conflict) が、既婚女性の精神的健康に及ぼす影響に焦点を当てて検討されてきている²⁸⁾。

具体的には、夫婦関係で何らかのストレスを抱えると、親子関係の中で、八つ当たりをする等の解消を図る。あるいは親子間の接触を避けるようになるという。これらの現象を、迂回 (detouring)、またはスケープゴートイング (scapegoating) と呼んでいる²⁹⁾。

子どもにとって必ずしも良い影響を与えないとして、夫婦関係の悪化が親子関係の悪化をもたらすという意味で流出仮説と呼ばれている。また、補償仮説 (compensation hypothesis) は、夫婦関係で情緒的な満足が充足できないとき、それを親子関係で満たそうと考える³⁰⁾。

夫婦関係が良好でない場合は、むしろ子どもに目が行き届き、情緒的なサポート

をより提供するように動機付けられると考えられている。日本では、「母子密着」の議論がよく引き合いに出されている。夫婦関係と親の養育行動の関連として、流出仮説と補償仮説という、相反する 2 つの理論的な仮説があり、夫婦関係が悪化すると、親の養育行動の質も悪化するのか、それとも向上するのかという争点があるとされる。

親の養育行動の規定要因に関する理論として、ペンシルベニアにおいて乳幼児をもつ夫婦関係に関する縦断的調査を実施し、100 組の夫婦を対象に、夫婦関係の質の変化と親子関係との関連性を検討され、分析の結果、母親の夫婦関係の質が低下した場合、より積極的に子どもと交わっていることが確認されている。全ての対象者の養育行動において、補償関係が確認されたわけではないが、夫婦関係と親子関係の間に補償的な関係があることが示唆されている³¹⁾。

夫婦関係の状態を知る 1 つの指標として、夫婦の会話時間と夫婦関係の良好性がある。それは、夫婦間の会話時間が育児不安と有意な関連を示しており、夫婦間の会話時間が長い母親ほど、育児不安の低い者が多く、短いものに育児不安を抱えるものが多くなっているなど、夫婦間の円滑なコミュニケーションの成立およびその過程に関する研究的な検討は重要と考えられる。

1. 5. 育児期における夫婦間のコミュニケーションの様相

育児期は親への移行期であり、1 組の男女が結婚して独立し、子どもの誕生によってその基礎的な構造を形成していく時期であり、その過程においてそれぞれ大きな発達的变化を経験する³²⁾。これまでの夫婦の二者関係から子どもを含めた三者関係へ移行することで、夫婦に夫・妻としての役割以外に父・母としての役割も加わり、夫婦の関係性に大きな変化が生じる³³⁾。

この親へと成長していく移行の過程で、夫婦は育児の分担や生活の仕方に関する葛藤や不和を経験することになり、適切に対応できなければ夫婦関係は悪化するとされている³⁴⁾。

神谷は、親への移行過程における夫婦の役割相互調整は、日常的な子どもとの生活における実際の育児分担、夫婦間のコミュニケーションが繰り返される中で、夫婦関係満足や夫婦双方の性役割感や親役割感が大きく揺らぐダイナミックな過程を辿り、その家族のルールとパターンを形成・再構築していくことである³⁵⁾と述べている。

また、Belsky は、250 組の夫婦を妊娠中から子が 3 歳になるまで縦断的に調査³⁶⁾した研究で、親への移行期に夫婦関係を方向付ける 6 つの要素を見いだした。6 つの要素とは「自己」「性イデオロギー」「情緒傾向」「期待」「コミュニケーション」「摩擦管理」である。

家族システムの理論である Olson の円環モデルでは、①凝集性（きずな）、②柔軟性（かじとり）、③コミュニケーションの 3 つが重要概念とされ、コミュニケーションは凝集性と柔軟性の機能を促進するものであると位置づけられている³⁷⁾³⁸⁾。

以上のことから、家族システムやその下位システムである夫婦システムの機能を

良好に維持し、親への移行にともなう発達の課題を乗り越えるためには、夫婦のコミュニケーションは重要な要素と言える。

平山によれば、欧米では 1920 年代頃から夫婦についての理論的・実証的研究が行われ、1960 年代に入って不和に悩む夫婦とうまくいっている夫婦ではコミュニケーションスタイルが異なることが注目され、両群の比較研究が行われるようになった³⁹⁾という。具体的には、夫と妻ではコミュニケーション能力・行動に違いがみられること⁴⁰⁾が報告されている。例えば、葛藤場面におけるコミュニケーション行動では、妻が要請的 (demanding) であるのに対し、夫は回避的 (withdrawal) 態度をとる傾向が強く、要請一回避パターンが観察されること⁴¹⁾が明らかにされた。夫婦研究が盛んな欧米に比べて、わが国においては夫婦間のコミュニケーションに関する研究自体が多くはないが、その中では中年期の夫婦を対象としたものが多くを占めている⁴²⁾。

1.6. 育児期にある夫婦の役割調整

子どもが生まれることで父親・母親の役割が加わり、それぞれの役割が変化する。Belsky によると「子どもが生まれることで夫婦関係に変化をきたし、第一子が生まれた夫婦の 7 割近くは結婚生活に不満を覚えることになる」⁴³⁾と述べている。

厚生労働省の平成 30 年 (2018 年) の人口動態統計の年間推計によると 2018 年における日本国内の婚姻件数は 59 万 0000 件となり、婚姻率は 0.47% (推計値) である⁴⁴⁾。これは前年 2017 年の値 0.49% (確定値) から 0.02% ポイント減の値となり、結婚後 5 年未満の離婚率が最も高く、全体 3 分の 1 を占めている⁴⁵⁾。

結婚後 5 年未満の離婚率が高率であるということは、子どもがまだ幼い状況の中で離婚する可能性が高いということでもあり、両親の離婚に伴う子どもへのさまざまな影響が危惧される。現在、女性の就業率の高まりと共に、第 1 子出生時に有職の母親の割合は、2010 年では 43.3% だったのに対し、2015 年では 52.9% と増加している。育児休暇の取得率は、母親は 93.5% であるのに対し父親は 2.0% となっている⁴⁶⁾。

これは父親が育児に参加したくても参加できない状況である女性の育児休業取得率の上昇は、出産後も働き続けられる環境になってきている。しかし、父親の育児休業率から考えると、出産後まもなくの育児はほとんど母親が担っていることを意味している。そのため多くの女性は、子育てにおいて日本では性別役割分業意識が残っていると感じており、育児期の夫婦関係において何らかの影響を及ぼしている。

夫婦関係を維持・安定化させるために必要なことは、夫婦に付与された重要な役割の遂行を、自分に対する配偶者の役割期待を推測し、その役割期待に応えるように行うことである。

また、育児期における夫婦は、妊娠・出産・育児を通してお互いの役割が変化するるので、夫婦間で今までの関係性が変化し、出産前の妻・夫の役割から、新たに父親・母親としての役割が求められる。子どもをめぐる考え方や対処の違いや家族における時間とエネルギーの使い方や調整を迫られ、夫婦にとって大きな葛藤をもた

らすと考える。

第1子の誕生に伴い、親という地位を得たとき、その子どもに対して親として期待される行動のパターンのことを親役割というのであり、その役割を夫婦相互に調整し、夫婦二人で親としての役割をどのように担っていくかというルールとパターンを形成することが、育児期以降における課題とされている。

そこで、親になる前の準備として、育児期への移行に向けて夫婦それぞれの役割調整や親準備教育に関わる支援の検討が要請される。

1.7. 我が国の出産準備教育の現状と諸外国との相違

アメリカ、イギリスでは、初めて親になる夫婦が良い夫婦関係を維持し、親になって生じる課題に対処できる知識や技術を学ぶプログラムが行われている。プログラムは全8～12回程度のシリーズで行われている⁴⁷⁾。イギリスやアメリカでの出産準備教室としては、初めて親になる夫と妻がスムーズに親役割を取得し、特に父親への移行に重点をおき夫婦関係を強化しながら問題を予防することをめざしている。演習を取り入れた参加型形式などの新しい形式をとっている⁴⁸⁾。

プログラムのねらいは、親になることで生じる生活の変化や葛藤に対して準備を行い、問題を予防すること、親役割の準備をねらいとしたものである。

実際の内容としては、夫婦関係を良くするスキル、親になってからの苦労、ストレス、怒り、家事分担にどう対処するか、乳児の世話の仕方である。夫婦が効果的に意思や感情を伝え、夫婦関係を強化することが問題の予防や解決に効果がある⁴⁹⁾。それは、子どもが生まれることは、夫婦が親になるための移行期であるため、危機的状況を招くことであり、それは準備によって困難さを軽減できると明らかになっている⁵⁰⁾。

危機的状況を避けるための準備としての予防的プログラム実施は、妊娠期のうちに行うのが最も効果的といわれている⁵¹⁾。妊娠期の親というのは出産を控え、教育や援助、セラピーをうけることに抵抗がない、まだ親になっていないので自分の子育てを評価されると感じないからだとして述べている。初めて親になる人たちはふつう良い親になりたいと願い、学ぶことに意欲的であるため、妊娠期に十分な情報や学習の機会を提供していくことが予防に効果的である⁵²⁾。

日本の出産準備教育は、内容は、妊娠中の過ごし方、分娩の仕組み、赤ちゃんの沐浴方法、おむつ交換などの実際の方法などを学んでおり、親準備教育というより、立ち合い分娩に備える要素が強いと思われる。主に育児に関する実際的知識や技術の伝達を主とした指導型形式をとっている場合が多くみられる。

出産前に、出産後の育児の具体的なイメージができず、児の出生に対する期待だけが高いほど「こんな大変なのか」「こんなはずではなかった」という戸惑いが大きく、夫婦の親役割の獲得と育児への適応を困難にする。そのため、出産後に問題が生じてから対応するのではなく、妊娠中からの準備が必要と考える。

しかし、日本では、都内の両親学級の実施を調査結果から1～2回であり、最小では立ち合い分娩のための両親学級がある程度であり、欧米で実施されている8～

12 回程度のプログラム内容を同様に実施しようとしても現実との乖離が著しく、また、就業状況を鑑みると時間の調整も困難と思われる。

そのため、国内における必要十分な両親学級の頻度との実施内容についての提案が要請される。

第2節 夫婦の役割・調整に関する用語：研究動向の文献的検討

育児期にある夫婦は、子どもの養育に伴いライフスタイルが変化するため、夫婦関係は大きく変化し、結婚満足度が低下する時期と言われており、夫婦関係において葛藤や不和を体験することになる。それを避けるには、相互理解と協働を高め、お互いに相手が考える役割期待を推測できるように、夫婦間での夫婦の役割調整が必要である。

そこで、育児期の夫婦における役割・調整に関する研究動向を把握し、育児期の夫婦の支援について示唆を見出すことを研究目的とする。

2.1 研究方法

医学中央雑誌 Ver.5、CiNii を用いて「夫婦」「夫婦関係」「役割調整」「調整」「子育て」「乳幼児」をキーワードに 2008 年から 2018 年の 10 年間に発表されている論文を検索の対象とした。その中で会議録や特集の解説などは除外した。

2.2 結果 (表1)

「夫婦関係」医学中央雑誌 120 編、Cinii では 691 編、「夫婦」「調整」医学中央雑誌 90 編、Cinii では 102 編、「子育て・乳幼児・夫婦関係」73 編、Cinii では 10 編が抽出された。「夫婦」「役割調整」医学中央雑誌 16 編、Cinii では 5 編であった。その中で妊娠期から育児期の乳幼児をもつ夫婦における夫婦関係、夫と妻及び父親・母親の役割識の相違などに関する量的研究論文 22 編、質的研究論文 3 編、会議録や特集の解説などは除外した。

対象研究 25 件の掲載年では 2014 年 7 件が最も多く、2013 年 4 件、2018 年 4 件、2008 年 3 件、2009 年 2 件、2012 年 2 件、2010 年、2017 年、2019 年の 1 件であった。

対象研究の内訳は、量的研究が 22 件、質的研究 3 件であり、調査方法は質問紙調査が 22 件、半構造化面接 2 件、フォーカスグループインタビュー (FGI) 1 件であった。

研究対象は、夫婦 16 件、母親 5 件、父親 4 件であった。分析対象となった文献の内容は、大きく 4 つの項目に分類できた。「相談」に関する研究 9 件 (36%)、「役割に関する研究」6 件 (24%)、「夫婦満足度」に関する研究 6 件 (24%)、「メンタルヘルス」に関する研究 4 件 (16%) であった。

2.2.1. 「相談」に関する研究動向

乳児を持つ親のメンタルヘルスの関連要因について分析した結果、母親はパートナーの子どもへの関わり方がメンタルヘルスに影響があると明らかにし、夫婦間での子育てに関する情報交換や子育ての方針についての話し合いなどの時間をもつことが重要であると述べている⁵³⁾。

夫婦関係では「夫婦に共通の話題がある」「夫婦共通の友人がいる」「妻は相談してくれる」で有意差を認め、夫婦が多く会話することは父親への育児への関わりを

増やすことを話し、夫婦それぞれの役割をどう分担していくかという話し合いの必要性を再認識してもらうことが必要であると述べている⁵⁴⁾。

初産婦により仕事復帰後のワークライフバランス（以降 WLB とする）の実現に向けた心理社会的・実践的準備として【仕事復帰に向けた情報収集】【自分なりの働く母親像の探索】【夫婦の協力体制の再構築】【家庭外の支援体制の調整】【仕事復帰に向けた生活の調整】の5つのテーマを導き、仕事復帰予定の初産婦は夫婦の協力体制の再構築を妊娠中、出産後に行うことが重要であると述べている⁵⁵⁾。

母親が子育てと仕事を両立してくためには、限られた時間内において、家事育児を行うには、夫との分担が不可欠であり、日頃から夫と会話をする時間を取り、気持ちや子育てに関することを共有し役割の分担と調整を行っていくことが子育てと仕事を両立するための一つであると述べている⁵⁶⁾。

夫婦のペアレンティングは両者のやり取りがベースになって夫婦間で調整されていると述べている⁵⁷⁾。

第1子誕生に伴う夫からみた夫婦関係は【夫婦共通の目標への歩みの開始】【育児の大変さを理解し妻をサポートする役割の追加】【夫婦関係のバランスを保つ工夫や再調整の実施】【親になるお互いを受け入れようとする姿勢の出現】をあげ、夫婦は再調整を行うことにより、親になるために共に成長していくことの必要性に気づき、双方が親になることを受け入れようとする姿勢を持つと述べている⁵⁸⁾。

父親が積極的に関われば、育児の難しさを認識するため夫婦のコミュニケーションを豊かにしていくことが大切であること⁵⁹⁾、子育てにおいてはお互いに促進または批判により、全体として夫婦ペアレンティングを夫婦間で調整されていると述べている⁶⁰⁾。

2.2.2. 「役割」に関する研究動向

核家族や女性の社会進出に伴い男は仕事、女は家庭といった性役割が消滅しつつあることから、家庭での父親の家事・育児への参加が重要な役割を担うと述べている⁶¹⁾。

母親は、「夫への育児参加」への不満を感じており、夫への主体的育児参加や母親への精神的支えという父親の役割を遂行して欲しいと願っていると述べている⁶²⁾。

「有職」の夫婦間の育児に関する役割分担が主婦のように明確でない。「主婦」の夫婦は、夫婦揃って子育ての喜びを感じられるよう、社会における育児支援体制の強化が重要。「有職」の夫婦は、夫婦間の意識は共通した因子が多く、役割分担も主婦のように明確ではない。育児負担感は「主婦」妻に強く家族内社会における育児支援体制の強化が重要である。「有職」の夫婦間の育児に関する役割分担が主婦のように明確でない⁶³⁾。

第1子の段階から肯定的な養育態度を認めながら、パートナーとの協力関係も視野に入れて、養育者自身の健康支援や子どもの成長に応じた家族支援を行うことの必要性がある⁶⁴⁾。夫婦での生活や育児への調整を促進するような働きかけが重要

である⁶⁵⁾。

配偶者という重要な他者からの育児に関する役割期待を感じ取ることが、協同育児につながると述べている⁶⁶⁾。

2.2.3. 「夫婦満足度」に関する研究動向

父親のQOL関連構造は夫婦の関係性が基盤となり、夫婦の満足度を經由してQOLを高める方向に影響する可能性が示唆された⁶⁵⁾。

夫婦関係の満足度は、相互に高めあう関係または低めあう関係であると述べており⁶⁷⁾ 夫婦関係が上手くいけば、人間関係もうまく行くようになり、安定した子育てが望めると述べている⁶⁸⁾。

または、夫婦関係を良好にしたり、子どもへの愛着を高めたりする働き強化が必要であると述べている⁶⁹⁾。配偶者と育児における連携、調整を図り、互いの考えを共有することは育児に対する満足度の高さにつながり、心理的な健康状態のよさを意味する主観的幸福感を直接高めると述べている⁷⁰⁾。

役割が調整されていない夫婦であっても、必ずしも不和をもたらすのではなく、共感的なかわりによって関係性を維持していると述べている⁷¹⁾。

2.2.3. 「メンタルヘルス」に関する研究動向

妻のサポート期待が高いほど夫の抑うつが高い⁷²⁾。母親や父親の育児ストレスと夫婦関係や自己の健康認識が影響するので、夫婦関係に着目した健康管理プログラムの開発が必要である⁷³⁾。親の心身の状態と親の不安の有無、親を取り巻く生活環境をアセスメントすることが必要である⁷⁴⁾。

夫婦関係が良好な場合は、母親の自尊感情を高め、結果的に母親のメンタルヘルス向上に関連すると述べている⁷⁵⁾。

以上のことから、育児期の夫婦において「相談」「役割」「夫婦関係」「メンタルヘルス」研究の現況を明らかにしたが、育児期の夫婦関係に不和が生じることも述べられており、そのためには夫婦で協働して育児を行うには、夫婦間でのコミュニケーションが重要な役割を果たす。育児期における夫婦のコミュニケーションの成立の過程と支援のあり方について、研究的な検討が必要と考えられた。

2.2.4. 「育児の協働」に関する研究の動向

育児の協働の構成因子として「相談と共有」「公平性の調整」「相手からの気づかい」「効率性の追求」「相手からの制御」が見いだされ、共働き夫婦の育児の協働においては、夫婦間の相談と共有が重要であると述べている⁷⁶⁾。

第3節 本研究の概念（図1）

本研究は、妊娠から育児への移行期にある夫婦であり、家族発達段階においては移行期にあたるため、Meleisの移行理論を用いた。

Meleis 理論とは、移行期の心理的傾向としては、変化の実際の中で不安定性や混乱、苦悩を感じる過程があると言われている。そのため、妊娠期から育児への移行期にある夫婦は不安定性があり、育児をする上での夫婦間で混乱や苦悩を感じる過程がある。⁷⁷⁾

本研究では、育児への移行期にある夫婦は、二者から児を含めた関係へ移行することで親という役割の発達的变化を経験から混乱や苦悩を感じる過程において、相手への葛藤を感じることに伴い、夫婦の関係性が変化することからこの理論に当てはめられると考えた。

Belsky によれば、夫婦が協力して、この移行期を乗り越えることの重要性を指摘しており⁷⁸⁾ 妊娠から出産後移行期過程にある夫婦は、今までの夫と妻の役割から父親、母親の役割を担うという役割の発達的変換を経験し、夫婦二者から児を含めた関係に移行することになるため、夫婦の関係性は大きく変化する。そのため夫婦の関係を再調整が求められ、助産師としての支援が必要と考える。

第 4 節 本研究の目的

本研究では、以下の研究観点で、育児期にある夫婦の関係性における葛藤や回避の実態と経緯について、当事者の叙述から解析し、夫婦の家事・育児に関わる関係調整の支援プログラムについて提案することを目的とした。

1. 妊娠から育児への移行期における、家事・育児に関わる夫婦の関係について、妻の叙述に基づいて実態と課題を把握する（第 1 研究）
2. 育児期にある妻が夫に抱く葛藤と回避のプロセスをもとに、夫婦関係を調整する経緯について明らかにする（第 1 研究）
3. 育児行動が安定する産後 3, 4 か月の夫婦について、家事・育児に関わる関係調整について実態を調査し、「夫婦ペアレンティング調整尺度」「夫婦コミュニケーション態度尺度」「コーピング尺度」の観点で夫と妻の認識の違いを明らかにする（第 2 研究）
4. 上記の研究結果に基づいて、妊娠から育児への移行期の夫婦の関係調整支援プログラムを開発し、助産師による支援のあり方について提言する。

（第 3 研究）

3. 1. 研究キーワード：妊娠期、育児、移行期、夫婦、関係調整、支援方法

3. 2. 用語の定義

妊娠期：妊娠してから分娩に至るまでの時期を指す

移行期：出産してから育児に慣れまでの期間のことで、本研究では出産後 3, 4 か月までの時期を指す

関係調整：夫と妻で役割を調整すること

第 5 節 研究構成

育児期にある夫婦が、夫婦関係において葛藤や不和を体験するのを避けるには、相互理解と協働観を高め、相手が考える役割期待を推測し、その役割期待に応えるには、夫婦間での夫婦の育児分担や親としての役割調整が必要となる。

「相談と共有」「公平性の調整」「相手からの気づかい」「効率性の追求」「相手からの制御」育児の協働の構成因子が見いだされているが、夫と会話をする時間を取り、気持ちや子育てに関することを共有し役割の分担と調整を行う等、夫婦は再調整を行い、親になるために共に成長することが期待される。

そこで、本研究では以下のように研究を構成した。

まず、現在の妊娠から育児への移行期にある夫婦の役割に関する文献研究を概説した（第 1 章）。

そして、妊娠期～育児期の移行期にある夫婦の家事・育児分担を通しての夫婦の関係調整の過程について、妻への育児の協働などに関する思いや気持ちをインタビューから質的に検討した（第 2 章、研究 1）。

さらに、出産後 3, 4 か月にある夫婦の家事・育児分担を通しての夫・妻での家事・育児における認識の差について実態調査を行い、夫婦ペア別での認識の差の実態を明らかにした（第 3 章、研究 2）。研究 1 と 2 を踏まえて、育児期にある夫婦の家事・育児分担を通しての夫婦の関係調整ができるためのプログラムを構築し、その有用性を検討した（第 4 章、研究 3）。

手法	研究内容	
理論的研究	第 1 章	第 1 節 研究の背景と問題点 育児期の夫婦における役割・調整に関する研究動向 第 2 節 夫婦の役割・調整に関する用語の検討： 研究動向の文献的検討
	第 2 章	研究 1 「妊娠期から育児への移行期にある夫婦の家事・育児分担を通しての夫婦の関係調整に関する研究」 -育児期にある妻が夫に抱く葛藤と回避のプロセス-
実証的研究	第 3 章	研究 2 「妊娠期から育児への移行期にある夫婦の家事・育児に分担に関わる夫婦の認識についての実態調査」
	第 4 章	研究 3 「妊娠期から育児への移行期にある夫婦の関係調整をするためのプログラム開発」
	総合考察	第 1 節 結論 第 2 節 本研究の臨床的有用性 第 3 節 本研究の限界と今後の展望

妊娠期から育児への移行期にある夫婦は、家事・育児の分担や生活などに関する葛藤を経験し、対応できなければ夫婦関係は悪化するため夫婦の関係調整が求められています。

問題意識とは、移行期の夫婦の問題の明確化であり、夫婦が親準備を改善するという関係性の調整、出生前教育に父親を含めることの重要性について、明らかにすることが今後の課題と考えた。

日本ではまだこうした夫婦関係に焦点づけたプログラム研究は少ないが、夫婦のコミュニケーションに着目した研究⁷⁹⁾でプログラム効果が示唆されているほか、近年では初めて親になる両親へのメンタルヘルスリテラシー向上を目指した心理教育的プログラムの開発^{80) 81)}、夫婦が共に育児をするコペアレンティングを促進するプログラムの開発や調査⁸²⁾が進行中であり、今後の効果検証が期待される。

妊娠期に出産準備教育が行われているが、妊娠・出産についてのことが主に行われており、新しい家族を迎えるための準備として、夫婦関係に着目した内容になっていない。

育児への移行期とは、児の誕生による生活の基礎的構造を形成及び調整する時期の過程において夫婦は役割の発達的变化を経験することになり、夫婦二者から児を含めた関係に移行することで、夫婦の関係性は大きく変化する。

そのため、夫婦は育児の分担や生活などの関する葛藤を経験し、葛藤を回避できなければ夫婦関係は悪化することが予測できるので、夫婦の関係調整が求められている。

第 5 節 研究倫理

東京医療保健大学研究協力等推進部の倫理審査の承認を得て実施した。

(院 29-1) (院 31-66C)

1. 研究参加については、研究対象者に研究目的・内容・方法の説明を行い、研究協力は本人の自由意志であり、面接開始後も途中で面接をやめることもできることを文書と口頭で説明を行った。研究への協力を行わなくても、対象者に不利益が生じることはないことを説明した。(研究 1、研究 2、研究 3)
2. 対象者が思いを語る時、話したくないことは話さなくてよいこと、予期せぬ感情で身体的・精神的に負担がかかるような場合は、面接を中止することを約束する。面接内容は匿名性の確保に努め本研究以外には使用しないことを約束した。(研究 1)
3. 得られたデータは、研究者のみが扱い、鍵のかかる戸棚に保管し、第三者の目に触れないように、研究者が厳重に保管・管理しプライバシーを厳守する。また、研究終了後に一定期間を経て裁断廃棄することを研究対象者に説明し、同意の得られた場合に同意書に自筆の署名を得た。(研究 1、研究 2、研究 3)
4. 研究終了後は、IC レコーダー内の音声は消去し、電子データは専用の消去ソフトで確実に消去し、電子データを印刷した場合は、シュレッターにかけ、守秘性と匿名性の保証を厳守した。(研究 1、研究 2、研究 3)

第 2 章

研究 1 : 妊娠期から育児への移行期にある夫婦の家事・育児分担を通して夫婦の 関係調整-育児期にある妻が夫に抱く葛藤と回避のプロセス-

育児期にある妻を対象として、夫による家事・育児の分担を通して、夫に抱く葛藤などの気持ちや思いをインタビューし、それを半構造化面接による叙述から、妻が夫の育児行動や言動に関する葛藤と、葛藤が回避・解消している場合はその回避・解消のプロセスとその課題について明らかにした。

育児期の夫婦では、妻側から見ると、育児や家事などの大変さを、夫が理解せず、家事や育児分担の役割を期待できないと捉えている妻は約 30%と報告⁸³⁾されている。このことは、出産後のストレス下にある母親が、「子育てが辛い、子どもが可愛く思えない」等、育児行動の形成の困難に繋がる⁸⁴⁾と考える。

出産後のストレス下にあるため、今までの生活が育児ということが増え、夫婦の関係性が変化することになり、お互いが相手に対して葛藤を感じるようになる。

メリシス理論では、人間の生活プロセスにおける連続性と不連続性の両方に網羅されていると述べている。このことから妊娠期から育児への移行期にある夫婦においても同様なことが言えると考えられる。そこで育児期にある妻が夫に抱く葛藤と回避のプロセスを明らかにした。

また、育児への移行期にある夫婦はお互いに新しい役割を獲得するために葛藤が生じるのではないかと考える。それは、相手に対しての葛藤であるため、対人葛藤と同じこと考える。対人葛藤とは、「個人の欲求、解決目標、期待が他者によって妨害されていると個人が知覚するとき生じる対人過程であり、感情、認知、行動などを含んでいる」⁸⁵⁾⁸⁶⁾と定義される概念である。対人葛藤が生じると、人はそれを解決するための何らかの行動（行動しないことも含む）を試みる。その行動は対人葛藤方略と呼ばれる⁸⁷⁾⁸⁸⁾。

これらのことから、育児への移行期にある妻が直面する葛藤と回避のプロセスを明らかにすることで、対人葛藤方略を持ちいながら、今後の夫婦の関係調整への支援の一助になると考える。

1. 目的

育児への移行期にある妻を対象として、半構造化面接を行い、育児期にある妻が夫の育児行動や言動支援に関する葛藤と回避の事例を把握することを目的とし、育児期の夫婦への夫婦の家事・育児を通しての関係調整への支援のあり方を検討する。

2. 対象と方法

2.1. 研究デザイン：質的記述的研究

2.2. 対象者

未就学児の子育てをする女性 33 名を対象とした。初産婦 25 名、経産婦 8 名であった。対象者の選定条件は、妊娠・分娩が正常に経過し、児体重 2500 g 以上で、東京都下の保健センターにおける時の健康診査の来所している母子を対象とした。

2.3. 調査期間：2017 年 4 月から 2018 年 9 月まで

2.4. データ収集方法

本研究では、インタビュー調査と質問紙による基本調査とで構成した。

2.4.1. インタビュー調査

インタビューガイドに従い、研究者が対象者に個別にて半構造化面接を実施した。

- 1) 夫に家事や育児について、やってもらってうれしかったこと
- 2) 夫に家事や育児についてやってもらってうれしくなかったこと
- 3) 家事や育児に関して、夫から言われてうれしかったこと
- 4) 家事や育児に関して、夫から言われて残念だと感じたこと
- 5) 日頃から妻の立場に立って考え、または考えようとしてくれているか
- 6) その時の自分の気持ちと夫に対する反応でどうだったか
- 7) 夫の態度が、自分の思いに反した時、どうすればよかったと思いますか
- 8) 家事や育児に関して前回の出産後と違ったことはあったのか。(経産婦の場合)

対象者の同意を得て IC レコーダーに録音した。インタビュー所要時間は平均 42 分 (SD±25~60 分) であった。対象者の希望するプライバシーの守られる場所にて実施した。

2.4.2. 個人属性に関する基本調査

対象者には、インタビュー実施前に基本属性等の調査票の記入を依頼した。

調査項目は、(1) 母親の属性 9 項目、(2) 父親の属性、(3) 子どもの属性 3 項目の計 15 項目を用いた。

2.5. 分析方法

面接内容から逐語録を作成して、データとした。家事・育児を通して、夫の言動や態度に関する事、そのときの妻の思いが表出されている部分から、葛藤があったが解消に至った事例と葛藤のまま至った事例に分類し、その時期ごとに分類した。個別の半構造化面接から逐語録作成し、データとした。逐語録を精読して、研究目的について語られている部分を文脈に留意しながら抽出し、内容を示す内容を作成した。さらに内容を繰り返し読み、意味内容の類似性や相違性を比較し、類似性に基づいて内容項目を抽出してし、さらに表現の抽象度を生成した。分析過程において、質的研究に精通し、母性、助産領域の専門家の複数の研究者のスーパーバイズ

を受け、分析の妥当性を確認した。

分析の際は、既存の対人葛藤理論を用いて、研究対象者の語りを解釈した。

2.6. 事例を通して内容項目を作成する経過について

事例を通して内容項目を作成する経過について示した。

以下の具体的な手順を追って、本研究の目的に則して、育児を開始した妻が、出産前に抱いていた夫への期待と葛藤、それを回避するための方法の模索過程についての構成概念を明らかにした。さらに、育児期にある妻が夫に対する葛藤と回避からその経過についてまとめた。

- 1) 面接内容を逐語録に起こして、意味的なまとまりで区切り、分析単位とした。
- 2) 最もテーマに関連する分析単位からその内容を検討した。
- 3) 内容項目と他の分析単位を比較検討し、類似の分析単位をまとめた。
- 4) 内容項目の相互性を検討して、一括した。
- 5) 内容項目の関係および変容過程を示した。

3. 結果

3.1. 対象者の属性（表 2, 3）

対象者の年齢は 24 歳から 42 歳であり、平均年齢は 35.2 歳（SD±4.1）であった。児の月齢は 4～38 か月、平均月齢は 14.1 か月（SD±11.5）、初産 12 か月（SD±9.62±14.8）経産 21 か月（SD±14.8）であった。初産婦 25 名では、無職者 14 名、有職者 11 名そのうち 8 名が育児休業中であった。経産婦 8 名では、無職 4 名、有職者 4 名そのうち 1 名が育児休業中で、全員が夫と子どもとの核家族であった。

3.2. 育児期にある妻が夫に対する葛藤・回避のプロセス（表 4）

育児期にある妻に対して、夫に対する思いについて葛藤・回避のプロセスを明らかにするためにインタビューを行った。

以下の文章において、内容項目〈 〉、内容項目（抽象度をあげたもの）【 】生データを斜体で表し、研究対象者の語った言葉を「 」で例示する。これらの分類を時間軸に沿って図 4 に示した。

1) 出産後の妻の思い

今まで夫婦だけの生活だったが、子どもが生まれたことで、子どもを含めた生活の開始となった時期である。

(1) 【家事・育児の困難に直面】子育てをしながら家事を担っている。それは家事を負担に感じたり、慣れないことが多く、育児を負担に感じたりする。それは、子どもが産まれる前は、妻が思うように時間を調整して、家事を計画通りに行うことができる。しかし、子どもが産まれることで、家事予定通りに行うことができず、負担に感じている。また、子育て初めて場合は、子育てが想像と違って辛く感じる。

その過程で、夫が共に家事を受持ち、援助することで、負担感は軽減し、夫との間に新たな関係が作られている。また、夫が家事育児に協力してくれなかったり、夫が家事をしても妻の思うようにしなかったり、夫から家事が十分に行われていないことを指摘されることは、妻の負担感を増強する。

【思い通りにできない】では、妻の思い通りに家事を処することができずに苛立ちが生じる妻は、夫に家事を頼み、引き受けてくれるが「掃除を頼むとやろうとするけど先に休憩が入って、もうこんな時間だからやらないという」と、結果的に自分が行うことになり、日常的に自由になる時間が少なくなっていることを感じる。

妻は「掃除をしようとするときに限って、子どもがぐずってできないでいると「ちょっと床が汚いね」という夫の「そうゆう一言が刺さる」言葉に、傷ついて心が乱れる。

【私ばかり我慢をして】夫の家事協力の仕方には納得できないが、我慢して受け入れようとしている。妻は夫の家事協力に対して思うようにやってくれなかったり、感じることはあるが、「夫は「ほっといていいよ」と言うけど、夫は掃除・洗濯が嫌いなので、どんどん汚くなるし、洗濯物がたまるし、」と家事が片付かないことに改めてイライラが募る。そこで、夫に意見をしようと思うが、「他のことをやってくれることもあるので。そこを言うのはやめようと思って、我慢して私が片付けている」と心に収める。

一方で、夫は「食事を作ってくれるけど、凝り性で3時間かけて食事を作る。他の家事と同時にできなくて、イライラする」有難いが、マイペースで今の状況の理解が乏しいと感じる。その背景には、「家事は妻がやるものだと思っている。女の人には自分のやり方があるので。夫がやるより自分でやった方がいいと思う」と、2人の時のまま固定的な考えでいることに呆れる。実際は、産後の育児など、家事が増えているので、「子どものことだけで精一杯なのに、それに家事や育児が加わると大変。90」お手伝いしてくれるサービスをもっと気軽につかえろという考えに至る。

【想像以上に辛い】子どもにひどく泣かれ、睡眠不足で想像以上に辛くイライラが募る。子育てをしていく上で「子どもとの生活が想像を超えすぎて、こんなに泣くものかなあ」という感じで、精神的にまいちゃった。泣かれることにストレスを感じた。79「子どもが泣くことに対して想像以上でストレスを感じている。また、「子どもが産まれてから、自分の睡眠がこんなに削られるとは思ってもなかった。精神的につらかった 87」子どもが産まれてからは、睡眠時間を削られ、想像以上に精神的に辛いとも思っている。

「子どもの寝付きが悪く睡眠不足が貯まって、子どもの泣き声にいらいらが募るとその思いを夫にその気持ちをぶつける。99」睡眠不足になるとイライラが募り、その思いを夫にぶつけてしまう。

【できる範囲で頑張るしかない】家事育児に対して、私はこれで精一杯だし、夫は夫なりに頑張ってくれてくれるので、お互いできる範囲で日々家事育児を行っている。

＜土日
は夫がメインで育児をしてくれて、ご飯も作ってくれて、私に休んでいていいと言ってくれる＞夫は休日には育児と家事をしてくれ、基本的には土日、妻は私はゆっくりできるようにしてくれている。また家事に関して＜洗濯物をきっちり干してくれるし、他もきちんとやってくれる丸山＞夫の家事に対して不満はない。妻は家事育児を負担に思っておらず、＜全く期待していない。やってもらわなくてもいいと思っている＞家事育児は妻の役割だと思っており、夫に全く期待していない。

妻が負担感を感じないのは＜率先してやってくれ、自分のできる範囲でやってくれる＞夫は得意なことに関して自分できる範囲で家事育児をやってくれている。また、夫婦で望んで子どもを授かったときには＜食事の準備やお皿洗い、お風呂掃除はしてくれる＞と言うように一定の家事ではあるが夫がやってくれることがあるので、その他の家事育児をすることに関して、妻は負担に感じていない。育児に関して＜子どもが泣いたときの対応やおむつ交換は基本的には積極的にやってくれる田原＞と言うように、特定の育児行為は積極的に行ってくれることに対して、妻にとっては、その他のことをやることに関して負担に感じていない。

(2) 妻の受け止め

妻は、家事育児の負担感が影響を与え、思うように家事・育児を行えないと、自分の気持ちをコントロールすることができないと、夫との関係に悪影響を与えてしまう。

【自分自身が充実している】

妻の気持ちは＜子育てグループの集まりに行き、私も充実しているので苦にならない下里＞妻は子育てをしている母親同士の集まりに参加して、同じ思いを共有している。そのため追い詰められている気持ちになっていない。また、自分の思いを＜自分の妹の境遇が似ていて、そこがはけ口になってそこで言ったりし、ちょっと心が落ち着くみたい船山＞と言うように自分と同じ境遇だと思い言い合い、気持ちを落ち着かせている。妻は＜週一度、コミュニティーセンターに出かけて、いろいろな人と関わっているのだから、充実している下里＞家の中だけでなく外に出ることで自分が充実していると実感している。

【はけ口で心が落ち着く】＜ママ友とランチを食べながら子育てについて話をしている＞＜女の人にはしゃべることによって気持ちが落ち着く＞＜夫に日頃の愚痴を聞いてもらっている＞など日頃のストレスを発散している。

【心の余裕がない】子どものことで余裕がなくなり、イライラする。＜私の方が大変、俺の方が大変、お互いねぎらいなんてない＞と言うように自分に余裕がなくなるとお互いに相手を思いやれなくなる。

＜子どもが泣き止まないでイライラして自分の中に余裕がなくなる。65＞子どもが泣き止まないことで、イライラしてしまい、自分自身に余裕がなくなってしまうと感じる。上の子がいる場合妻は＜下の子の後追いと上の子のイヤイヤ期が重なり、自分の中に余裕がなくなりいらいらする 73＞下の子の後追いが始まり、そのことで

手一杯のところ、上の子のイヤイヤ期と重なり、なにもかもが思うようにことが運ばずイライラしてしまう。＜一日中子どもの泣き声が飛び交って、家にいられず、自分の中に余裕がなくなり、夫に八つ当たりしてしまう金子＞は子育てでうまくいかず、余裕がなくなると夫の気持ちを考えることができなくなり、八つ当たりをして関係性が悪くなる。

2) 夫の対応に妻は混乱している

夫は妻と多くは核家族の場合、夫婦共に家事育児を行っているが、基本的には家事育児は妻の役割であり、夫は代行の域をこえていないことが多かった。それは、本来自分の役割ではなくあくまでも代行という意識である。代行ではあるが、夫の取り組み姿勢、意識によって、妻の気持ちは影響され、気持ちも変化する。家事・育児は妻が主体になってやり、お手伝いをしている感覚でいる夫が多い。そのため、夫との関係性において夫の対応が重要になってくる。

夫の態度として【家事や育児を代わりにしてくれる】＜私の具合が悪くなくても「今日なに作る？」と聞いてくれて、率先してご飯を作ってくれる。そこはちょっとうれしい①＞食事を作るのは妻の役目ではなく、夫も率先して作ってくれることがうれしいと妻は思う。

また＜子どもがずっと泣いていて、食事をする時間がなくて、すごくやだなあと思っていると泣いている子どもを抱っこしてくれて、うれしく思った②＞子どもが泣いているときは食事をすることもできなくて、嫌な気持ちになっていると夫は、泣いている子供を抱っこして、あやしてくれてうれしく思った。

夫の行動として＜夫は育児より家事の方が得意なので、子どもが泣くと家事を代わりにしてくれる 91＞夫は、育児より家事が得意なので、子供が泣くと家事を代わりにしてくれる。夫のできる範囲で家事育児を行ってくれてうれしい。夫の取り組み姿勢として＜育児も頑張ろうとしてくれる 91＞育児は慣れていなくても、頑張ろうとしてくれることがうれしい。できる、できないということではなく、一緒に育児をしてくれるという姿勢である。

家事に対して＜家事を十分に行えていなくても、夫は責めない＞妻は、家事を十分に行えないことに罪悪感を感じている。夫はその思いを受け止めてくれており、妻を責めるということはしないでくれている。＜料理とお風呂はしてくれる。それ以外の家事は好きではないのでしないけど、やってもらってありがたい。92＞好きな家事しかしないけど、できることをやってもらえるだけありがたいと思っている。二つの内容が入っているか？

また、＜夫は「ほっといていいよ」と言うけど夫は掃除・洗濯が嫌いなので、どんどん汚くなるし、洗濯物がたまるし、」自分もやらないじゃない」と思うけど、他のことをやってくれるので。そこを言うのはやめようと思って、私が片付けている。93＞自分が掃除洗濯をすることができなくて、夫にやってもらいたいと思って夫に伝えると、夫はやらなくていいと言うけど、夫もやる様子がみられなかった。そのまましておけなかったなので、結局自分でやっている。他の家事育児をしてくれ

ているので、夫に言っても仕方がないと思っている。

家事を行ってくれるがく食事を作ってくれるけど、凝り性で3時間かけて食事を作る。他の家事と同時にできなくて、イライラする。103>食事は作ってくれるけど、食事作りに時間がかかり、他の家事と同時にできなくていらいらする。

またく夫は几帳面なので、やってくれるのはいいけどやたらに時間かかる12>家事をやってくれるが几帳面に行ってくれるのはいいけど時間がかかりすぎて、家事は一つだけではなくいろいろなことがあるのに、周りが見えないで困る。<夫は育児より家事の方が得意なので、子どもが泣くと家事を代わりにしてくれる125>夫は、率先して家事は行ってくれないが、育児より家事が得意なので、子どもが泣くと家事を代わりにしてくれる。

3) 夫への妻の葛藤

<「ありがとう」と結構言うし、おまえも頑張っているといってくれる>

日頃からねぎらってくれて、妻の日頃の頑張りを認めてくれる。

<夫は、悪いとは思っているけど、自分は家事・育児を代われないと思っている98>夫は家事育児について自分の役目ではないと思っており、夫はその役割を代われないと思っているが、家事育児を代われないことに対しては悪いと思っている。

<「いつもありがとう」言ってくれるけど、「言っているだけかよ」と思うときもあるけど言われなくても言われた方がいい>夫から感謝の言葉を言われると家事育児をしてくれないのに、口ばかりと思うけど、言われなくても言われたほうが嬉しい。<すごく協力的で私を攻める場面はなく、私の一方的な話をちゃんと聞いてくれる>家事育児に協力的な夫は、妻が家事育児を十分にできていなくても、攻めることはない。夫は、妻の不安の気持ちや日頃のことについて、妻が一方的に話をして、きちんと聞いてくれる。夫のその姿勢に妻は、うれしく思っている。

夫は子育てに対して<子育てが大変なのは理解してくれるけど、家事に関してはおまえがやれと思っているが、子どもに関しての気配りはしてくれる。53>子育ての大変さは理解してくれて、育児に関しては気配りをしてくれるが、率先してやってくれない。またく育児を全面的にやると言われても絶対に無理だとわかっている。自分の役割は、お金を稼いで稼ぐことだと思っている。132>夫は、自分のできることはお金を稼ぐことであり、育児はできないと思っている。

【夫の姿勢（非協力的）】家事育児を行うことなく、また労ってもくれない。

<日頃からお互いねぎらいのことばはない。俺も大変なんだ10>夫は、日頃からねぎらいの言葉はなく、また妻自身も余裕がなく夫にねぎらいの言葉はない。夫は、毎日仕事が忙しいためか「俺も大変なんだ」という。妻が家事を忙しく行っている時に、<家事であたふたしているのに、夫はソファでくつろいでいるときがあって、温度差があると感じる。どれかやってくれるといいなあと思う>妻としては、少しは手伝って欲しいと思っていることに気付いてくれない。またく私と子どもがお風呂に入っていると間に夫はゲームをして遊んでいる。それに対してイラッとする⑤>妻が子どもをお風呂に入れている間、夫はゲームをして遊んでいる。妻と

しては、その間に遊ぶのではなく、家事をやっていなかったことに苛立つ。
＜基本私に対して育児に対して文句をつけることはしない。言えないと思っている。
131＞育児に関しては、何もしない代わりに文句も言わない。育児をしていないの
で言えないのは当然だと思う。

夫の家事・育児をする姿勢として、【率先して】【しぶしぶ】【威圧的】【無関心】
の概念が生成された。

【率先して】夫が家事育児に率先して行う。＜自分はこっちをするからと判断しや
ってくれる9＞子どもが増えると妻一人で家事育児をするのは難しくなり、必然的
に夫は自分で判断して率先してするようになる。＜育児を頑張ろうとしてくれてい
る＞妻のように手際よく育児はできないけど、率先して育児を頑張ろうとしてくれ
ている。【しぶしぶ】夫が家事育児をしぶしぶ行う。＜自分の仕事ではないが、や
ってやっている＞夫は仕事が自分の役割であり、家事育児は妻の役割だと基本的
には思っているが、大変そうなので手伝っている。＜本来はおれのやることではな
いが仕方がなく＞夫は、自分の役割ではないが、妻が一人では大変そうなので、仕
方がなく家事育児をやっている、＜俺の仕事じゃないけど手伝おうか」という姿勢で
夫が家事・育児を行う＞本来の仕事ではないけど、妻から頼まれたら仕方がなく手
伝おうとする姿勢である。＜夫は、家事について言われたらやってくれるけど自分
からはしない。汚れていることに気にならない。107＞夫は家事について妻から指
示されないとしめないし、部屋が汚れていても気にならない。基本的には自分の役割
だとは思っていない。＜夫が子どもを寝かしつけていて、うまくいかないとお手上
げで自分の仕事と思っていない113＞夫は、自分一人でできないと自分の仕事では
ないと思って、すぐにあきらめて妻に育児を依頼する。＜家事について口に出すと
やっとな、やってくれる124＞妻は夫にやって欲しいことを口に出していうとやっとな
やってくれる。【威圧的】夫は家事育児を行うのは夫の役割ではなく、妻がやるの
は当然と思っており、態度と発現に現れている。＜食事の支度をしてもらっている
のがあたりまえだと思っている23＞食事の支度は妻の役割であって、当然のこと
だと思っている。＜育児は家にいる私がやるのがあたりまえと思っている19＞家
にいる妻が育児をするのはあたり前で、夫がやらないのは当然のことだと思ってい
る。【無関心】妻が忙しそうに、家事育児を行っていても、自分のことをやってい
る。＜テレビで家事をやっている場面を見ているとき「ほらこの人やっているよ」
といっても間接的に伝えているが反応はない＞夫は妻から何を期待されているか気
づいていないし、家事は本来自分が行うものだとは思っていない。

子育てをしている夫婦において、忙しい中お互いの思いを会話によって伝える。
その状況により夫婦関係に影響を与える。

夫婦の会話として【会話の受け止め】【会話労い】【会話理解】【会話がかみあわ
ない】【会話ない】の概念が生成された。【会話の受け止め】妻の話をしっかり聞いて
その話に対して答えてくれる。＜すごく協力的で私を攻める場面はなく、私の一
方的な話をちゃんと聞いてくれる。91＞妻に対して協力的であり、一方的な話を聞
き受け止めてくれる。＜自分の気持ちを全部夫に話をしている。それを受け止めて

くれてちゃんと答えてくれる。105>妻が夫に対して自分の気持ちを伝え、それに対して受け止めて、妻の気持ちを察して反応してくれる。【会話労い】日頃の労いの言葉をかけてくれる

妻の話に対して<夫は「ありがとう」と結構言うし、おまえも頑張っているといってくれる②>夫は、妻の日頃の行いについて労ってくれ、妻の頑張りを認めてくれる。<ご飯を作って出すとおいしいといってくれる。その言葉があるから作れる>夫の労いの言葉があうから育児と家事を行えている。

【会話理解】妻の言葉に対して夫が捉えている内容<過度な期待をして、やってくれないというより、辛いときに話をすればちゃんと理解してくれる 63>妻は夫に一方的に期待をするのではなく、辛いときに話を相手にわかるようにはなしをすれば理解してくれる、<喧嘩をして、「何でわかってくれないの」と言う「俺だってこう思っているんだよ」と言われて、初めて相手の思っていることがわかった 78>喧嘩を通して自分思いを夫に伝え、夫も妻に思いを伝えることで、お互いの思いを知ることができる。

【会話が噛み合わない】妻が伝えている思いと受け止める夫の認識とがずれている<子どもの生活リズムがあるからもっと早く帰ってきて欲しいと言う「その前に連れ出してくれ多ことにありがとう。その前に苦労様じゃないの」と言われて、次元が違ったと思った⑦>子どもを遊びに連れて行ってくれたことについては感謝するけど、子ども体調のことを考えて連れ出して欲しいこと伝えると夫との思いが違うことに気づく。

<母親は君だけだし、大変だと思うけど、お金を出して代わりを請け負ってくれる人はいるよ。と言って欲しい④>妻の大変さを認めてくれるけど、妻が夫に求めている言葉を言ってくれない。

<男性特有の気持ちであるのはあるのはわかるけど、結果や理想的な発言にイラッとして、残念だと思う。⑤>夫が妻の気持ちを理解してくれない発言に妻はいらつく。<正論で返されて、あまり「君の気持ちはわかるよ」と言う反応や姿勢は少ない。46>夫の発言は正しいと思っているが妻の気持ちに寄り添った発言ではない。<問題は解決しなければならないというスタンスで、男性特有の優しさが自分の気持ちとのずれがある。50>夫は問題に対して解決する姿勢だが、妻が求めている発言ではなく、夫と妻の気持ちにずれが生じている。<ストレスがたまって愚痴を言う聞き流してくれればいいのにそこにつっかかってくるので、お互い思ってもないことを言ってしまう、けんかになる 66>妻としては、自分の思いを夫に話しているだけで、聞き流してくれただけでいいのに、その話をきっかけに喧嘩になってしまう。<日常のことのストレスの積み重ねでイライラしているのを気がつかず、気持ちがかみ合わない。67>妻の気持ちに気づいてくれなくて、夫との気持ちのずれを妻は感じている。<育児でイライラしているときはっきり言わないけれど「そんなにイライラしなくてもいいんじゃない」と言われると「わからないくせに」と思ってしまう。72>妻は自分の気持ちを相手に伝えず、態度にイライラ感を示していると夫はその態度について指摘されるとさらにいらつく。

＜日々のことのストレスの積み重ねでイライラしているのを理解されなくて、そこがかみ合わない 75＞日頃の妻の思いを夫が理解されていなくて、夫と気持ちがかみ合わないと思っている。

＜大変だねと言われても別にそれを聞いたからやっているわけではなく、それを聞いたからといって心が休まるわけではない 86＞夫は、妻に対して大変さを妻に伝えたが、妻は夫にそのこと言ってほしかったのではなく、心が休めることを夫に期待していた。

＜疲れているとき、「そんなだったら保育園に入れちゃえば」と言われたとき愚痴を言ったつもりだけど、解決を求めていたわけではないのに、そこまで言っていないだけだと思う。96＞愚痴を聞き流して欲しいだけなのに解決策を求めてつもりではなく、自分の今の気持ちを分かってほしかっただけで、解決策を言われると妻としては気持ちに寄り添ってもらっていない気がする。

＜夫には愚痴を聞き流して欲しいのに夫は、ぐちぐち言うんだったら、「預けちゃえば」と解決法を言うてくる。97＞妻の気持ちを夫はわかってくれない。愚痴を聞き流してくれるだけでいいのにとまっている。

＜仕事をしていきた女性にとっては、生活とか優先順位とかその後のキャリアとか全部がガラッとかわるのに俺はわかっていると言うけど自分のこととしてわかってないんじゃないかと思う③⑥＞夫は妻の気持ちを口ではわかっていると言うけど、妻としては、仕事の上でのキャリアが子どもを産むことで変わることを、ほんとに理解しているとは思えないでいる。

【会話がない】夫婦の間で会話がない。＜喜怒哀楽がわからないから私に何も言ってくれない 123＞夫は、妻の喜怒哀楽がわからないのか、夫は妻に何も話してはくれない。＜ことばに出して言ってくれない。行動で示してくれる金子＞言葉で伝えないで気がついたら子どもの面倒を見ていてくれるが言葉で伝えて欲しいと思っている。

3) 妻から夫への対話を求めて

育児期にある妻は、夫との関りから、【夫に拒まれて】【夫の受け入れ】

＜一緒に住んで、人手が一人いるだけでもとってもありがたいことだなあと思いたいし、余計なことを言って、いなくなっちゃたら困るし、上のこの送り迎えをしてくれるだけでもありがたい②⑨＞妻は、夫に対していろいろな思いがあるが、夫が家事育児を手伝ってくれていることに対してありがたいと思っている。余計なことを言って夫との関係性が悪くなるよりはいいと思っている。育児に関して＜彼にまかせておいても育児は何とかなるじゃないないか、ちょっと雑になるけど上の子の復職のときとスタンスを変えようと思っている③⑩＞妻は、育児に対して自分なりのやり方を夫に押し付けるのではなく、ちょっと気になることがあっても夫に任せても大丈夫ではないかと思っている。妻は、仕事を復帰するにあたって、第一子のときとやり方を変えようと考えている。＜息子を通じて「ママが作ってくれたご飯美味しいだろう」「これは間違いないんだ」と夫としては美味しいと思っているんだなあと感じます。シャイなのか直接には言ってくれない③⑪＞夫は、妻の作った食事に

対しての思いを直接言うことができず、子どもを通して妻に伝えている。＜100%変わった訳ではないけど、お互い変わってきているから、気にしてくれるところがあれば役割分担ができくる。116＞夫も妻もすぐには変わることはできないが、お互いに気にすることができれば自然に役割分担ができる。＜二人で話せる関係を築いていけると、何か問題にぶち当たった時にその時々で問題は違うから喧嘩をしてもいいこともわるいことも共有できる。118＞夫婦で話し合いができる関係性であると問題が発生したときに喧嘩をしてもお互いに思いを共有できる。＜話をしないと相手には伝わらない。話さないと自分の中に貯まって爆発してしまう。119＞妻は、自分の気持ちを言葉にして夫に伝えないと夫はわからない。気持ちを夫に伝えないと自分の中で消化できなくて、我慢の限界に来ると爆発してしまうと思っている。＜一人だと乗り越えられないけど二人だと乗り越えられることもある。120＞子育ては、大変で一人では乗り越えられないことであっても夫二人で協力すれば二人だと乗り越えられることもある。

【ネガティブ感情・不満】夫に対して否定的な感情、不満をもっている。＜そんなに大変なら預けて働けば＞妻は自分の気持ちを夫はわかってくれないと感じる。＜大変なのはわかるけど俺も大変なんだ＞夫は、自分の大変さばかりを主張するけど妻の気持ちを理解しようとしていない。＜反応の仕方がわからなくて、感謝とか伝えてくれるのかもしれないけど、そう言ってもらえると頑張れるという反応ができない。難しいと感じます④＞夫は、妻に対して感謝してその思いを妻に伝えていたとしても、妻自身は気づいていなし、感謝を伝えてもらってもそれに対して反応ができないと思っている。

＜日頃からイライラする理由を話しているから理解してくれていると思っていたのに、「何でイライラしているの」と聞かれると私の気持ちをわかってくれないと思ってしまう。76＞妻としては、自分のお思いを日頃から夫に話していたので、妻としては自分の理解しているものだと思っていたが、実際は違って残念に思う。＜あまり文句は言わないし、優しいけど、面と向かって「大丈夫」とは言ってくれない。＞夫は、文句も言わなくて優しいけど、直接「大丈夫」と言って欲しいと妻は思っている。＜自分が思うようにできないとしょっちゅう家を出て行く。私は、嫌なことがあっても振り切って家を出て行けない。114＞夫は嫌なことがあると自由に行動できけど、妻は嫌なことがあっても出ていくことはできない。夫と妻の違いを感じ不満に思う。

4) 夫の対応の変化

妻が夫の会話態度から、ネガティブ感情【うれしい】【悲しい】【辛い】【苛立ち】の概念が生成された。

【うれしい】望むことと合致して好ましいと思うこと＜「がんばってくれているし、いつも美味しいご飯ありがとう」と言ってくれたり、メールくれるとうれしい。95＞夫は妻に対して感謝の思いを直接言ってくれたり、メールくれたりしてくれることを妻はうれしく思っている。

＜料理を褒めてくれる。自分としては適当に作っているのに「美味しい」と言ってくれる。111＞妻の料理に対して美味しいと言ってくれるのはいいけど、妻としては、適当に作っていることに夫は気づかないのかと思っている。

【悲しい】こころが痛んで泣けてくる気持ちく二人の時間がないことでイライラしたりストレスがたまっているのにわかってもらえないのが悲しい43＞夫は、妻のストレスの原因は2人の時間がないことなのになにわかってもらえなくて悲しいと思っている。

＜子どもが泣くことにストレスを感じる自分が嫌で、欲しくて産んだ子どもなのに、ストレスに思ってしまうのは、すごくいけないことと思う気持ちがすごくある82＞妻は、子どもが欲しくて出産したはずなのに、子どもが泣くことに対してストレスを感じる自分が嫌であり、その思いをいけないことだと思っている。

【辛い】妻は夫の言動に対して苦しく、対処が難しく困難と思っている。

＜育児が大変で、ご飯を作るだけ「すごい」とほめて欲しいけど 完璧を求められるとつらい52＞育児に時間が取られているところに、食事の支度をするだけでも自分としては大変で、それをほめて欲しいのに、完璧を求められると辛くなる。

＜家事をすることで精一杯なのに、料理の腕を上げてくれと言う。56＞育児と並行して、家事をするだけでも精一杯なのに、その上料理の腕を上げて欲しいというけどそれは難しい。＜子どもがいなければ時間があるとできるが、子どもがいると時間がないので、目をつぶって欲しいと言うと言い訳じゃなくて努力している姿を見せて欲しいと言う。ちょっと辛い。57＞妻としては、育児をしていると時間がないのは本当であり、何とかしようと努力しているのにそれに対して求めてくれないのは辛い。＜掃除をしようとするときに限って、子どもがぐずってできないでいると「ちょっと床が汚いね」とそうゆう一言が刺さる。58＞掃除をしようすると子どもに手がかかり、その時に限って掃除ができていないことを指摘されると心に突き刺さる。

【苛立ち】妻は自分の思うように相手が行ってくれないことに対して、イライラする気持ちを持つこと妻は＜育児は家にいる私がやるのがあたりまえと思われるのがストレスである①⑨＞家にいて育児をするのはわかっているけど、あたり前と思われているのがストレスである。また＜育児をするのは当然だと思う気持ち6割、4割がなんだかもやもやする気持ちである②⑩＞育児をするために休みをもらっているのに、6割は当然だとは思いうけど、残りの4割は納得いかないと思う。妻は＜育児でイライラしているとき「そんなにイライラしなくてもいいんじゃない」と言われると「わからないくせに」と思います。64＞妻が、育児のためにイライラしていると夫の何気ない発言に対して、日頃から何もしていないのに私の気持ちはわかっていないとまたイライラしてしまう。＜家事も加わるとストレスが結構あると感じる65＞育児だけで精一杯なのに、家事も加わるとストレスが増える。＜夫に対してイライラしてるわけでもないのに、自分にイライラされていると思って、逆にイライラされることが気に触る。67＞妻は、育児でイライラしているのに、夫は自分に対して勘違いし、そのことに対してまたイライラして気に障る。＜自分

の中に余裕がなくなりいららし、それにつけて家事と夕食のメニューを考えたりし、同じことの繰り返しでストレスが結構あると感じた 73>妻は育児のことで自分のなかに余裕がなくなり、それに加えて家事、食事の支度も加わり、その繰り返しでストレスを感じてしまう。<夫との会話でも何気ないことばもイラッとするときがある。子どもを産む前と産んだあとでは、接し方が変わっている 89>今までは夫の発言が気に障らなかったのに、子どもを産んでから気に障ることがあり、夫への接し方が変わってきている。<自分の中で消化できないときは、夫の飲み会が重なったり、「来週もあるから」とあっさり言われると「カチン」とくる。94>妻は、自分の中で辛い気持ちを消化しきれないときに夫の行動が自分勝手だと頭にくる。<夫は先のことを考えて準備をしない。言われないとやらない。そうするとみていられなくて、私がやってしまう。112>夫は先のことを考えないで準備はしないし、言われないとやらない様子を見ているとみていられなくなり、妻がやってしまう。

5) 葛藤に対する対処行動

妻は子どもが産まれてから、育児と家事を中心的に行ってきており、その中で夫との関わりから、夫への処し方として【相談】【相手の気持ちを察する】【自己分析】【気持ちを楽に】【ピア】【できない】【不満に思う】【依頼】の概念が生成された。【相談】自分の気持ちを夫に話すこと<何がきっかけがわからないけど、子育ての積み重ねがちょっとづつ父親になって大変さも日に日に伝わって、SOS をすれば答えてくれることが1人目より3人目の方が、多くなった。

117>きっかけはわからないが、日頃から一緒に子育てをする中で少しづつ父親になっていき大変さもわかってくれる。大変さをアピールすれば子どもが生まれるたびに答えてくれる。

【相手の気持ちを察する】<夫が子どもを寝かしつけてくれるけど、子どもを泣かせているのを見るとストレスになって、自分がやらなければと思う 88>夫は子どもを寝かしつけてくれるが、子どもが泣いて寝かしつけられない様子を見ていると自分がやらなければ子どもが可哀そうに思う。

【自己分析】<お互いに声かけが必要で「今手が足りてるとか、何かすることある？」夫からでなく私（妻）からも声をかけることが必要だと思う④>子育てをしているときは、お互いに声をかけながら、できていないところを確認しあい、助け合うことが必要であり、夫から声をかけてくれるのを待つだけではなく、妻からも声をかけることが大切である。<私がイライラしている時に普通に接してくれれば、冷静になってイライラしている理由を話せるのにそれができない 69>妻は自分がイライラしているときは夫の対応として、普通に対応してくれれば冷静になって、自分の気持ちを夫に話すことができるのに、夫の対応はそうではない。

<辛いときはことばにして伝えないと誰にも伝わらない。71>妻の辛い気持ちは言葉にして夫に伝えないと、わからない。<イライラを自分の中に閉じ込めると子どもに当たってしまう 71>妻は、イライラしている気持ちを誰かに伝えられないと

子どもにイライラした気持ちをぶつけてしまう。＜同じことの繰り返しでストレスが結構あると感じた 73＞毎日が同じことの繰り返しでストレスと多く感じてしまう。＜ストレスが貯まってきたなあ聞き流してくれたらいいのに、そこにつかかってきて、けんかになって、お互い思ってもないことを言ってしまいます 74＞妻は自分の辛い思いを話しているときは聞き流してくれるだけでいいのに、それに対して反応されると喧嘩になり、言わなくてもいいことまで言う。

＜腹いせでやっていて、できないこともわかっているけどつい言ってしまった。でも心の中では「ごめん」と思っている。100＞夫に対して、日頃の気持ちをもやもやして気持ちを晴らすために、夫ができないことをわざと言ってしまったが、心の中では悪いと思っている。＜こんなに辛いとは思ってなかった。自分の体の調整と子どもの世話が子どもが生まれた瞬間から始まるので、心構えが足りなかったと思っている。101＞子どもを出産する前は、出産後に自分の体の調整と子どもの世話が生まれた瞬間から始まるとは思ってもみななかった。予想よりとても大変で辛い。＜自分の思いを夫にぶつけている。自分の気持ちを外に出さないと子どもと2人で心中をしかねない 102＞妻は、自分の思いを夫にぶつけている。自分の気持ちを外に吐き出さないと、子どもと心中してしまうほど辛い。

【気持ちを楽に】自分の気持ちを素直に相手に伝えるために、妻としてのこころの持ち方夫に対して＜素直に喜んだり、「ありがとう」を受け取ったりするのが下手くそで「ほんとにうれしい」って言えないんです。③④＞妻は、夫がやってくれたことに対して、素直に喜んだり、思いを伝えないでいる。その他＜夫に感謝は伝えないとうまくやっていけない。パパの方も積極的に言うべきだと思います③⑤＞夫も妻もお互い感謝の気持ちを伝えていくことが大切である。

＜仕事に戻りたいと言うより、自由な時間が欲しい。98＞妻は、仕事をしたいというより、家事育児から解放されて、自由な時間が欲しいと思っている素直な気持ちを夫に伝えられないでいる。

【ピア】見つからない

【できない】やってもらいたいけど、できないこと＜感謝とか伝えてくれているのかもしれないけど、そう言ってもらえると頑張れるという反応ができない。難しいと感じます③④＞妻は、夫が妻に対して感謝している気持ちを伝えているのかもしれないが、それを妻がわからないし、また妻は感謝されても夫にどのように反応したらいいかわからない。

【不満に思う】妻としては自分ばかりなぜやらなければいけないのかと、夫との不公平感を感じる。妻は一人で日頃の生活で＜自分が我慢できなくて、片付けが追いつかないとひとりでストレスを抱えている＞片づけられていないことに我慢できず、また追い付かないことに妻が一人でストレスを抱えているのに夫は気づいていない。夫は＜夫は今日用事があるから出かけると言って出かけられるけど、妻は根回しをしてからでないとできない＞夫は急に用事があると言って出かけられるけど、妻は出かけるにはいろいろ準備をしてからでないとでかけられないことに不満を持っている。夫の態度として＜ご飯の支度をしてもらっているのがあたり前と思

っているのが気になる>育児だけでも大変なのにその気持ちがわからないで、食事の支度をしてもらうのが当然だと思っていることが気に入らない。育児に関して一連の中の1つの作業でしかないのに、そこだけやって、「ほら、やったでしょ」というのはちょっと違うと思う>家事育児の一部をやっただけで、すべてをやったような態度をとり、自分の役割ではないけどやった自分は素晴らしいと自己満足しているのはおかしい。夫の特性について<男性特有の気持ちであるのはあるのはわかるけど、結果や理想的な発言にイラッとして、残念だと思う 45>妻は、自分の気持ちに対して、夫の態度として男性特有な行動ではあるが、結果や理想論を言われても求めている答えではない。妻は自分の気持ちに寄り添ってほしいと思っている。

<なんでこんなにイライラしているのに何も聞いてくれないだろうと思います。68>妻はイライラして、辛い気持ちを夫はなんで聞いてくれないのかと思っている。<わたしがやってしまうからやらない。得意な人がやればいいと思っている。自分としては得意ではないけど仕方がなくやっている。そこをわかって欲しい。85>夫は家事育児に対して、妻がやってしまうからか、夫自身は得意でないから得意な人がやればいいと思っていると感じている。妻としては、得意ではないけどやっているのだから、夫にはそのことを分かって欲しい。<家事であたふたしているのに夫はソファでくつろいでいるときがあって、温度差があると感じる。どれかやってくれるといいなあと思う。126>妻は家事が終わらず、忙しくしているのに夫はそれに気づかないでくつろいでいるのを見るとどれかをやってくれればいいのかと思うときがある。

【依頼】夫または他者に役割を頼んでやってもらうこと<地域で知り合った友達と情報交換をしている。周りの人の助けを借りないとだにもならない。

106>育児は一人ではできないので、友人と情報交換して、周りの人の力を借りながら行わないとできない。

6) 関係性の再構築への妻の感情

妻の感情展開として【期待・希望】【諦め】【絶望】の概念が生成された。

【期待・希望】夫に対してやって欲しいことやってもらいたいこと、できることを思うこと<元々できている人だとやって当然という感じになる⑥>夫は妻に対して、家事・育児ができるのでやって当然だと思う。<夫には家事をもっと手伝ってもらいたいけど、育児に関して十分やってくれているのでいいと思っている⑭>夫には家事をもっとやって欲しいと思っているけど、育児を十分やってくれているのでそれで満足している。<彼が育児をする方が楽しく子どもたちとやるんじゃないかと思う⑳>妻は自分が育児をするより、夫が育児をしたほうが子どもたちも楽しいのではないかと思う。<母親は君だけだし、大変だと思うけど、お金を出して代わりにを請け負ってくれる人はいるよ。と言って欲しい 44>夫から妻に対して母親は一人だから、大変な家事がお金出すからやってくれる人を探せばいいと言ってほしい。<産後すぐに、夫の両親が来たとき、遊び気分ですられるのが嫌で、それを夫

に言う。「じゃあなんて言えばいいの来ないでと言えばいいの」と言われ、「そういうことでなく」産後の大変さをわかって欲しい。48>夫の両親の対応をするとき、妻の気持ち大変さを理解して、対応して欲しい。<夫には自分の辛い気持ちを受け止めて欲しかったのに、姑には「来てもらおうと私（妻）の負担になるので来ないで欲しい」と言ってしまった。49>夫には姑に対して、妻の本音を伝えるのではなく問題にならないように伝えてほしかったと思っている。

【諦め】夫に対して家事育児をしてもらおうと思うのではなく、思うようにやってくれないため、もうやってもらわなくていいと思うこと夫に家事をお願いしてやろうとするが<掃除を頼むとやろうとするけど先に休憩が入って、もうこんな時間だからやらないということになる⑦>掃除を頼んでも結局やらないで終わってしまう。また<夫にやって欲しいことを言えばいいけどいまさら言えない⑧>夫にやってほしいことはあるけど今までのことがあるから今更言えない。夫に頼んだこととして<保育園の送り迎えで持たされたものしかもていかないしもって帰れと言われたものしか持って帰ってこない。足を運ぶのはあなた（夫）なんだから管理してよ。と思うけど言えない⑨>保育園の送り迎えをしてもらっているけど、子どもの持ち物の管理をしようとしていいないし渡されたものしかもていかない。自分で責任を持ってやって欲しい。

<言わなくて態度に示すのが夫の一番嫌うので、察してもらうことができないとあきらめている。47>夫は、察して欲しいこと、いやなことがあったとき態度に出すことを嫌うので、妻は夫にやって欲しいことつたえたいことがあっても、言えないであきらめている。夫の考えとして<女は家庭を守れと言うのが彼の言い分なので、一人暮らしをしていたので家事はできるけど絶対にしない。手伝ってもらいたいけど諦めている。彼と結婚した以上しょうがない。54>夫は、家事はできるけれど、家事育児は妻の役割だと思っている。手伝って欲しいけど、夫は手伝わないと知って結婚したのであきらめている。夫に対して<家事は全く期待していないけど、

育児のほうで期待したい。家事はやってもらわなくてもいいと思っている。55>夫に対して家事はやってもらわなくていいと思っているが、育児を手伝ってもらいたい。子どもが産まれると夫は、<結婚したときは半分やってくれると思ったけど、全然やらないからイライラしたけど、もうやらないと思うと楽になって全部自分一人でやっている。83>結婚した時はやってもらえるものだともっていて、実際は違っていたので、イライラしたけど、今は期待しなくなると逆に楽になる。また<もう諦めている。できないならいいやという感じです。84>夫に対してあきらめていて、できないのならやってみてもらわなくていいと思っている。今までの経験から<3人目になったとき夫に「逃げないで」と言ったけど、どこか夫に期待しなくなった。逆に楽になって、自分でやればいいやという感じになった。115>3人になると夫に期待しなくなり逆に自分でやればいいと思うようになる。<大変な気持ちを理解してもらえない121>夫は妻の大きな気持ちを理解してもらえない。<寝られなくて辛くて、夫に伝えて話は聞いてはくれるけど、代わってはくれないし、多分仕方がないと思う。130>子どもの世話で夜寝られないことを夫に伝えて

いるが、話を聞いてくれるが代わってくれない。せめて一回くらい代わって欲しいと思っているけどやってくれないし、無理だと思っている。

【絶望】夫に対して希望を全く失うこと夫との関りからくもめて話し合いの時、「わかっているんだ」と言うけど何がどうわかっているのかと聞くとわかっていない^②>夫と争いがあったときに、夫はわかっていると言うけれど、何がわかっているのかと聞くと実際はわかっていなかった。

<シッターを頼めばと夫は言うけど、実際頼む分けにはいかない^③>夫は子どもの世話が大変ならシッターに預ければいうけど、実際にはできないのに何でそのようなこと言うのか<子どもが泣き止まなくて、どうしたらいいかわからないから助けて欲しいけど、助けてくれる人がいない 70>子どもが泣き止まなくて誰かに助けて欲しいのにだれも助けてはくれない。

最終的には家事育児を通して、【負担解消】【負担軽減】【負担継続】【負担増悪】の概念が生成された。

3.2. 対象者の時期ごとの反応（表4）

対象者33名の時期ごとの反応を表4に記載した。

葛藤から回避・解消に至るには、「出産直後期」、「混乱期」、「調整期」、「学習期」「葛藤回避期」、「関係調整期」の時期があり、プロセスが明らかになった。結果として夫婦関係が新たな関係性として、関係性の再構築された場合と関係性の葛藤を感じたままである関係性の硬直にわかれた。

産後直後期

産後の妻は、時期毎に夫との関係性に変化が生じていた。出産直後は育児に対し不安や迷いがあり「よく泣いてどうしたらいいかわからない」「睡眠時間がこんなに削られるとは思ってもなかった」「子どもの世話がうまくできない」「家事と育児の両立が難しい（経産婦）」などがあった。

混乱期

妻は、育児に対して慣れてきたものの、十分でないまま、日常生活が本格的に始まる。子どもを含めた夫婦二人での生活が始まり、夫・妻の役割から、父親、母親としての役割が加わる。この時期は、Belsky が述べているようにどう乗り越えるかには個人差があり適切に対応できなければ夫婦関係は悪化すると述べている。「俺は家事はしない、できないと夫は言って何も手伝ってくれない」「休みをもらっているのに、やるのは当然だけどなんだかモヤモヤする」「家事をしようとする子どもが泣くので何もできない」「一日中家にいるんだよね。なんで食事の準備ができていないの」など夫の対応に疑問を感じている。

調整期

夫の対応に疑問を感じながらも、次の段階に入る。この時期は、混乱期を受けて、妻は家事育児の両立を目指しながらも、一人で家事・育児を行うことに対して、限界や夫との不公平感を感じていた。夫に対して、遠回しに大変なことを伝えても「ぼんやりしたことと言われてもわからない」「これ以上何を求めているのか」など夫に言い返される経験を持つ妻や「仕事から帰ってきた夫を見て、大変なのは私だけではない」「夫しか傍にいないから一緒にやっていくしかない」など夫の立場を考え関係性を考える時期である。

妻は、家事・育児を通して夫の特徴、一緒に行っていく方法を見いだす時期である。「夫は自分のことをわかろうとしてくれない」「夫には期待しない」

学習期

「1回は我慢してお願いしてみる」等、1回はトライしてみる。それが功を奏した事例や繰り返し実施してみると上手くいったことを学習する。または調整できる。

夫への対応を対応から自分なりに対応を変えており、それを受けて夫の対応受け止め方が変化していく時期であった。

関係再構築期

「葛藤が回避できる」葛藤はあったが、それを回避できた夫婦であり、夫婦の関係の再構築に関係する。

「葛藤のままで回避できなかった」夫婦それぞれの関わりを経て、結果的には回避に至らず、夫婦の再構築に影響を及ぼす。

3.2. 育児期の妻が夫に対して抱く葛藤・回避の事例

下記は、33例の事例から「葛藤はあったが回避・解消に至った事例」と「葛藤のままの事例」の各5例ずつの事例を紹介する。

3.2.1. 葛藤はあったが回避・解消に至った事例

事例 A：38歳、初産婦、有職/育休中

夫は、仕事で疲れているのはわかるけど、一人暮らしをしていたこともあるから家のことはできるはずなのに、何もしてくれなかったので不公平感を感じていた。

しかし、私の具合が悪くて、食事の準備ができない時に食事を作ってくれた。その時に「おいしい」と言ってから、私（妻）の具合が悪くなくても、食事の準備をしてくれるようになった。育休中なので家事・育児は自分の役割だとは思っており、やらなければいけないことはわかっている。たまにやってもらえるとうれしい。私の素直な気持ちを夫に伝えるといいのかも知れない。

事例 B：37 歳、経産婦、有職

夫は、家事、育児が苦手と言って何もしてくれない。初めは自分一人ですべてやっていたけれど、子どもが二人になると手が回らない。夫は、子どものお風呂だけは入れてくれるのでとても助かる。子どもをお風呂に入れている間に、他の家事ができるので助かる。夫がやってもいいと思うことをやらしてもらおうと思う。その方がお互い嫌な思いをしなくてすむと思う。

事例 C：38 歳、初産婦、無職

毎回食事の準備をするのは大変である。子育てをしながらだと子どもがぐずって思うように進まないことがある。私は一日中家にいて、家事と育児が私の役割だけど大変さをわかって欲しい。食事の準備は手抜きのこともあるけど、頑張った時に「おいしい」と言ってくれると頑張れる。夫が食べたいものを考えて作るのがうれしい。

事例 D：35 歳、初産婦、無職

昼間は子ども一緒なので、夜には大人と話がした。夫は疲れているのはわかるけど、私の気持ちをわかって欲しい。話を真剣に聞かなくてもいいので、聞く振りだけでもいいので、最後まで話を聞いて欲しい。たまに話が終わると「おまえも大変だね」と言われると救われる気がする。大切な話は、夫が疲れていない時にしようと思う。

事例 E：38 歳、経産婦、育休中

一人目の時は、離婚まで考えていた。夫は、電話一本で「帰りが遅くなる」と言うだけでいいけど、私が出掛けるときは、全てを整えてからでないとい出掛けられない。はじめは自分だけ損していると感じていたけど、一人で出かけられる時間があるのは、夫が子どもを見てくれるからである。

3.2.2. 葛藤を感じたままの事例**事例 F：32 歳、初産婦、有職/育休中、32 歳、初産婦、無職**

妻が家事をきちんとできていない時に限って、「1日中家にいたんだよね。何をしていたの」「テーブルの上も汚いし、掃除もしてないの」と言われるとサボっているわけでないのと思う。今日に限って、何かしようとする子どもに手がかかって、家事ができなかったことをわかって欲しいと思った。

「手伝っても、どうせ気に入らないから、やらない方が楽だし、嵐が過ぎ去るのを待てばよい」から手伝って疲れるくらいなら、やらないで文句言われた方が良く」とも言われた。

事例 G：28 歳、初産婦、無職

夫は好きなものを自由を買ってくるのに、私（妻）が洋服を買ってくると、「新しいのを買ってきたら、家が狭いから一枚捨てて」と言う。夫は好きなものを買ってきても捨てないのに、なんで自分だけ捨てなければいけないと不公平や不満を感じる。私は仕事をしていないので、お金を稼いでいないので、その思いは夫には言えない。

事例 H：37 歳、経産無職

子どもが生まれると夫の帰りが遅くなる。初めての子どものは、帰ってこないことに対して不満に思っていたけど、給料を持って来るから仕方がないと思う。今は、自分一人でできるから大丈夫と自分に言い聞かせている。相手にしてもらえないと期待している分、イライラするから期待しなくなった。

事例 I：40 歳、初産有職/育休中

夫は、私の話を聞いてくれるだけでいいのに、「こうしろ」「ああしろ」と解決方法を伝えてくる。私（妻）としては、単なる愚痴を言いたいだけなのに解決方法まで言われると、愚痴も言えない。気持ちにズレを感じる。

事例 J：33:経産婦、無職

夫は、「疲れているのなら掃除や片付けはしなくてもいいよ」と言う。しかし、夫は何もやってくれない。「しなくてもいい」というのは、代わりにやってくれると思ったのに、結局、私（妻）がやるのでイライラする。

3.3. 叙述逐語録（表 4）

半構造化面接における対象者の叙述逐語録は合計 59,776 字であった。

3.4. 事例に対する内容項目の検討(表 5)

表 5 に事例を分析した結果、45 種の具体的な行動が明らかになった。

3.4.1 共通する内容の分析

育児期にある母親の面接逐語録から、育児期にある母親が夫との関係性の再構築に導いてきた内容を以下に述べる。

1) 家事・育児の困難に直面、2) 妻の受け止め、3) 無理解な夫の対応、4) 理解ある夫の対応、5) 夫の姿勢、6) 妻の感情、7) 妻の感情展開、8) 妻を拒む夫の対応、9) 妻を受け入れる夫の対応、10) 夫への感情 11) 夫への妻の対応、12) 夫の受け止め、13) 夫の対応の変化、14) 夫の受け止めの変化 15) 関係性の硬直、16) 関係性の再構築、という 16 種の具体的な行動・思いが把握できた。

叙述例として「子どものことで他に手が回らなくて、食事の準備をしたくてもできない」「望んで預かった子なのに、何でイライラするのだろう」「子育ては、実際

にやってみると想像以上に辛い」など、妻の思っていたように家事・育児が行えていなかった。「大変だけど家事・育児をするのは、自分の役目だから仕方がない」「流し台を掃除してくれるけど汚い。そのことを言うとやってくれなくなるので言わないでおこう」と、家事育児は自分の役目だと思っており、夫が手伝ってくれるが、自分のやり方に満足ができていなかった。

また、「子育てでこんなに睡眠が削られるとは思ってみなかった」「子育ては楽しいことだけではない」「子どもが泣いている理由がわからない」と育児が想像していた以上に妻は辛く感じていた。「頼る人が近くにいと助かる」「ママ友の情報を大切にしている」「子育てをしている姉・妹に愚痴を言っている」日頃の思いを夫意外に自分の気持ちを伝えることで自分の気持ちを落ち着かせていた。

「私が言わなくても、できるときはゴミ出しや買い物に行ってくれる」「育児はできないけど、家事ならできるよ」と夫はできる範囲で妻を助けていた。

一方では、妻は「家事は終わっていないのに、一人でゲームをしているとイラッとする」と夫との家事・育児に関する温度差を感じていた。

夫は、「洗濯物を干してもやり直されるし」「流し台が汚いと言われるし」夫は自分が行ったことに対して、意見を言うので、やる気がそがれたと発言した。

3.5.1. 具体的な行動・思い (表5)

1) 出産後の困難と妻の受け止め、2) 子どもが生まれてからの妻に対する夫の対応、3) 夫との関わりから生じる妻の夫に対する葛藤、4) 夫との対話、5) 妻の対応に対する夫の反応、6) 葛藤/回避・解消、7) 新たな関係性の生成、という7種の具体的な行動・思いが把握できた。

3.5.2. 具体的な叙述

以下に内容項目に関わる具体的な叙述を示した。カテゴリー【 】サブカテゴリー< >行動・思いで示す。

(1) 「葛藤・解消に至った群」の具体的な叙述

夫婦2人での生活が開始されると【家事・育児への思い】<できる範囲でがんばる>できる範囲で役割を果たそうとしている。【妻の気持ち】<はけ口で心が落ち着き>自分の気持ちを吐き出して心を落ち着かせ<自分自身が充実している>とよい影響を与えていた。

【夫の対応】<代わってくれる>夫自ら家事・育児を行う対応や妻への配慮<労ってくれる>妻を理解し労ってくれる。【夫の家事・育児をする姿勢】<率先して><自分の仕事ではないけど(しぶしぶ)である。【夫婦の会話】<会話を受け止めてくれる>妻の思いを大切にす態度で接し<相手の思っていることがわかった>日頃の大変さを夫婦の会話を通してお互いがわかり合えている。

【夫の対応】<できることはやる>夫の取り組む姿勢を評価し<気にしているこ

ともある>夫も大変だということに気づき、夫の対応から妻は相手の立場を考えることができた。【感情状態】として<嬉しい>という思いを持ち【感情展開（妻の気持ちの変化）】<期待・希望>一緒に子育てをしていけるという気持ちを持つことができ【夫への感情（評価）】<夫への肯定的感情>となる。「夫の対応の変化」「歩み寄り・折り合い」がみられる。

【妻の処し方（状況に応じての妻の対処・対応方法）】<（夫に）打ち明ける><ピアサポート（夫以外に助けを求める）>自分自身で解決している。【妻の感情展開（妻の気持ちの変化）】<二人で乗り越えられる>という思いを持ち、夫との関わりから【問題に対する進展】「負担解消・軽減」となる。

(2)「葛藤のままで回避/解消に至らなかった群」の具体的な叙述

夫婦での生活が開始されると【家事・育児への思い】<思い通りにできない>自分の思い通りにできないことに苛立ちを感じ、<我慢をして>夫の手助けに我慢をし<想像以上に辛い>妊娠期に想像していた思いと現実の違いに辛さを感じている。【妻の気持ち】<心に余裕がない>妻自身に心に余裕がないと優しくすることができず、【夫の対応①】<その役割は代われない><俺も大変なんだ>自分の立場だけを主張する態度をとっていた場合も妻の夫への気持ちに影響を及ぼす。【夫の家事・育児をする姿勢】<おまえがやるのが当たり前（威圧的）><無関心>に葛藤を感じる。【夫婦の会話】<会話がかみ合わない><何も言ってくれない>夫婦の会話からも夫に対して葛藤を感じている。【夫の対応②】<これ以上何を求めているのか><ぼんやりしたことを言われてもわからない><俺はやらない><何も言えない>という反応が見られる。妻の【感情状態】<わかってくれない>気落ちに寄り添ってくれず、<辛い（精一杯なのに）>精一杯やっていることを分かってもらえず【感情展開（妻の気持ちの変化）】<諦め>自分でやっっていこうという思い<絶望>期待や希望が全くなり、孤独感を感じていく。【夫への感情（評価）】<夫への否定的感情・不満>となり【妻の処し方（状況に応じての妻の対処・対応方法）】<（夫に）八つ当たりをしてしまう><相手に言えない>がある。妻の家事・育児に対する【問題に対する進展】として<負担継続・増悪>となる。

3.6. 対象者の特徴

対象者は初産婦 26 名、経産婦 7 名、年齢は 24 歳から 42 歳（平均 35.2 歳 SD ± 4.1）であり、初めて子育てに対応する例が多い。育児休業中 9 名であり、そのうち 8 名が初産婦であった。上記の 2 群の要因に影響を与える要因ではなかった。初産婦で育児休業中の 8 名だったが、その中には「慣れない育児をするのは大変だけどやるしかない」「子育ては、実際にやってみると想像以上に辛い」という叙述があった。夫の対応としては、「俺は、食事の準備はできない」「俺の仕事ではないけどひとりできないなら何か手伝おうか。」「そんなに大変なら保育園に預ければいいんじゃない」「一日家にいるのに何をしていたの」「ご飯できてないの」「ゴミがおちているよ。掃除をしてないの」「言ってくれればやるのに」などと、妻への慰労

や共感がない言動がみられた。

反対に、「一人で大変そうだから僕にできることはするよ」「育児って思ったより大変だよね。」「仕事の帰りに何か買ってこようか」「赤ちゃんのお風呂をいれるよ」「洗濯物をたたもうか」など自分から家事を行おうとする言動がみられ、このような夫の言動があると、「1人だと乗り越えられないけど、2人なら乗り越えられる」「辛い気持ちを受け止めてくれる」と妻の葛藤が解消の方向に変化がみられた。

妻が無職の対象者は18名であった。「大変だけど家事・育児をするのは自分の役目だから仕方がない」「子どものことで手が回らなくて、食事の支度ができない」と家事と育児の両立に悩んでいた。

夫の対応としては、初産婦で妻が無職の場合「俺は仕事をしているんだ」「家事・育児は俺の役目ではない」「俺は仕事で疲れているんだ」と自分の立場だけを主張したり、妻の立場を理解しようとしていない態度であった。

一方、初産婦で妻が無職の場合でも「ありがとうと行ってくれる」「おまえも頑張っているよ」「おいしいご飯を作ってくれてありがとう」と日頃の妻の働きに感謝の気持ちを伝えて、妻に対して労いの気持ちを伝えている夫がいた。

4. 考察

親への移行期にある夫婦は、親役割を担う家族発達段階の移行期であり、発達の危機に直面しやすいと言われ、子どもが生まれると、家事や育児に時間を費やされ、家庭内での仕事・課題が増える一方で、互いのコミュニケーションの時間が十分に取ることができない⁸⁹⁾。

Meleis 理論では、初めて親になることは、新しい役割に適応していく移行体験であり、ライフサイクルにおける発達課題でもあると述べている⁷⁷⁾。

移行とは役割の変化であり、新しい知識を取り入れ、行動を変え、それによって自己定義を変えていくことを要することで、移行の性質として変化の実際の中で不安定性や混乱、苦悩を感じる過程としている⁹⁰⁾。育児への移行期にある夫婦は、今までの関係性を変化することを求められるが、そのためには今までの行動、思いを変化させて、夫婦で育児期を乗り切ることが求められている。

そのプロセスにおいて、夫と妻の双方が葛藤やそれを回避しようとする態度を取る。それには夫に対して妻は葛藤を感じ、それを回避しようとする行動や思いをもっている。その思いについて葛藤を回避した場合と不満を抱いたまま、夫婦関係を続けて行く場合について述べていく。

4.1. 出産後の困難と妻の受け止め

出産後の妻は家事・育児の困難に直面し、母親・妻として、家事・育児を両立することは、自分の役割として認識しており、取り組もうとしていた。

しかし、初産婦の場合は、初めての育児のため思うように行かず、育児に時間を取られていると、食事の準備、掃除という日常の家事が十分にできない。夫から「ずっと家にいたんだよね」「部屋にゴミが落ちているね」「おかずがこれだけ」な

どできていない点を指摘され、自分は十分に役割を果たせていないと感じる。

育児困難に悩む母親は、自分に自信がなく、他者を頼らない傾向が強く、一方では、評価が気になりプレッシャーを感じるとされている⁷⁹⁾。妻は、児の出生を楽しみに待望していたが、実際、児が出生すると、必ずしも喜びや楽しみだけではないことを経験する。久世によると「産後の妻は、夫の実質的な手助けより、夫婦の関係性に満足していることが重要である」⁹¹⁾と述べている。また、頼るべきパートナーの育児への非協力と母親の育児困難が関係している⁸⁰⁾とされ、育児期にある妻の気持ちを受け止め、妻に育児困難感を感じないように夫としての役割を果たすことが必要である。

4.2. 産後の夫婦関係の変化

子どもの誕生により、家庭内のバランスが変化して、日常生活においてストレスや葛藤が増すことがある。妻は、母親になると夫に対して頑固になる傾向があり、また妻のイライラ度が強いことと夫の労働時間が長いことが夫婦関係に影響を及ぼしている。産後に夫婦の愛情が冷めていく経緯を“産後クライシス”と称して一般的に知られている。産後クライシスとは、産後におこる夫婦の危機のことで、出産後2年以内に、夫婦の愛情が産後急速に冷え込んでしまう状況を示している。

子どもの誕生によって、夫・妻の立場から父・母という立場が加わり、関係が変化し、一時的から慢性的に至る夫婦の不仲や離婚まで発展することがある。

第1子出産後の夫婦は、夫と妻の二者関係から子どもを含めた新しい家族関係の形成と、親役割の獲得が夫婦間の愛情より優先される。そのため、夫は今までの関係性の変化に適応できないことがある。

「毎日仕事をしているから休みの日ぐらい好きなことをさせてくれ」と今回のインタビューで、妻は夫の態度について述べていた。それは、夫が家事・育児に協力的でないことを意味している。夫の家事・育児参加が妻の育児不安を低減することが報告されている⁹²⁾ことから、家事・育児を夫と共に行うことが育児期の夫婦には必要である。

妻は24時間休みなしで家事・育児を行っている一方で、夫は日々の仕事に追われ、仕事上での困難なことがあった場合に家事・育児に協力的でない発言になったことが考えられる。これは、対人葛藤対処方略においては、夫は自分の主張を述べているだけであり、相手に譲歩する態度が見られなかったと考える。

その場合、妻は自分だけ大変という自己主張をすることのみでは、夫への葛藤を自分の中での止まり、問題解決にはならない。

そのためには、夫、妻ともに自分自身の大変さをアピールするのではなく、お互いの立場を理解して、歩み寄ることが必要であると考えられる。そのためには、妊娠期から夫婦の親密性を高め、夫婦が協働しながら親になる準備を進めることが重要となると考える。

夫婦の一方の対処行動に対して、他方の配偶者が納得しないなどの場合、異なる種類の対処行動がとられることが示唆された。妻は、夫の謝るという対処行動を

「その場のいざこざを収めるために、謝っているのは分かってるんですけど、すぐ謝っても、なんで怒っているかが理解してくれないので、同じ事を何回もするんですよ」と評価した。これは、夫の謝るといふ対処行動を妻が信頼していない状況であるといえる。その妻の行動に対して、夫は「何を怒っているわからないからとりあえず、落ちているゴミを拾って、やっているアピールをすればいい」と回避を始める。しかし、夫婦の双方には関係維持の意図が存在し、妻が「ごめん」と謝ることによって関係維持を図る。その妻のコーピングに引き続き、夫も「じゃあ、俺もごめんね」といふ対処行動を行うというプロセスを経て、夫婦間ストレス場面は収束していく。それは夫との協働が重要な分岐となると考える。

4.3. 妻の感情変化と夫との関係性の変化

育児期にある妻は、ソーシャルサポートが好影響を及ぼすと言われており、特に配偶者との間の何気ないおしゃべりの中で、育児でのストレスやストレス反応に対処している⁹³⁾。しかし、その際の夫の態度から、妻自身が多くの負担をいっていることに対して、疑問を感じていることもある。それは、夫の生活パターンが児の出生前と変わらず、また分担された家事・育児はできるときには実施するが、急に仕事などが入ると「今日帰るのが遅くなるから」と、夫はメールや電話連絡だけですべてを妻に任せている。しかし、妻は、夫のように連絡だけで夫にすべてを任せることはしない。子どもや夫のことを優先させ、自分のことは後回しとなっている。

妻は、買い物や美容院に行くなど、一人で外出の際、家事・育児をすべて整えてからでないとは出かけられない。妻は、子どもが生まれる前のように、気軽に出かけられず、夫は児の出生前と変化がない様子を見てみると、妻は、夫が親として無責任であり、妻自身はいつも足かせがあるように感じている。日々の家事・育児においては、辛い思いがあっても、やらなければいけないという拘束感とが混在している。

子育てをする環境では、1950年代までは、夫婦以外に身近に子育ての人がいたが、核家族化が進み、家族の最小単位である夫婦だけで育児を行う環境となり、協力者がいない。未だに男は仕事、女は家庭や家事や育児を行うものという役割分業意識が一部に残っている。「(自分の仕事ではないけど、)何か手伝う・・・」という夫の姿勢では、夫婦関係に葛藤が生じるのは当然と言える。

4.4. 夫婦の関係性の関与

初産婦で育児休業中の人は、復職後の可能性についての不安を持つことが多く夫に対して、家事・育児を少しでも行ってもらおうとする働きかけが見られた。「今は私が家にいるからできるけど、仕事が始まったらやっていけるかなあ」「仕事が忙しいのはわかるけど、私が全部やるのかな」「お母さんでないと泣き止まないから俺にはできない」「(ゲームをしながら)何かやることあるの？やろうか」などの叙述から復職後に対して、妻は不安に感じていた。

それは、妻が仕事復帰後の生活を見越し、少しでも自分と同様の育児行動を夫に求めたのではないかと考える。一方では、現在妻は家事・育児を行うのは自分の役割であり、夫は外で仕事をしており、疲れているので、手伝ってもらわなくてもしかなかったかと思っている。今までなら、実家の母親や知人など周囲に誰かしらの支援者がいた。しかし、身近にいるのは夫であり、パートナーから情緒的サポートを受けると相手への信頼と安心感を深めており、これからも、夫婦一緒であれば頑張れるという、自信につながると述べている⁹⁴⁾。

今回の研究では、妻が一人で家事・育児を行わなければならない場合、妻は、自分一人で行うため、子どもに対してイライラを感じ、「望んで産んだ子どもなのになんでかわいく思えないのか」と辛い気持ちを思っていることがある。

そのため、妻は夫からのねぎらいなどの情緒的サポートを期待している。岡によると、「育児中の母親は精神的に不安定な状態で、身体を回復させるための体調管理を踏まえて、家庭内で過ごすことが多いため、より自分の理解者となってくれるパートナーの存在が情緒的サポートとなり、孤独感から解放される」⁸⁴⁾と述べている。このことから、妻は、夫に家事・育児分担してもらったとしても、夫の言動が気になり、嬉しい面もあるが自分の気持ちを理解してくれず苛立つ場面もある。それは、相手に過度な期待をし、自らの思いを伝えるのではなく、言わなくてもわかってくれる相手との争いを避けている。夫は妻の気持ちを理解することができないでいる。飛田による葛藤対処行動の一つである対立を避けるに当たると考える⁹⁵⁾。

この場合、夫が良き理解者となっていないため、夫への負の感情があり、「眠れなくて、辛い気持ちをわかって欲しい」という語りから、夫婦で日頃から話し合いが行われていれば、夫は妻の置かれている状況を理解できると考える。

中には「話し合いの時間がない」「その必要がない」と考える夫もいると思われる。妊娠中に、産後のことを見据えた話を行うことについては、初産婦の場合、夫婦共に生まれてからでないとうわからないと考える。その場に遭遇していない段階での話し合いは、理想のこととして考え、実感を持つことができない。そのため産後のことを見据えた準備が行われていないことにつながる。事前に、妊娠中から産後の意識した対応方法を考えておくのは、産後にお互いの立場を理解した対応を考える機会となり良策である。

4.5. 葛藤・回避と会話

妻は、「自分の話を聞いて欲しいときに、夫は自分の話をしっかり聞いてその話になづいてくれる」「日頃から様子を見ていてくれて、身体の具合が悪くなくても率先してご飯を作ってくれる」という語りから【夫婦の会話】として、夫は＜会話を受け止めてくれる＞＜妻への労い・理解＞＜会話がかみ合わない＞＜何も言ってくれない＞であった。

叙述としては、『「ありがとう」と言ってくれる』『おまえも頑張っていると言ってくれる。』『愚痴を言っただけなのに、解決方法を求めていたわけではなかつ

た」「問題は解決しなければならないというスタンスの夫の思いと自分の気持ちのズレがある」であった。「対話」は関係をポジティブに変化させ、関係へのコミットメントを高めると言われている。(古村)

桑名は、両親学級に参加した夫 10 名にインタビューを行った。その結果、両親学級は出産のイメージを持ち、分娩の心構えを持つことができ、立ち会い分娩は夫の育児行動を促す機会になっていると述べている⁸⁴⁾。

しかし、日本の両親学級の内容は、あくまでも分娩に立ち会うことが目的になっており、出産後の育児を見据えた夫の育児行動を促す行動になっていない。

また、夫との親密度について妊娠・産褥 1 か月と 6 か月の妊婦・褥婦 322 名に調査を行った結果から妻は夫に対して、出産後には情緒的サポートを求めている。それは、慣れない育児・家事サポートを夫に期待していることを意味している。このことから、実際子どもが生まれてから情緒的サポートができるような機会を持つことは必要であると述べている。夫は、日常生活の中で、妻の顔色を伺っていたり、不快なことがあっても我慢をし、妻の機嫌を気にしていると指摘している⁹⁶⁾。

夫は、家事・育児をやろうと思ってもやり方がわからない。それは夫自身にとって両親学級等での指導が立ち会い分娩のためのものであり、産後の家事・育児に対しての指導ではないからではないだろうか。

そのことで、夫は「自分の仕事ではないけど手伝ってやっている」と思いを妻自身が感じ取っているからではないかと思われる。夫としては意識していなくても、小島が述べているように情緒的サポートが十分できていないからではないかと考える。そのため、夫婦で夫の状況を妻が考えるきっかけとなっている可能性がある⁹⁷⁾。

妻が夫の状況を考えるには、そのときの妻の感情と関係が考えられる。感情抑制はその全てが不適応につながるのではなく、関係性の維持などの適応的側面を備えていると述べ、人間が社会的営みを行うためには、必要不可欠であるとしている。また、回避に関しては、対象は大学生であるものの⁹⁸⁾、回避的な対処行動は対人場面におけるストレスを軽減させることを示している。本論において、我慢・譲歩的な行動と回避的な行動の有効性が示されたことは、先行文献の視点を裏付けるものであろう^{99) 100)}。

4.6. 夫へ抱く感情 (評価)

「毎日仕事をしているのだから、休みの日ぐらい好きなことをさせてくれ」「俺は疲れているんだ」「彼に任せてもなんとかなる」という語りから、<夫に任せても何とか なる><夫は何もしてくれない>に分かれた。叙述として「夫に育児を任せても何とか なると思う。」「夫が育児をする方が楽しく子どもとやると思う」「一緒に住んで、人手が一人いるだけでとてもありがたい」「大変な気持ちは夫にわかってもらわなくてもいい。」「こっち (妻) があたふたしているのに夫はくつろいでいて温度差 があるなあと感じる」であった。

それは、夫に対して自分がすべてやらなくても、夫のやり方でやっても問題ない

と思い、自分やり方を一方的に押しつけるのではなく、一緒にいて、やってもらうだけで、ありがたいと思えるようにあった。

その一方、【妻の感情状態】として<嬉しい><苛立ち・わかってくれない><気遣って欲しい>をみいだした。叙述として「具合が悪くなくても「今日何作る？」といってくるとちょっと嬉しい」「家事が十分にできていない時「一日なにしていたの」と言う。「日々のストレスを理解してくれない」「日々ストレスの積み重ねでイライラしていることを理解して欲しい。」「眠れなくて辛いことをわかって欲しい」であった。

伊藤によると夫婦関係が心理的健康に及ぼす影響について女性では就業形態により影響の強さに違いはあってもその規定力は大きく、一方男性では夫婦関係満足度の影響は相対的に低いと述べている¹⁰¹⁾。

それは、夫と妻の認識に違いがあり、その違いを少しでも埋めることが必要である。お互いの気持ちに配慮することが必要である。

4.7. 状況に応じての妻への対処・対応方法

<夫に相談はできるが打ち明けるまではできない><(夫に)八つ当たりをしてしまう><夫に言えない><ピアサポート(夫以外に助けを求める)><(夫に対して)不満に思う>がある。叙述として「夫とは何でも話ができる」「夫に感謝の気持ちを伝えることができるようになった。一人目は照れくさくてできなかった。」「夫に腹いせにできないことをわざという」「今更、夫にやって欲しいことは言えない。分かってもらおうとすると疲れるので、自分で完結している」「夫以外で話を聞いてくれる人に頼ることが必要」「自分の辛い気持ちを受け止めて欲しいだけなのにわかってくれない」であった。妻の処し方は、自分自身で解決できることもあるが、相手に八つ当たりをし、また夫以外にサポートを求めるといった妻自身で、解決方法を見いだしている。妻は、夫に自分の気持ちや身体的変化を具体的に伝えることで、妻の置かれている状況を理解することができ、妻が求めている支援を行うことができる。それによって、妻の夫への処し方が変化してくると思える。

4.8. 妻から夫に対する葛藤と回避

<二人で乗り越えられる><やってもらわなくもいい><絶望>と変化していく。そのためには、夫婦それぞれが相手に歩み寄り、育児期の夫婦は、相互協力が求められる。それは、叙述から、「一人だと乗り越えられないけど二人だと乗り越えられることもある」「仕事を休んでいるので、家事・育児をするのは当然だとは思いますが、手伝ってもらって助かった」「いつも大変だなあ。少しでもできることがあればやらなければやるよ」というようなことから言えることであり、妻は夫の言動に対して、子どもが生まれることで時間的余裕がないことからの生じる葛藤に対して、二人で乗り越え、妻は夫と一緒に家事・育児を行うことを望んでいる。

夫婦で夫と一緒に家事育児を行うためには、妻自身が大変なのは自分だけでなく、夫も大変だという、夫に歩み寄ることも考えることが必要である。

また、夫は妻に対する思いやりや、感謝を言葉で伝えることで、妻は自分の気持ちを夫に打ち明けられ、育児への自信を深められ、育児期を夫と共に乗り越えられるという思いを持つことができる。

それには夫婦で日頃の何気ない会話を通してコミュニケーションを取ることが必要であり、妊娠期から産後の状況を想定した夫婦間での調整が必要であると考えられる。

4. 9. 育児期への移行期にある妻の夫への葛藤と回避のプロセス (図4)

育児期にある妻が夫に対しての葛藤と回避のプロセスについて、育児が始まってからの時期とお互いの言動によって変化することが明らかになった。

葛藤は、人と人との間で常に起き、個人の高度の方向性や組織の成果などに影響を及ぼすと言われている¹⁰²⁾。

育児期への移行期にある夫婦にとって、子ども生まれることで、今までとは違った役割を獲得することになる。それには、妻は夫に対して様々な葛藤とそれを回避するためのプロセスを経て、夫婦関係の再構築を図っていることにつながる。葛藤対処に影響する要因には、自己のパーソナリティなどの個人要因と相手のパーソナリティ等の相手要因と相互性等の互いの要因があると述べられている¹⁰³⁾。夫婦関係のプロセスとしては、育児が始まって妻は、家事育児について今までとは違うことは予想していたが、「子育ては思い通りにはできない」「子育ては想像以上に辛い」などの語りから、自分だけにまず関心が行き、それから夫である相手に関心移っていく。

先行文献から葛藤解決プロセスとしては、回避方略選択について、不満を感じていても、仕方なく改善が見込めないと認知し、無力感を抱き選択している¹⁰⁴⁾こと夫が非傾聴的であると、言語化することへの無力感を抱き、言語化しない方が自分のためだと思い、非言語化する¹⁰⁵⁾。

今回の結果から、夫の無理解な言動として「家事・育児はおまえがやるのが当たり前である」「俺も仕事で大変なんだ」というように自分主張のみをしており、夫の無神経な言動として「1日何していたの」「汚いね。掃除してなかったの」というように、夫に対して無力感を抱くことが予想できる。妻は、家事・育児に自分の役割だと思っていても自分の思うようにできていないことを指摘されると夫に対して、苛立ちや葛藤を感じる。未婚カップルの場合は、葛藤発生時の感情として、気持ちを分かってほしいという期待や不満、相手への思いやり、嫌われる不安がある¹⁰⁶⁾育児への移行期にある妻の場合は、嫌われる不安はなく、育児を通して夫への期待はするが、期待に添えないときは、自分で夫の対応の対応に応じた対処行動をとる。しかし、夫は、無理解な言動、無神経な言動をした場合であっても、妻の弱い一面、疲れている様子を見て、夫はこれまでの自分の言動を振り返り、自分は仕事で疲れていても妻も家事育児に疲れているのだろうという相手を思いやる気持ち、相手の気持ちへの譲歩が、夫婦関係においても必要になってくる。葛藤対処に影響する要因には、自己のパーソナリティなどの個人要因と相手のパーソナリティ等の相手要因と、相互性等の互いの要因があるということから育児期夫婦においても同

様なことが言えると考える。

アメリカのクルト・レヴィン（レビン）とリチャード・S・ラザルスは、葛藤を4つに分類した。接近-接近の葛藤、回避-回避の葛藤、接近-回避の葛藤、二重接近-回避の葛藤である¹⁰⁷⁾。接近-接近の葛藤（接近-接近型）とは、ほぼ同程度の魅力を持つ場合に、どちらにしようか迷って、行動を起こせなくなる葛藤のことであり、回避-回避の葛藤とは2つの目標（誘因）が、ほぼ同程度の不快感を持つ場合に、どちらから逃げようと迷って、行動を起こせなくなる葛藤であり、接近-接近の葛藤と違って、思い切ってどちらか一方から逃げてみても、長続きしないことが多く、1つの目標（誘因）が、魅力的な部分と魅力的でない部分の両方を持っている場合に、近づくか逃げるか迷って、行動を起こせなくなる葛藤であり、二重接近-回避の葛藤（二重接近-回避型）と2つの目標（誘因）が、魅力的な部分と魅力的でない部分の両方を持っている場合に、どちらにしようか迷って、行動を起こせなくなる葛藤で述べている¹⁰⁸⁾。育児期ある夫婦は、子ども育てているという目標に向かって、また育児を通して親になるという目標に向けて行動を起こすが、その状況に寄り葛藤の形を変えていくことが明らかとなった。それには葛藤と回避のプロセスには夫婦の関係性の転帰に影響を与えるため、そのことを理解して支援することが育児期夫婦を支援して行く上で必要なことだと考える。

5. 小括

- 1) 妊娠から育児への移行期にある妻が夫に対する育児支援に関する葛藤とそれを回避するプロセスについて、半構造化面接を用いて検討し妻の叙述と、夫の対応について、妻の視点で叙述を得た。
- 2) 妻は、夫との関りから葛藤を感じまたは感じない場合とがあり、その後解消に至る場合と葛藤のままの場合とがあった。
- 3) 妊娠から育児への移行期にある妻が夫の育児支援について、葛藤とそれを回避するプロセスについて【出産後の困難と妻の受け止め】【子どもが生まれてからの夫の対応】【夫との関わりから生じる妻の葛藤】【夫との対話を求めて】【妻の夫への対処】【葛藤/回避】【新たな関係性】7つの要因で構成された。
- 4) 要因は時間経過に伴い、出産直後期、混乱期、調整期、学習期、葛藤回避期、関係調整期に分類し、その経過と共に検討し、その葛藤と回避の内容を明らかにした。
- 5) 育児期にある妻が夫に対する育児支援に関して、葛藤を回避する妻と回避できない場合の事例について検討した。そこには、お互いに歩み寄ることが関係している。

第3章 研究2

育児への移行期にある夫婦の家事・育児を通して、 夫婦の認識の差についての実態調査

研究1では、出産後の妻に対して葛藤や不和を体験すると言われていたが、実際の妻側からみた夫との関係について明らかにした。

そのことをもとに、育児への移行期にある出産後3、4か月の夫婦に対して実態調査を実施した。

母親役割獲得は、産後4か月頃達成するといわれており、また、産後4か月は、母親が家事に目を向け始める時期と報告されている¹⁰⁹⁾。母親は、育児だけではなく、家事や夫婦の関係について関心を持つことができる時期であると考えられる。また、3、4か月の児は反応が見え初め、父親が児の反応を捉えることから、児をかわいいと存在を認識することから、児への育児行動が安定し易いとされる。

そのため、3、4か月の夫婦の家事・育児を通して、夫婦の認識の違いの実態を明らかにすることで、同時期の助産師支援のあり方について考察し、支援方法を検討するための資料を得る。

1. 目的

児の発達が変化し、微笑などの反応が出ることで、夫にも児の可愛さが実感できるとされる3、4か月を経過した時期の夫婦の家事・育児を通しての夫婦での認識の違いの実態を明らかにする。

2. 対象と方法

2.1. 研究デザイン：量的研究

2.2. 対象者：

A市で実施されている3、4か月健診のために来所している夫婦708組（1416名）配布した。回収数266件（回収率18.7%）

2.3. 調査方法：

3、4か月健診時にアンケート用紙を配布し、郵送にて返信を依頼した。質問紙は、基本属性の他、夫婦ペアレンティング調整尺度（引用、夫婦コミュニケーション態度尺度、コーピング尺度を用いた。回答法は多肢選択法と（2件から6件）と自由記述法を用いた。

2.4. 尺度による評価

「夫婦ペアレンティング調整尺度」「夫婦間コミュニケーション態度尺度」「コーピング尺度」を用いて、t検定、 χ^2 検定を行った。

1) 夫婦ペアレンティング調整尺¹¹⁰⁾ (表 6)

“1. まったくない— 6. いつもある”の6件法で回答した。高得点であるほど父親・母親の促進行動および抑制行動が多いことを示す。夫婦ペアレンティング調整尺度は、促進行動と抑制行動から構成されている。

夫婦ペアレンティング調整尺度における促進行動とは、お互いが考えていることや求めていることへの理解を深め、コペアレンティングの視点から夫婦でお互いを理解し、助け合い、互いに影響し合いながら、親としての役割をどのように行っていくかを追求することであり、相手に対して、尊重、支持、激励する行動であり、よりよい子育てを可能にすることを目指す重要な行動である。促進行動の高さは、夫(妻)の子どもへの関与や夫婦がともに子育てを行う協働感および夫婦関係の高さと関連する行動を示している。

抑制行動は、夫(妻)の子どもへの関与や夫婦がともに子育てを行う協働感および夫婦関係の低さと関連する行動を示している。

2) 夫婦間コミュニケーション態度尺度¹¹¹⁾ (表 7)

夫婦間コミュニケーションの様相を検討するための尺度である。夫婦間コミュニケーション態度尺度は、自分から相手へコミュニケーション態度と相手から自分へのコミュニケーション態度について、同一の設問に対して回答する。

回答方法は4段階のリッカート尺度(“全くない(1点)”から“よくある(4点)”)で測定する。夫婦を構成する個人に焦点をあてており、夫・妻(2者)×相手への態度・自分の態度(2種類)の4つの評定値を得ることができた。夫婦間コミュニケーション態度として「共感」「依存・接近」「無視・回避」「威圧」について回答した。

「共感」とは二者が対等の関係にある時の態度であり、「依存・接近」とは、二者は上下の関係にあるが、相手に対してはポジティブな感情を喚起する。

「無視・回避」は、二者が対等の関係にある場合のコミュニケーション態度ではあるが、相手に対してはネガティブな感情をするとみなされる。「威圧」二者が上下の関係にあり、しかも相手にしてはネガティブな感情を喚起するとみなされる。⁸⁷⁾

3) コーピング尺度¹¹²⁾ (表 8)

個人が経験している最も重要なストレスに対するコーピング行動を測定することを意図して作られた尺度である。コーピング尺度は、①問題焦点型 7項目、②情動焦点型 5項目、及び③回避・逃避型 8項目の3下位尺度20項目からなる。

「現在、最もストレスを感じていること」に対して、ストレス反応を低減するためになされる心理的ないし行動的な努力の程度について4段階評定(0:まったくしない 1:たまにする 2:時々する 3:いつもする)を求める。

問題焦点型コーピングとは、情報収集や再検討などの問題解決に直接関与する行動である。情動焦点型コーピングとは、ストレスから惹起された自らの情動反

応に焦点をあて、注意を切り替え。気持ちを調節するための行動である。回避・逃避型コーピングとは、不快な出来事から逃避したり、否定的に解釈したりする等のいわゆる消極的な行動である。

2.5. 分析の目的

夫婦ごとで認識の違いがあるのかについて、夫婦をペアとして妻の属性である夫との年齢差、結婚年数、妻の職業（雇用形態）によって、各尺度の得点に差があるかを検証する。

2.6. 分析方法

1. 夫群、妻群に分けて、基本属性、夫婦ペアレンティング調整尺度、夫婦コミュニケーション態度尺度、コーピング尺度について χ^2 検定を行い、有意水準5%水準とした。
2. 夫婦ごとでの認識の違いの有無を明らかにするために、夫婦をペアとして、夫婦ペアレンティング調整尺度、夫婦コミュニケーション態度尺度、コーピング尺度について分析した。夫婦の得点の差について、対応のあるt検定を行い、有意水準5%水準とした。

3. 結果

配布数 1416 件 回収数 266 件（回収率 18.7%）、夫婦のペアで得られた有効回答数は 244 件（有効回答率 91.7%）であった。

3.1. 対象者の個人属性

3.1.1. 対象者の年齢別の人数分布 （表 9）

調査対象は 3、4 か月健診のために来所した母親と父親である回答者（母親のみ来所の場合は、母親から父親へ回答を依頼）は 266 件であり、そのうち妻のみが回答した 12 件、および夫または妻の年齢がともに回答されていないケースを除外した 244 件、夫婦 122 組を分析対象とした。

年齢は全体では 22～54 歳で平均 34.07±5.24 歳である。）夫では 24～54 歳で平均 34.84±5.679 歳、妻では 22～45 歳で平均 33.31±4.65 歳である。

年齢差は、夫が 1.44±4.19 歳高く、「40 歳以上」で多い傾向がみられた。

年齢別の割合は。全体では「29 歳以下」50 名、20.5%、「30～34 歳」89 名、36.5%、「35～39 歳」66 名、27.0%、「40 歳以上」39 名、16.0%である。夫では、「29 歳以下」22 名、18.0%、「30～34 歳」43 名、35.2%、「35～39 歳」31 名、25.4%、「40 歳以上」26 名、21.3%、妻では、「29 歳以下」28 名、23.0%、「30～34 歳」46 名、37.7%、「35～39 歳」35 名、28.7%、「40 歳以上」13 名、10.7%であった。表 8 に 3、4 か月健診時の年齢別の人数分布を示す。

3.1.2. 職業別の人数分布

表 10 に示すように、夫で「会社員」61.5%、「公務員」28.7%、妻では「会社員」41.0%、「公務員」15.6%、専業主婦 27.9%であった。妻では夫と比べると「専業主婦」が多く ($\chi^2(5) = 52.46, p < .05$) 年齢別では人数の偏りは有意ではなかった ($\chi^2(15) = 21.41, n. s.$)。

3.1.3. 就業形態別の人数分布

表 11 に示すように、夫で「常勤」、妻で「非常勤」がそれぞれ多く ($\chi^2(3) = 9.74, p < .05$)、年齢別では有意ではなかった ($\chi^2(9) = 6.96, n. s.$)。

3.1.4. 学歴別の人数分布

表 12 に示すように、夫婦別では人数の偏りは有意ではなく ($\chi^2(5) = 9.17, n. s.$)、年齢別では、「30～34歳」、「35～39歳」で「短期大学卒業」が少なかった。 ($\chi^2(15) = 27.68, p < .05$)。

3.1.5. 同居人数別の人数分布

表 13 に示すように、年齢別には同居人数の有意な人数の偏りはみられなかった ($\chi^2(15) = 18.48, p < .05$)。

3.1.6. 子育てに関する相談できる人の有無の人数分布

表 14 に示すように、夫で「いいえ(いない)」が多く ($\chi^2(1) = 7.79, p < .05$)、年齢別では人数の偏りは有意ではなかった ($\chi^2(3) = 5.06, n. s.$)。

3.1.7. 現在の生活の充実感の人数分布

表 15 に示すように、妻で「どちらでも」が多く ($\chi^2(2) = 6.07, p < .05$)、年齢別では人数の偏りは有意ではなかった ($\chi^2(6) = 8.09, n. s.$)。

3.1.8. 相手の対応で辛いと感じることの有無の人数分布

表 16 に示すように、夫婦間の対応で辛いと感じることは、「時々」「たまに」を加算すると、夫 59.8%、妻 59.0%と約半数であり、他方「全くない」は夫、妻ともに 40%以下であり、対応を辛いと感じる程度に夫婦間では有意差が見られなかった。 ($\chi^2(6) = 5.210, n. s.$)

3.1.9. 夫婦関係の満足度の人数分布

表 17 に示すように、夫 76.2%、妻 72.1%と、概ね「満足」との回答を示した。この傾向は、夫婦別 ($\chi^2(2) = .73, n. s.$)、年齢別 ($\chi^2(6) = 4.51, n. s.$) ともに人数の偏りは有意ではなかった。

3.1.10 夫婦の会話の頻度別の人数分布

表 18 に示すように、夫「話しを良くする」86.1%、「時々する」13.9%、妻「話しを良くする」85.2%、「時々する」14.8%、であり、全員が夫婦での会話があった。夫婦別 ($\chi^2(1) = .03, n. s.$)、年齢別 ($\chi^2(3) = 1.22, n. s.$) とともに人数の偏りは有意ではなかった。

3.2. 夫婦ペアレンティング調整尺度 (表 19、図 2)

夫群、妻群の群別では、夫の促進行動の平均値は 4.7、妻の促進行動の平均値は 5.0 であり、大きな差はみられなかった。夫の抑制行動の平均値は 2.4、妻の抑制行動の平均値は 3.1 であった。

表 16 は、夫と妻の平均値および標準偏差等を示したものである。分析は対応のない t 検定を用いて、平均の有意差の分析を行った。

結果は両条件の平均値の差は、促進行動 (両側検定: $t(210) = -2.21, p < .05$)、抑制行動 (両側検定: $t(210) = -5.06, p < .001$) とともに有意であった。

したがって、夫より妻のほうが促進行動、抑制行動ともに高い。

表 11 に示す通り、夫と妻をペアにしてみると、促進行動は、(両側検定: $t(105) = 0.25, p < .001$)、抑制行動 (両側検定: $t(105) = 0.07, p < .001$) 共に有意であった。よって、「促進行動」「抑制行動」は、夫婦間での認識の差はあった。

3.3. 夫婦コミュニケーション態度尺度 (相手への態度と自分の態度)

(表 20, 21, 図 3, 4)

夫群、妻群の群別では、相手への態度について「威圧」では、夫の平均値 1.5、妻の平均値 1.4、「共感」夫の平均値 1.5、妻の平均値 1.4、「依存接近」夫の平均値 3.0、妻の平均値 3.3、「無視・回避」夫の平均値 2.0、妻の平均値 2.4 であった。

自分の態度について「威圧」では、夫の平均値 1.7、妻の平均値 1.7、「共感」夫の平均値 2.9、妻の平均値 3.1、「依存・接近」夫の平均値 3.0、妻の平均値 3.3、「無視・回避」夫の平均値 2.4、妻の平均値 2.1 であった。

分析は、対応のない t 検定を用いて、平均の有意差の分析を行った。

表 17 は、平均値および標準偏差等を示したものである。結果は両条件の平均値の差は、「共感」では平均値の差は有意ではなく (両側検定: $t(208) = .72, n. s.$) 「威圧」は有意傾向 (両側検定: $t(208) = 1.67, .05 < p < .10$) がみられた。

一方、「依存・接近」(両側検定: $t(208) = -5.13, p < .001$)、「無視・回避」(両側検定: $t(208) = -4.79, p < .001$) はともに有意であった。

したがって、夫は「威圧」は夫のほうが妻より多い傾向にあり、「依存・接近」「無視・回避」は妻のほうが夫より多い。

次いで、前問と同じ尺度を用いて、夫婦コミュニケーション態度尺度の自分の態度として下位尺度の「威圧」、「共感」、「依存・接近」、「無視・回避」ごとに、対応のない t 検定を用いて、平均値の差の検定を行った。

表 10 は、平均値および標準偏差等を示したものである。結果は両条件の平均値の差は、「威圧」では平均値の差は有意ではなく（両側検定： $t(208) = .78, n. s.$ ）、一方、「共感」（両側検定： $t(208) = -2.70, .p < .01$ ）、「依存・接近」（両側検定： $t(208) = -5.13, p < .001$ ）、「無視・回避」（両側検定： $t(208) = 3.22, p < .01$ ）で有意であった。したがって、「共感」「依存・接近」では妻のほうが夫より多く、「無視・回避」は夫のほうが妻より多い。今回の研究で、相手への態度として、「威圧」は夫の方が妻より多い傾向にあった。

コミュニケーション態度尺度（相手への態度）の総合点の平均値では、夫婦間での平均値の差は 0.0004、 p 値 0.9 であった。よって、総合得点の平均値では夫婦間での尺度の平均値に差がなく、認識の差はない。

下位項目の「威圧」では、夫婦間での平均値の差は 0.13、 p 値 0.06 であり、有意な差はなかった。

「共感」では、夫婦間での平均値の差は 0.12、 p 値 0.1 であり、有意な差はなかった。

「依存・接近」では、（両側検定： $t(104) = 0.13, .p < .01$ ）、「無視・回避」では（両側検定： $t(104) = 0.44, p < .001$ ）、共に有意な差がみられた。よって「依存・接近」夫婦間での認識の差があった。

コミュニケーション態度尺度（自分の態度）では、（両側検定： $t(104) = 0.09, .p < .001$ ）有意差がみられた。よって夫婦間での認識の差が認められた。

下位項目の「威圧」では、夫婦間での平均値の差は 0.04、 p 値 0.54 であり、有意ではなかった。「共感」では、（両側検定： $t(104) = 0.23, .p < .001$ ）、有意な差がみられた。よって「共感」夫婦間での認識の差が認められた。

「依存・接近」では、（両側検定： $t(104) = 0.31, .p < .001$ ）、「無視・回避」では（両側検定： $t(104) = 0.44, p < .001$ ）、共に有意な差がみられた。よって「依存・接近」「無視・回避」夫婦間での認識の差があった。

3.4. コーピング尺度(表 22、図 5)

夫群、妻群の群別においては、問題焦点型では夫の平均値 1.49、妻の平均値 1.68、回避逃避型夫の平均値 1.53、妻の平均値 1.61、情緒焦点型夫の平均値 1.80 妻の平均値 1.69 であった。

分析は 3 下位尺度ごとに、対応のない t 検定を用いて、平均の有意差の分析を行った。表 14 は、平均値および標準偏差等を示したものである。結果は両条件の平均値の差は、「回避逃避型」、「情緒焦点型」では有意ではない。（両側検定： $t(186) = -.81, n. s.$ ）（両側検定： $t(186) = 1.03, n. s.$ ）

一方、「問題焦点型」では妻の方が有意に多い傾向であり、問題焦点型行動は、情報収集や再検討などの問題解決に直接関与する行動である。そのため、妻は育児を行うにあたって生じる問題を解決しようするため、夫より有意に高い傾向にあった。

乳児期の父親役割は「家族を守る覚悟の下、妻の負担軽減のためのサポートをし、

育児の実践や育児方針の検討を行い、子どものいる生活に移行しながら経済力を担うと」定義側検定: $t(186) = -1.82, 05 < p < .10$) がみられた。

夫婦ペアでみると、「問題焦点型」では、妻の値が夫よりやや高い傾向を示したが、有意な差はみられなかった。また、「回避逃避型」、「情緒焦点型」では夫婦間では差がみられず、夫婦間での認識の差はなかった。

4. 考察

4.1.1. 夫群と妻群別に分けた際のペアレンティング調整尺度

夫婦ペアレンティング調整尺度、促進行動は妻の方が夫より高かった。これは妻が夫にお互いの考えることや、求めている事への理解をより求めていることを意味している。

育児を行う上で、形式的な分担のみで捉えられるものではなく、夫婦が互いに相手のすることを尊重するような姿勢や協力、連携といった質的な側面が重要である。

抑制行動とは、相手が子どもに関わることに拒否、避難、批判する行動である。妻の立場から考えると夫に対する行動である。妻が夫に抱く思いとして育児にある妻は夫に対して様々な思いを抱いている。

抑制行動における妻が夫に抱く思いとしては、ゲートキーピングと同様な思いである。ゲートキーピングとは、相手の関わりを制御する行為のことである。たとえば、パートナーの家事や子育てのやり方を非難したり、怒りや不機嫌さを態度で表したり、「下手な方法でやるくらいなら、私がやったほうがマシだわ」と相手がやっている行為を取りあげてしまったりすることを指す。

子育て中のみならず、妊娠期から夫婦がお互いの得意なことや好きなことをいかした役割分担を話し合ったり、育児や家事のスキルをともに向上させたりしながら、自分たちなりのチーム育児の基盤を形成していく重要性が伺われる。

夫婦間の対応で辛いと感じることは、「時々」「たまに」を加算すると、夫 59.8%、妻 59.0%と約半数であり、他方「全くない」は夫、妻ともに40%以下であり、対応を辛いと感じる程度に夫婦間では有意差が見られなかった。

しかし、半数以上の夫、妻ともにお互いの対応について辛いと感じていることから、夫婦関係を良好に保つには、相手に期待することや求めていることを理解することは重要である。

4.2.1. 夫と妻の群別に分けた夫婦コミュニケーション態度尺度

夫婦コミュニケーション態度尺度からは、夫の態度の「威圧」が高かったが、威圧の高い夫に対して、妻は自らの気持ちを伝えることは困難となる。

出産後の夫婦関係が悪化したケースでは、心理的な葛藤や摩擦が増えて、夫婦のコミュニケーションが減少していると言われている¹¹³⁾。妻にとって育児の問題を相談するには、夫の態度が大きく影響する。

本研究では、育児について相談できる人がいるという設問に対して、夫 111名(91%)、妻 121名(99.2%)であった。その相談相手は、夫または妻

であり、夫婦は相互に必要としていることが本研究でも明らかになった。

中年期の夫婦においては、従来日本社会でのコミュニケーションは「察し」「以心伝心」が尊ばれ「黙っていてもわかり合える」とされていた¹¹⁴⁾。しかし、育児期においては、新しい家族形成に加えて、育児に時間がとられるという状況下では、従来日本社会での尊ばれたコミュニケーションでは対応が困難であると言える。

育児期においては、会話時間が夫婦の関係性に影響していたとされており¹¹⁵⁾、夫婦で育児を行うには、夫婦間でコミュニケーションを取り、自己開示できることは、夫婦の関係調整には重要なことである。

研究1で妻へのインタビューの結果では、妻は、家事・育児は自分の役割だと認識していた。特に初産婦の場合は、自分の役割だとは認識していても、初めての育児で戸惑うことが多く、誰かに相談したいと考えていた。夫婦は家族の最小単位となるため、身近な存在である夫は、相談相手の対象となる。その際の夫のコミュニケーションの態度において「威圧」が高いと、妻は自分の気持ちを夫に十分に伝えることが困難となりやすいため、夫婦間で認識のズレが生じていた。また、「無視・回避」も夫の方が高かった。これらのことから、夫は妻との会話の時間を取っていない実態が明らかになった。

Gottmanは、夫側の相互作用からの撤退行動（批判や意見の対立を回避するような態度）の多さは、将来、夫婦関係が悪化していることを予見していた⁹⁴⁾という。この結果を受けて 柏木は、「働きかけようとする妻と、回避しようとする夫というギャップが持続すれば、効果的なコミュニケーションや問題解決への態度がますます失われ、相手への失望感が増えて、夫婦関係の悪化は避けられなくなる。問題から目をそらさずに意見交換できる2人のコミュニケーションパターンは、将来的には問題解決を有効にはかる方向にはたらく」¹⁰⁹⁾と主張する。

一方では、夫の回避的態度の背景には、育児に奮闘する妻の姿を前に、意見の対立で余計な負担をかけまいとする夫の思いがある可能性も否定はできないと考える。

4.3. 夫群と妻群を比較したコーピング行動

コーピング行動は、問題焦点型行動は、情報収集や再検討などの問題解決に直接関与する行動である。そのため、妻は育児を行うにあたって生じる問題を解決しようするため、夫より有意に高い傾向にあったといえる。夫は妻に対して、そのことを理解して、一緒に育児を行うことが必要であると考ええる。

3, 4 か月の育児を行っている夫婦のコーピング行動の特徴は、妻の場合、育児行動が要因となることが言われている。母親の場合は対人関係、とくに「夫婦関係」が母親の育児生活に対する感情に大きく影響をもたらすと言われている。今回の調査では「問題焦点型」では妻の方が有意に多い傾向がみられたことから、問題焦点型行動は、情報収集や再検討などの問題解決に直接関与する行動である。そのため、妻は育児を行うにあたって生じる問題を解決しようするため、夫より有意に高い傾向にあったといえる。夫は妻に対して、そのことを理解して、一緒に育児を行うこ

とが必要である。

乳児期の父親役割は「家族を守る覚悟の下、妻の負担軽減のためのサポートをし、育児の実践や育児方針の検討を行い、子どものいる生活に移行しながら経済力を担う」と定義されている。

しかし、それだけではなく、育児期の妻は夫に対して、情緒的サポートを求めていると言われていることから、夫は妻のコーピング行動の状況を知ること、適正なサポートにつながると思われる。夫は妻をサポートしようと育児家事に参加していても、母親が父親に求めていることと違い夫婦の中でギャップが生じている。そのため、妊娠期からお互いの思いを共有して子育ての方針や様々なことを夫婦で話し合うなど夫婦間でのコミュニケーションが大切になると考える。そうすることで、夫は父親として最適なサポートを行することができる。

5. 小括

- 1) 夫は、仕事を中心の生活であり、家事育児の中心は妻であるため、妻に促進行動が夫より高かったと考える。
- 2) 相手への態度として、「威圧」は夫の方が妻より多い傾向にあり、妻は自分の気持ちを夫に伝え切れていない可能性がある。
- 3) 「無視・回避」も夫の方が高かった。そのため、妻は、自分の気持ちを受け入れてもらえず、また夫婦間で十分にコミュニケーションがとれていない夫婦がいたと考える。
- 4) コーピング行動において、妻の方が夫に比べて、有意に高く、妻は子育てに対して夫の適切なサポートが必要である。

第4章 妊娠期から育児期への移行期にある夫婦の関係調整を構築するためのプログラムの開発

妊娠期から育児期への移行期にある夫婦にとって、夫婦間で役割を調整して、育児を行っていくことは必要であると多くの文献で述べられているが、それに対する対策については述べられていない。

産後の妻にインタビューを実施しその事例を分析した結果、妻は夫に対して様々な葛藤を抱いている。それは、自分の気持ちを理解し、育児をしていく上で、夫婦間で連携を図り、協力していく必要がある。日本の妊娠前教育の現状では、立ち会い分娩に関する内容や新生児の沐浴についてのことが中心となっている。産後の夫婦関係の変化についての内容を言及されることは少なく⁹⁴⁾。そのためには、妊娠期から産後を見据えた夫婦間での役割調整について準備をする必要があると考える。

そこで本研究では、研究1,2の結果をもとに夫婦でのコミュニケーションの重要性が明らかになった。夫婦コミュニケーション態度尺度の5因子にプラスして「歩み寄り」「夫の対応の変化」の2因子を追加した。夫婦の関係調整のための支援プログラムを構築した。妊娠期から育児期への移行期にある夫婦における夫婦役割調整と支援方法の構築をすることでその効果を明らかにし、今後の助産師の支援について考察する。

1. 目的：妊娠期から育児期への移行期にある夫婦における夫婦役割調整に向けた支援としてのプログラムを構築して、実施しその効果について事例的に検討した。

2. 用語の定義

夫婦の関係調整：夫婦間でお互いの役割を認識して相手を尊重し、夫婦で協力のもと育児を行っていくこと。

3. 対象と方法

3.1 研究デザイン：量的研究、プログラムの実施

プログラム実施時と産後3,4か月後の2時点で夫婦関係に関する調査を実施した。

3.2 研究対象

本プログラムを実施した夫婦20組40名

妊娠16週から35週の妊娠が正常に経過している妊婦とその夫とする。

3.3. 夫婦の関係調整の支援プログラム

3.3.1. プログラム作成方法

プログラムを作成にあたっては、育児期にある妻に半構造化面接の結果、育児期にある夫婦において、お互いが相手に対しての思いのズレがあることが明らかとなった。そこから、思いのズレが生じる場面が事前にわかっていたら、相手に対して支援できる内容となるのではないかと3つの場面を作成した。夫婦間で葛藤する場面、夫婦関係を再構築する上で問題となる場面を設定した。全体の内容を表 37 に示す。

プログラムを作成にあたっては母性看護、助産学専門職 2 名と、プログラム内容の妥当性、実践場面での実施可能性について協議し、スーパーバイズを得た。

3.3.2. 支援プログラムの内容(表 23)

本研究の研究 1 において、家事・育児の両立の難しさや、夫婦の関係性の変化が妊娠中には想定することが難しく、産後の生活が想像できず、育児に混乱をきたす傾向があり、近年の研究と同様の傾向がみられた。

研究 1 で得られた「葛藤はあったが回避・解消に至った事例」「葛藤まで回避しなかった事例」を参考に場面を作成した。

さらに、本研究の研究 1、2 から、夫婦コミュニケーションの問題が明らかとなった。このことから、産後の育児に関する問題などを妊娠期から想定して体験することによって、育児期の夫婦コミュニケーションを強化しながら問題解決の技法を学び、夫婦関係を向上させることにより、夫婦関係の調整を図ることができるプログラムの開発を行うことを目的とした。

プログラムは、「導入」生涯発達の視点を組み込んだライフステージについて説明し、家族発達過程、ライフステージについて知ることができる。そのためには、妊娠期から産後の生活を意識するための情報提供を行う。

その次の段階として、対処行動のイメージ化を図るためにねらいとして、育児への移行期にある夫婦が問題解決の技法を学び、夫婦関係の危機回避の準備とする。妊娠期の比較的落ち着いた時期にお互いに夫婦の関係調整に向けた準備である。そのためには、コミュニケーションが重要な役割を果たしていることが、先行研究や研究 1, 2 において明らかになった。コミュニケーション態度尺度の下位項目である「威圧」「依存・接近」「共感」「無視・回避」の項目にプラスして研究 1, 2 で得られた項目である「歩み寄り」「夫の対応の変化」を追加したプログラムを作成し、実施した。

3.3.3. 場面を通して夫婦での意見交換

(1) 場面1 「妻が夫へ家事・育児のサポートを求める場面」

(威圧・依存・接近)

夫が仕事から帰ってきた。その時、部屋は散らかり、食事の準備はできておらず、赤ちゃんは泣いており、妻は茫然として動けないでいる状態である。夫は疲れており、その状態にいらだちを覚えているところに、妻が夫へ家事・育児のサポートを求める場面である。そのような場面での夫婦間のやり取りとなる。これは、夫婦コミュニケーション態度尺度の下位項目（威圧、依存・接近）と一致している。

- ① そのような状況であなたが一番はじめに発すると思われる言葉をお答えください。
- ② あなたはどのように対応しますか。
- ③ 奥様はどのような対応を期待していると思いますか。
- ④ このような場面に遭遇した時に、適切に対応できるように妊娠期から準備できることはありましたか。また、どのように対処すると解決すると思うか？

(2) 場面2 「妻が夫へ情緒的サポートを求める場面」(共感)

夫は、一日の仕事を終え自宅に帰っていた。食事をしていると妻は、一日の中で起こったことをあれこれ話をされる。食事が終了したら、早く寝たいと思っているが、妻の話がなかなか終わらない。話の内容の聞き取りも中途半端な夫としては、何を答えたらいいいのか、どうしたらよいかわからない状態で混乱している。「妻が夫へ情緒的サポートを求める場面でもあり、夫もどうしたらよいかサポートを求めている場面」である。これは、妻は、子どもと過ごした内容を、夫に聞いてもらいたいという思いがあり、夫も理解したいが疲れていて、十分に共感ができないで混乱するといった、夫婦コミュニケーション態度尺度の下位項目（共感）に一致している内容である。

- ① そのような状況であなた（夫）が一番はじめに発すると思われる言葉をお答えください。
- ② あなた（夫）はどのように対応しますか。
- ③ 妻はどのような対応を期待していると思いますか。

このような場面に遭遇した時に、適切に対応できるように妊娠期から準備できることはありましたか。

(3) 場面3 「妻の苛立ちの場面」(無視・回避)

夫は休日であり、家事・育児を一緒に行ない手伝った、やっと一息ついて終わったと思ってくつろいでいる。しかし、何か妻の機嫌が悪い。妻は、夫がいるのに思うように家事・育児が終らず、夫にもっと手伝って欲しいのに、なぜ、夫は休んでいるのか、気がつかないのかと苛立っている。夫は、「なぜ、手伝ったのに、妻は苛立っているのか。言ってもらわないとわからない」と思っている場面である。これは、夫婦コミュニケーション態度尺度の下位項目（無視・回避）に一致している。

- ① そのような状況であなた（夫）が一番はじめに発すると思われる言葉をお答えください。
- ② あなた（夫）はどのように対応しますか。
- ③ 妻はどのような対応を期待していると思いますか。
- ④このような場面に遭遇した時に、適切に対応できるように妊娠期から準備できることはありました。

4. 調査内容

4.1. 基本属性

- 1) 妻側：年齢、結婚年齢、職業、就業形態、学歴、家族形態、子育てに関する相談者の有無、不妊治療の有無、子どもの性別、年齢
- 2) 夫側：年齢、職業、就業形態、帰宅時間、学歴

4.2. 尺度による評価（表7, 8, 9）

夫婦ペアレンティング調整尺度、夫婦コミュニケーション態度尺度、コーピング尺度を用いた。

- 1) 「夫婦関係の調整」尺度：夫婦ペアレント調整尺度
父親の子育てに関与に対して母親が行う促進行動（9項目）と抑制行動（8項目）働きかけを評定するもの。父親にも使用されている。
- 2) 夫婦間コミュニケーション尺度：「威圧」「共感」「依存・接近」「無視・回避」に関連する項目があり、22項目から成り自分→相手及び相手→自分のコミュニケーション態度について別々に設問し、各項目について4件法で測定する。
- 3) コーピング尺度：
- 4) 評価内容、観察者からのフィードバック内容
- 5) プログラム実施後の感想

5. データ収集方法

- 1) プログラム実施群
 - (1) プログラム評価を行うために、プログラム前後の質問紙、プログラム実施中の参与観察、プログラム後のインタビューにてデータ収集を行う。
 - (2) 参与観察
プログラムの実施状況、参加者の様子や言動、特に講義、シミュレーション実施状況、自己評価、他者評価、ディスカッション時の様子や言動について参与観察を行う。観察した内容は、できるだけ忠実にメモをとる。
 - (3) プログラム終了後のインタビュー
プログラム終了後、半構成的インタビューを行う。内容としては以下の通りである。
 - ①産後の夫婦関係の変化、産後の母親の心理的变化について、
 - ②産後どのように対応していこうかと考えているのか

③プログラムに関する評価

- a. 今回の経験は有意義であったか
- b. 今回の経験は満足できたか
- c. 出産後役に立ちそうか

(4) アンケートの実施①（プログラム実施前・後）

①基本属性

妻側：年齢、結婚年齢、職業、就業形態、学歴、家族形態、子育てに関する
相談者の有無、不妊治療の有無、

夫側：年齢、職業、就業形態、帰宅時間、学歴

②夫婦関係の調整尺度：夫婦ペアレント調整尺

③「夫婦間のコミュニケーション態度尺度」

④「コーピング尺度」

⑤プログラム実施中の意見交換の内容

(5) アンケート実施②（出産後3、4か月時）

①基本属性

妻側：児の性別、出生児体重、母親の睡眠時間、授乳回数、就業の有無、
形態

夫側：帰宅時間、休日

②「夫婦関係の調整尺度」

③「夫婦間のコミュニケーション態度尺度」

④「コーピング尺度」

- ⑤ プログラム評価：a. 妊娠期に行った経験は実際に役に立ったか
b. 妊娠期に行うことに意味はあるか

6. 分析方法

プログラムの内容と方法について、量的データに関しては記述統計を求め、自由回答については、類似の回答に分けその中で最多の回答を代表的な記述として抽出する。

プログラムを実施し、夫婦の反応を事例としてまとめ、その反応を検討した。

7. 結果

本研究では、子育てに関して妻から夫への思い、夫から妻への思いを明らかにしたことから、夫婦のそれぞれの役割調整に着目した。本研究のプログラムの概念枠組みは、育児期にある夫婦が、夫婦間での役割期待に対してお互いの動機づけとして、役割調整を図り夫婦間の相互性が高まることで、子育てを行う上で夫婦関係を再構築することができるように促すことである。

妊娠期に産後のことを意識し、夫婦関係を強化しながら問題解決の技法を学び、人間関係を向上させることを目的に開発した夫婦間調整を高めるプログラム(以下、プログラムと称する)のプログラム実施による効果を検討した。

プログラムに参加した夫婦は 20 組であり、出産後 3、4 か月経過した夫婦は 10 組であった。

7.1. プログラム実施直後と産後 3、4 か月後の事例

事例 A 初産婦 プログラム実施直後

- 1) 夫の意見: 子育ては、子どもが生まれると自然にできると思っていたし、なんとかなると思っていた。両親学級では生まれる前までのことしか学んでいないので、産後のことまでは考えてみなかった。
- 2) 妻の意見: 産後のことは、夫と話すことはなかった。今回学んだことをきっかけに夫と産後のことについて話をしようと思う。今でも妊娠中でも似たような場面にでてくることはある。自分の思っていることを相手に伝えなければいけないと思う。

事例 A 初産婦 3、4 か月後

- 1) 夫の意見: 同じような場面はあった。事前に対応方法を考えられていたので、スムーズ対応ができて困らなかった。事前に関験できると相手の気持ちを考えることができ、自分にも余裕を持つてできる。
- 2) 妻の意見: 事前に夫と話をしているので、相手の気持ちを考えるようになった。育児は初めてで、夜も眠れず大変だったけど、夫も大変だと思える。一人では全部できないけれど、夫は仕事で疲れているのに手伝ってくれている。

事例 B 経産婦 プログラム実施直後

- 1) 夫の意見: 二人目なので、一人目の時似たような場面があった。今回のプログラムを通して、妻の本音を知ることができた。実際の場面では、お互い意地があるので本音を言わないことがある。それでは夫婦は上手くいかないと思った。
- 2) 妻の意見: 一人目の時は、夫に対して不満があった。自分の思いを言ってくれないので何を考えているのかわからなかった。家事育児は私に任せっきりで手伝ってくれなかった。自分からやって欲しいことを伝えなかったことが悪かったと思う。

事例 B 経産婦 3、4 か月後

- 1) 夫の意見: 二人目だと妻一人では手が回らないことがある。一人目の時は、自分がやらなくてもなんとかなっていたけど、その時、妻は自分に対して色々な思いがあったと思っている。今は妻の気持ちを考えて、自分にできることは、少ないけど、できるだけ妻を支えようと思っている。
- 2) 妻の意見: 二人目の時の方が自分に余裕ができたし、夫も手伝ってくれるようになった。プログラムを実施した後に、夫と話をする機会が増えたと思う。自分一人で抱え込まないでやるのが大切だと思う。

7.2. 場面の参加者の意見交換の内容

1) 場面 1

夫の意見

- ①「大丈夫か」現状把握をする。妻と子どもの具合を把握する。
- ②自分が実施することがあるのか。病院への受診が必要かどうか。子どもの様子を把握する。お腹が空いていないか。おむつ効果の必要があるのか。
- ③自分のこと、子どものことを心配して欲しい。食事の準備ができていなくても、部屋の片付けができていなくても、現状に対して不平や不満に言わないで欲しいと思っている。
- ④家事・育児の分担方法について話し合いをする。

妻の意見

- ①「大丈夫か」言ってくれると思う。
- ②自分のこと、子どものことを気にかけてくれると思う。
- ③食事の準備をし、子どもにミルクやオム交換をして欲しい。
- ④日頃から食事の準備が出来るように練習をしておく。子どもが生まれてからのことを二人で具体的に話をする。子ども用品を購入際には一緒に行って欲しい。

2) 場面 2

夫の意見

- ①「それでどうしたのと話を真剣に聞く」「すぐに聞かなければいけない話と聞く」「重要な話なら明日にしてくれる」「今疲れているから明日にしてくれるかなあ」と言う。「単にうなずくだけ」であり、早く話が終わらないかという態度をとる。
- ②「真剣に話を聞く」「携帯電話を触りながら、早く終わらないかと相手に感じて欲しいと思う行動をとる」「今すぐ聞かなければいけない話なら聞くけど、それなければ明日にして欲しいと妻に伝える」「反応しない」
- ③「自分の話を聞いて欲しい」「妻は夫と話がしたい」と思っている。
- ④日頃からコミュニケーションをとるようにする。夫は自分が疲れているときには早急に聞かなければならないことは聞くけど、急がないことは、疲れていないときに聞くことを伝えておく。

妻の意見

- ①「それでどうしたの(積極的に話を聞いてくれる)」「それで(いやいや聞いている)」「無言(反応しない)」
- ②真剣に聞いてくれるときは、話を引き出そうとしてくれる。聞きたくないときは、携帯電話を触っている。
- ③聞いていないことはわかっているけど、話をしたいときはそれもいいと思っている。重要な話の場合は、夫が聞いてくれる時にする。早急に話をしなければいけないことはそのことを夫に伝える。
- ④自分の置かれている状況に寄って(疲れている時、次の日が早く出勤しなければいけない場合など)話を聞けるときとそうでない時があることをお互いに伝えておく。

3) 場面 3

夫の意見

- ①「何かをやればいいのかなあ(やる気が見られる場合)」「何かやろうか(ソファークつろぎながら、ゲームをしながら)」
- ②妻が苛立っているのはわかるけど何をしたらいいかわからない。積極的に何かをやろうとする場合といやいやする場合がある。
- ③自分から積極的に家事育児をやって欲しい。いつもやっていることだからわからないわけではない
- ④家事に関してはどのように日頃から行っているかを伝える。妻のやり方(洗濯物の干し方、台所の使い方、掃除の仕方など)妊娠中から一緒に行く。

妻の意見

- ①「何かやろうか」(やる気のある聞き方とやる気のない言い方がある)
- ②積極的にやる場合とやる気のない場合がある。やる気のない場合は、いやいややるので頼めない
- ③自分から積極的にやって欲しい。
- ④妻はやって欲しいことを具体的に伝える。妻は夫のやったことに関して不平不満は言わない。自分のやり方があるのなら妊娠中に伝えておく。

7.2. 夫婦ペアレンティング調整尺度 (表 24~26)

分析は夫婦ペアレンティング調整尺度の下位尺度である「促進行動」、「抑制行動」ごとに、2条件であるプログラム実施前後のデータを比較する対応のある t 検定を用いて、プログラムを用いたプログラム実施の効果に関する検討を行った。

プログラム実施前後の夫婦ペアレンティング尺度の「促進行動」、「抑制行動」を構成する項目それぞれを加算した値の平均値および標準偏差等を示した。

t 検定の結果、プログラム実施前後の平均値の差は、夫の「促進行動」で有意傾向(両側検定: $t(9) = -2.15, .05 < p < .10$)、「抑制行動」で有意(両側検定: $t(9) = 3.087, p < .05$)であった。したがって、夫ではプログラム実施後のほうがプログラム実施前より、「促進行動」が多くなる傾向にあり、また、「批判行動」が少なくなると言える。一方、妻では「促進行動」、「抑制行動」ともにプログラムによるプログラム実施の効果はみられなかった。

表 24、表 25 にプログラムによるプログラム実施前後の変化を示している。分析の結果、夫、妻、全体ともにプログラムによる有意なプログラム実施の効果があったとは言えないものの、男性で促進行動がプラスの変化が 4 名、全体で抑制行動がプラスの変化が 7 名となっており、一定程度の効果が得られる可能性が示唆された。

7.3. 夫婦コミュニケーション態度尺度 (表 27~36)

分析は夫婦コミュニケーション態度尺度の下位尺度である「威圧」、「共感」、「依存・接近」、「無視・回避」ごとに、2条件であるプログラム実施前後のデータを比較する、対応のあるt検定を用いて、プログラムを用いたプログラム実施の効果に関する検討を行った。

表 27~表 36 に、プログラム実施前後の夫婦コミュニケーション態度尺度の夫、妻の態度および自分の態度の「威圧」、「共感」、「依存・接近」、「無視・回避」を構成する項目それぞれを加算した値の平均値および標準偏差等を示した。

t 検定の結果、プログラム実施前後の平均値の差は、夫の「依存・接近」で有意傾向(両側検定: $t(10)=-1.727.05 < p < .10$)であった。したがって、夫ではプログラム実施後のほうがプログラム実施前より、「依存・接近」が多くなる傾向にあると言える。

7.4. コーピング尺度 (表 37)

分析はコーピング尺度の下位尺度である「問題焦点型」、「回避逃避型」、「情緒焦点型」ごとに、2条件であるプログラム実施前後のデータどうしを比較する対応のあるt検定を用いて、プログラムを用いたプログラム実施の効果に関する検討を行った。

35 に、プログラム実施前後のコーピング尺度の「問題焦点型」、「回避逃避型」、「情緒焦点型」を構成する項目それぞれを加算した値の平均値および標準偏差等を示した。

t 検定の結果、プログラム実施前後の平均値の差は有意ではなく、夫、妻ともにプログラムの効果はみられなかった。

次に、コーピング尺度の下位尺度である「問題焦点型」、「回避逃避型」、「情緒焦点型」について、出現確率が50%、50%となるプログラム実施前の中央値を用いて、中央値未満、中央値以上の2値データ化し、プログラムによるプログラム実施後の値の変化の比較をマクネマー検定(McNemar's test)により行った。マクネマー検定を用いることで、プラスの変化とマイナスの変化の比較となり、プログラムがどのような効果を認められるかを検討した。なお、中央値はプログラム実施前の全体のデータのものを適用し、「問題焦点型」で9.00、「回避逃避型」で9.50、「情緒焦点型」で5.00であった。

表 51 分析の結果、「問題焦点型」、「回避逃避型」、「情緒焦点型」では、夫、妻、全体ともにプログラムによる有意なプログラム実施の効果があったとは言えない。

最もストレスに感じていることとしては、プログラム実施前では妻は「出産のこと」「子育てのこと」などであった。夫は「仕事のこと」が多かった。

プログラム実施後3,4か月では、妻は「子育てのこと」「夫との関係性」であり、夫は「仕事のこと」「育児のこと」「自分の役割」などであった。

非プログラム実施群では、夫は「自分の時間が取れない」「仕事のこと」などをあげており、妻の場合は「育児のこと」「ワンオペであること(夫が育児に関わってくれない)」「母乳のこと」などをあげていた。

7.5. プログラム実施前後の研究参加者の反応 (表 38)

7.5.1. プログラム実施直後の夫婦の意見

プログラム直後の夫婦の意見としては、表 52, 53 に示す通りであった。プログラムに参加した夫は、「子どもが生まれてからの生活は想像していなかった」「産後の夫婦関係については考えていなかった」という意見が見られた。経産婦の夫の場合は、「初めての子どもへの時の妻の気持ちを知ることができた」という意見があった。

妻の意見としては、「産後の夫婦生活がイメージできた」「第 1 子の時の気持ちを夫に知ってもらえることができた」「今回のことをきっかけに夫婦で産後のことを話すことができた」という意見があった。

7.5.2. 出産後 3、4 か月の夫婦の意見 (表 39)

夫の意見は、「プログラムでやったときと同じような場面があって、対応がスムーズにできた」「妻の大変な気持ちを理解でき、仕事で大変だけど自分の子どもと一緒に育児をしようと思っている。」など産後の生活をイメージすることにつながった。また、妊娠中に産後の生活を意識ながら話し合うことは必要なことである。今は産後の生活について想像ができなかったが、今日のプログラムを通じて少しイメージがついた。

「二人目の出産なので、あまり役に立たなかった。(前回の経験があるので)」などの意見があった。「プログラム参加には初めて出産の夫婦がいたので、意見交換をすることで自分たちの経験が役に立てれば良いと思う」という意見があった。

妻の意見としては、「妊娠中に話し合いをしていたので、役割が自然とできている」「夫に察して欲しいと思っはいけないと思う。」

自分だけ大変と思っはいたけど、夫は私の気持ちを理解してくれていた」「事前に予想ができるので、対応ができるようになったと思う」など葛藤していたがプログラム実施後に変化がみられた。

8. 考察

本研究は、夫婦の関係調整に関する支援方法に関するプログラムを実施し、その効果を明らかにすることである。その効果については、プログラムを妊娠中に実施した群についてプログラム実施前と出産後 3、4 か月後にアンケート調査を行い、前後の結果を比較した。

産後は、子どもが増えることで、さまざまなことを行わなければならない。そこから生じる葛藤・不和があり、その解決にあたって夫婦間での調整が必要である。

夫婦ペアレンティング調整尺度、夫婦コミュニケーション態度尺度、コーピング尺度、自由記載の結果について、以下に考察を加える。

8.1. プログラムの効果

8.1.1. 夫婦ペアレンティング尺度

プログラムを実施した夫婦では、夫婦ペアレンティング調整尺度において、夫「促進行動」がプログラム実施前後で有意傾向を示した。また、夫の「批判行動」についてプログラム実施前、実施後において有意であった。それは、妊娠中にプログラムを実施したことで、夫が相手への理解を深めるために役立ったのではないかと考える。よりよい子育てを可能にすることを目指す重要な行動である。

妻は、プログラム実施前後での変化は見られなかった。それは、妻の方が夫より「促進行動」「批判行動」ともに高かったため、プログラム実施前後での変化が見られなかったと考える。妻は、非プログラム実施群のデータからも言えることではあるが、もともと高かったためプログラム実施後の値の変化は見られなかったと考える。プログラムを実施したことで、夫婦ペアレンティング尺度の変化としては、夫に影響を与えたと考える。

8.1.2. 夫婦コミュニケーション態度尺度

コミュニケーション態度尺度は、夫婦間のコミュニケーションの様相を検討するために作成されたものである。夫婦間コミュニケーションのあり方が夫婦関係維持には重要である。「ポジティブな養育行動の“最初の一歩”を促す支援が、子育てに対する前向きな感情を育む可能性がある」「パートナーの養育行動がお互いに影響し合い、父母の養育の組み合わせが子どもの発達に影響を与える可能性がある⁹⁵⁾」。夫では、プログラム実施後のほうがプログラム実施前より、「依存・接近」が多くなる傾向にあると言える。「依存・接近」は、相手への親和的接近を示す項目であり、相手に対してポジティブな感情を喚起する。

夫は、プログラムに参加したことで、相手への親和的接近を示したものであり、夫は妻の気持ちを知ることができたと思われる。それは、妊娠期から産後を見据えて夫婦で思いを共有することができたためと考える。

配偶者からのサポートは、母親の育児に伴う感情に大きな影響を与えることから、育児期の夫婦において大切なことである。非プログラム実施群においては、夫の「依存・接近」は妻の方が高かった結果から、プログラムを実施していない場合、夫は相手への親和的接近を示すことが難しく、プログラムを実施することで、妻である相手に親和的接近を示す機会となったのではないかと考える。

8.1.3. コーピング尺度

「問題焦点型」、「回避逃避型」、「情緒焦点型」では、夫、妻、全体ともにプログラムによる有意なプログラム実施の効果があったとは言えない。

最もストレスに感じることとして、非プログラム実施群では、夫は「自分の時間が取れない」「仕事のこと」など夫自身のことをストレスに感じており、妻の場合は「育児のこと」「ワンオペであること(夫が育児に関わってくれない)」「母乳のこと」など育児に関することをあげていた。それは、育児に直接、中心的に関わっているからであり、夫は育児を行って

いても、自分こととして捉えているのではなく、自分を中心に関わっているからではないと考える。

一方、プログラム実施群ではプログラム実施前には、ストレスの感じていることは、夫は「仕事」をあげており、出産後 3, 4 か月では「子どものこと」「妻は「妊娠中のこと」「産後の子育てのこと」をあげていた。その内容は、非プログラム実施群とほぼ同じ内容であった。出産後 3, 4 か月では、妻は「子どものこと」「母乳のこと」など育児に直接関連した内容であり、非プログラム実施とほぼ同じ内容であった。しかし、夫は、「ワンオペであること」という内容はなく、夫婦で大変だけれど育児を行っている実感があったのではないかと考える。

8.1.4. プログラム実施前後の研究参加者の反応

—夫婦で妊娠中に話し合うこと—

プログラム実施群の夫の語りから、「プログラムでやったときと同じような場面があって、対応がスムーズにできた。」「プログラムでやったときと同じような場面があって、対応がスムーズにできた。」から夫の行動の変容にプログラムの効果があったのではないかと考える。

夫は、子どもが生まれても日常生活においては、妻のように大きな変化はない。夫は、父親になる過程において、妊娠中に産後のこと意識したプログラムを実施することで、産後のイメージを持つことができたと考える。それまでは、「今までの夫婦はそれにやっていたから大丈夫」「今は、産後のことはイメージできない」と楽観的に考えていたと思われる。

プログラムを通して、夫婦で産後の生活について、夫婦で具体的に話しをする機会になったと考える。それは、出産後の夫婦の適合を最も強力にするのは出産前の夫婦の適合であり、「問題解決のためのコミュニケーション能力」を有していることが重要であると述べている。

それは、出産後に夫婦の危機に直面しても、元々の関係性やコミュニケーションの力があれば、その危機に対して乗り換えられると考える。今回のプログラムでは、産後に起こりそうな問題を取りあげて、それに対して意見交換することでその危機に対してあらかじめ準備することができるということの意味があると考えられる。

初産婦は、プログラムを実施することで、産後生活についてのイメージ化が図られ、夫婦で妊娠期から産後の育児を想定した事例場面について話し合い、育児期の夫婦が想定される問題を体験することで、育児期のイメージ化とその問題発生時には、夫婦の関係、特にコミュニケーションや対処の仕方等の調整ができるようになるといった効果がプログラム実施群には見られたと考える。

経産婦は、プログラムを通して前回の育児経験の時の大変さを振り返りことができた。夫の中には、1人目においての妻の大変さ夫は気づかなかったことに気づけ、2人目の育児を行う上での夫婦の関係調整が図られたという意見も聞かれ、経産婦においても効果が見られたと考える。

人間は、予想していたこと、経験したことに対して、対処行動をとれるが、予想

をしていないことに対しては、冷静に対処行動をとれないことがある。そのためには、プログラムの実施を通して、産後の生活をイメージして、夫婦で育児を行っていくという基盤を妊娠中から作っていることにつながると考える。

産後の妻にインタビューを行ったところ、育児期において夫の関係で様々な葛藤を経験しており、そのなかから回避できた場合と、回避できなかった場合があることが明らかになった。それは、育児をおこなうのは主に妻が行っている現在において、妻が大変なのはわかっているが、回避する過程では、妻が大変なのは自分だけではなく、夫なりにも大変ことをわかることで、お互いの歩み寄りよったことではないかと考える。

8.2. 育児期の夫婦における夫婦の関係調整の重要性

妊娠中から産後の生活をイメージすることで、夫婦で子どもが生まれてからの方針を話す機会となる。そうすることで、お互いの思いを妊娠期から共有することができる。そのため、育児を行う時間的にも精神的にも余裕がない状況においても、夫婦の認識のずれを少なくすることができ、認識のずれから生じる問題に発展しないで済むことになる。

また、夫は、プログラムを通して、産後の妻の状況を理解する上での参考になると思われる。それは、プログラム実施群の語りの中から、「初めての子育ての時は、妻は大変だったことを初めて知った。」「自分だけ大変とっていたけど、夫が私の気持ちを理解してくれている」などお互いを理解することにつながったと考える。それは育児期にある夫婦では、夫婦関係のバランスを保つために工夫や再調整の実施、言い換えれば夫婦の関係調整を図ることにつながると考える。

育児期にある夫婦にとっては、妊娠期から産後を見据えて、夫婦の関係調整を図るための準備を行う必要である。そのためにも、助産師は、移行期にある妻への助言指導として情緒的サポートが必要である。笹木によると「妊娠期の夫への育児支援が、出産後育児をすることの動悸に影響を与える」³⁶⁾と述べており、母親のニーズや感情を夫が共有できるように働きかけることも母親への重要な育児支援になり、また状況に応じて妻の処し方について、母親が問題状況を変化させるための行動を実行する対処行動をとれるように、母親の抱える育児ストレスに対してともに解決方法を探っていくことが、母親の育児への肯定的感情を高めるために重要である。日本の夫婦で特徴的なのは、児の出生で夫婦に危機が訪れるというよりは、妻側からは夫に、父親役割を果たして欲しい、もっと家庭に関与して欲しいという要望が強いことである。

そのためには、母親の立場を理解し、労いのことばをかけるなど母親が自分を責めないような配慮が必要と考える。また、母親の思いを夫が共有できるような働きかけることも移行期に夫婦には必要なことだと考える。

8.3. 実践への適用について

本研究において、妊娠期から育児期にある夫婦に対して夫婦の関係調整を支援方法について検討した。

プログラムを実施して、その効果としては、第一子を出産した夫婦に対しては、効果があったのではないかと考える。それは初めてのため、経験することすべてが初めてであり、戸惑うことが多く、プログラムに参加したことで夫婦間での起こりそうな事例を経験することで、予測をもって、行動がとれたのではないかと考える。プログラムを通して、夫婦で妊娠期から産後を見据えた準備としての夫婦の話し合いが行われたことで、夫婦での関係調整ができたと考える。それは単に夫婦で話し合ったからできたのではなく、助産師としての支援があったからできたのではないかと考える。

夫婦関係は、親役割としての養育行動やその後の親子関係にも影響を与えることになり、育児期における夫婦関係に関する研究は重要となる。日本で夫婦関係に関する研究がなされるようになったのは1990年代後半に入ってからであり、夫婦関係でも、ある一方が他方へ影響を与えるという関係を反映しているものが多く、¹¹⁶⁾⁻¹¹⁷⁾夫婦の関係性に関わる研究は少ない。

夫は育児参加が少ないとしても、家族の最小共同体の片割れとして妻に関心を持ち妻と同じ気持ちで育児に向き合い、夫婦の関係調整行っていく必要がある。育児期の親役割の評価は、育児や家事の参加量ではなく、夫婦が相互の育児や家族形成への期待を理解し¹¹⁸⁾⁻¹¹⁹⁾、パートナーとしてコミットするかという視点も取り入れていくことも大切と考えられる。

9. 小括

- 1) 妻は、プログラム実施前後での夫婦ペアレンティング調整尺度の変化はなかったが、夫は、プログラム実施前後の平均値の差は、「促進行動」「批判行動」で有意傾向であった。プログラムを実施したことで、夫が相手への理解を深められた。
- 2) 夫は、プログラム実施前後の平均値の差は、夫の「依存・接近」で有意傾向であり、プログラムに参加したことで、相手への親和的接近を示したものであり、夫は妻の気持ちを知ることができた。
- 3) 「問題焦点型」、「回避逃避型」、「情緒焦点型」では、夫、妻、全体ともにプログラムによる有意なプログラム実施の効果があったとは言えない。

第 5 章 研究総括

第 1 節 結論

1. 妻は、夫に対して自分の辛い気持ちを受け止め、それに答えて欲しいと考えており、夫に対して、自分の気持ちを察して家事・育児をするように求めるのではなく、夫にやって欲しいことを、具体的に言葉で伝えることが重要であることが示唆された（研究 1）。
2. 時間経過に伴い、出産直後期、混乱期、調整期、学習期、葛藤回避期、関係調整期に至ることが示され、夫婦関係の調整には、葛藤と回避のプロセスに注目した支援の重要性を明らかにした（研究 1）。
出産直後期、混乱期は避けられないが、調整期以降の時期に合わせた支援を検討することの有効性は確認できた。
3. 夫と妻の置かれている立場の違いにより、お互いが考えていることや求めていること、コミュニケーションの様相、ストレスに関するコーピング行動に差が見られたことで、夫婦それぞれに違いがあることが示唆された（研究 2）。
4. 夫婦関係の調整においては困難を示す夫婦に対しては、妊娠中から安定した時期に問題となることの体験することは支援する上で必要なことであり、本研究のプログラムを適応して、経過を支援することの重要性が示唆された（研究 3）。

第 2 節 本研究の臨床的有用性

妊娠期にある夫婦に対して、聞き取りから作成した場面（研究 1）を夫婦のコミュニケーション理論と本研究からの育児期に移行した際の夫婦の関係調整を図れる育児支援プログラムを構築して妊娠中に実施した。

育児期においては夫婦 2 人だけの問題でなく、子供の反応や存在に対する問題も生じるため、夫婦関係の調整は欠かせない。夫婦で妊娠期に、育児期の生活を想定し^{120) - 121)}、その想定した問題を夫婦と一緒に体験し、問題解決への対処を検討するという作業を実施する学習内容のプログラムは、3, 4 か月後のプログラム実施結果から効果があることが明らかとなった。自由記載から、「学習プログラムで体験したことが育児期において再現ドラマのように同一体験があり、その時は、夫婦で問題の対処に円滑に取り組めた。」や、「夫婦で妊娠期から準備することは必要なので、このようなプログラムを実施して欲しい。」との意見が聞かれ、本プログラムの重要性を確認することができた。

今後、育児期の夫婦にとっては、両親学級に育児期の夫婦関係を調整にする学修を取り入れることが効果的であり、このような観点から助産師としての支援法を充実させていくことが必要であると考えられる。

第3節 本研究の限界と今後の展望

1. プログラムの参加者は、自らの自由意志で研究協力を得たことから、基本的に夫婦関係の調整への関心や、育児に関する意識が高い夫婦であることが推察されるため、今後は、研究対象者を拡大し、多様な傾向からの解析が求められる。
2. 夫婦がお互いの葛藤について家事育児を中心としたコミュニケーションの内容について分析を行ったため、育児への移行期にある夫婦の葛藤についての分析としては一側面に過ぎない。今後は、育児への移行期にある夫婦の葛藤について多方面からの分析ができるように分析する必要がある。
3. とくに、夫婦関係の調整が実施できずに、親としての育児への対処行動に際して、自信に乏しい状況では、子育ての態度にも影響を及ぼす。
そこで、夫婦関係の調整を必要とする事例についての検討や、支援方法の在り方について、プログラムの改善と拡充が求められる。さらに、育児期の夫婦が相互に影響し合い、育児を行えるように支援する等、今後も夫婦の関係性や互いの影響について考慮したプログラム検討の発展が望まれる。
4. 妊娠中に夫妻での学習プログラムへの参加は 20 組であった。そのうちプログラム実施後の効果測定として、産後 3, 4 か月に参加した夫婦は 10 組であった。夫婦ペアでの結果を得たいとする本研究は、参加者の確保が難しいが、さらに、夫婦ペアでの参加者を確保して、本研究のプログラムの効果を検証していく必要がある。
5. 本研究では、育児への移行期において、夫婦の関係の調整について自を高め、可能な調整について相互に理解を深め、子育てに繋げるための支援の重要性を明らかにした。今後は実践を重ね、多様な背景を有する夫婦に適用が可能なプログラムの精選を継続することが要請される。
6. 妊娠安定期に、冷静に産後の起こりうる問題を想定して体験し、その問題を解決することを体験することは、産後に問題に遭遇した場合に解決に導きやすいということが想定される。

また、妊娠中の問題もあることから、妊娠中の問題も想定して事前に体験、解決できる体験ができることも今後は検討して導入していく課題がある。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、長期間にわたり丁寧なご指導と温かいご指導を賜りました指導教員である米山万里枝教授に深く感謝申し上げます。

また、研究論文をまとめるにあたり、筑波大学名誉教授である廣田栄子教授に深く感謝いたします。

本研究の趣旨にご理解いただき、妊娠期から産後 3 か月のお忙しい中、本研究にご協力いただきましたご夫婦の皆様、本研究のアンケート調査に、ご協力いただいたご夫婦の皆様に感謝申し上げます。

アンケート調査を行うにあたり、立川市母子保健係の皆様、子育て支援課の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 厚生労働省「国民生活基礎調査」(2021年度) 2022年9月30日アクセス。
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-21.html>
- 2) 鈴木和子, 渡辺裕子(2019). 家族看護学 理論と実際 第5版.
- 3) 男女共同参画局: 男女共同参画白書 令和4年度版全体版(2022年)
2022年10月3日アクセス
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r04/zentai/pd_fban.html
- 4) 内閣府 世論調査(2022年) 2022年8月20日アクセス
<https://survey.gov-online.go.jp/>
- 5) Hanson, S. M. and Boyd, S. T., 村田恵子ら監訳(2001). 家族看護学.
東京: 医学書院.
- 6) 厚生労働省 イクメンプロジェクト 2022年6月10日アクセス
<https://ikumen-project.mhlw.go.jp/>
- 7) 大関信子, 大井けい子, 佐藤愛: 乳幼児を持つ母親と父親のメンタルヘルス. 女性心身医学. 2013; 18(2): 248-255.
- 8) 柏木恵子. 夫婦関係・夫婦関係の変化とその心理. 日本家族心理学会. 金子書房. 2006; 2-23.
- 9) 堀口美智子. 妊娠期のペアレンティング教育 — ジェンダーと発達の視点を組み込んだ欧米のプログラムの考察 — F-GENS ジャーナル. 2005; 4(1): 13-20.
- 10) 前掲 8)
- 11) 厚生労働省「人口動態調査」(2021年度) 2022年9月30日アクセス。
[人口動態調査 結果の概要 | 厚生労働省 \(mhlw.go.jp\)](https://www.mhlw.go.jp/statistics/kenkyu/syosetu/syosetu.html)
- 12) 前掲 11)
- 13) 前掲 11)
- 14) 田中恵子. 父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性. 人間文化研究科年報. 2010; 25: 215-224
- 15) 岩尾侑充子, 斎藤ひさ子(2012). 妊娠期の夫婦関係に関連する要因. 日本助産学会誌. 2010; 26(1): 40-48.
- 16) Belsky, J: The determinants of parenting. Child Development. 1984; 55: 83-96.
- 17) 前掲 14)
- 18) 茂本咲子, 奈良間美保, 浅野みどり. 母親が認識する乳児の状態と育児困難感の特徴とその関連. 小児保健研究. 2010; 69(6): 781-789.
- 19) 明野聖子. 妊娠期から乳幼児期における父親の親としての発達に関する文献レビュー. 北海道医療学看護福祉学部学会誌. 2013; 9(1): 65-71.
- 20) 前掲 14)

- 21) 北村愛子. 母親の育児不安が養育行動に及ぼす影響. 山梨県立看護大学短期大学部要. 1998 ; 4(1). 65-78.
- 22) 前掲 15)
- 23) 前掲 19)
- 24) Fauber, R., Foreland, R., Thomas, A. M., and Wierson, M. 1990. "A Mediational Model of the Impact of Marital Conflict on Adolescent Adjustment in Intact and Divorced Families: The Role of Disrupted Parenting" 1990; 61:1112-1123.
- 25) Frone, M. R. Work-family balance. In J. C. Quick & L. E. Tetrick (Eds.), Handbook of occupational health psychology Washington, DC: American Psychological Association. 2003; 143-162.
- 26) 西川 一廉. 職務満足から生活の満足へ-2-流出, 補償, 分離仮説をめぐって. 桃山学院大学社会学論集. 1992; 26(2) : 25-48.
- 27) 26) 同上
- 28) 26) 同上
- 29) 金山美和子. 子育ての相互支援活動における現状と課題 (2). 児童文化研究所所報. 2004 ; 26 : 1-13.
- 30) 29) 同上
- 31) 吉田弘道. 育児不安研究の現状と課題. 専修人間科学論集心理学編. 2012 ; 2(1) : 1-8.
- 32) 前掲 14)
- 33) 前掲 14)
- 34) 前掲 14)
- 35) 神谷哲司, 菊池武剋. 育児期家族への移行にともなう夫婦の親役割観の変化. 家族心理学研究. 2004; 18(1) 29-42.
- 36) 前掲 16)
- 37) 武田丈, 立木茂雄. オルソン円環モデルの構成概念妥当性の検証に関する方法的な研究. 家族心理学研究. 1991; 5(1) : 33-51.
- 38) Olson, D. H., Sprenkle, D. H. and Russell, C. S., Circumplex model of marital and family system: I Cohesion and Adaptability dimensions, family types, and clinical applications Family Preocess , 18, 1979, 3-28.
- 39) 平山順子, 柏木恵子. 中年期夫婦のコミュニケーション態度夫と妻は異なるのか?. 発達心理学研究. 2001 ; 12(3) : 216-227.
- 40) 前掲 39)
- 41) 前掲 39)
- 42) 前掲 39)
- 43) 前掲 16)

- 44) 前掲 11)
- 45) 前掲 11)
- 46) 前掲 11)
- 47) 堀口美智子. 妊娠期のペアレンティング教育-ジェンダーと発達の視点を組み込んだ欧米のプログラムの考察-F-GENS ジャーナル. 2005 ; 4:13-20.
- 48) 斎藤真緒(2006). 今日における子どもをもつ意味変容-イギリスにおける Parenting Education の台頭. 立命館人間科学研究 (11), 125-135.
- 47) 前掲 47)
- 48) 前掲 47)
- 49) 前掲 47)
- 50) 前掲 47)
- 51) 佐藤小織. 初産婦の夫婦関係の評価と育児満足感を構成する諸要因の関係に関する研究育児初期の核家族に焦点をあてて. 日本助産学会誌. 2012;26:222-231.
- 52) 前掲 51)
- 53) 狩野 真理. 性役割観と夫婦関係満足度に関する質的研究:妻の視点から. 龍谷大学大学院文学研究科紀要. 2013 ; 35 : 1-16.
- 54) 菊地敦子, 石井大一郎. 育児期母親の働き方と夫婦間相互調整-宇都宮市及び周辺地域におけるプレ調査. 地域デザイン科学:宇都宮大学地域デザイン科学部研究紀要. 2021;9:87-98.
- 55) 加藤道代. 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討. 心理学研究. 2014;84 (6) : 566-575.
- 56) 金澤悠喜, 加納尚美. 第1子誕生に伴う夫からみた夫婦関係の変化の過程. 日本助産学会誌. 2018 ; 32 (2) : 202-214.
- 57) 森田千穂, 渡邊典子. 育児期における夫婦間のコミュニケーション態度が夫婦関係満足度に及ぼす影響-1歳6か月児・3歳児を育てる夫婦に着目して-新潟青陵学会誌. 2022 ; 15(2) :13-23.
- 58) 前掲 57)
- 59) 神谷哲司, 菊池武剋. 育児期家族への移行にともなう夫婦の親役割観の変化. 家族心理学研究. 2004;18 (1) 29-42.
- 60) 森友里奈. 子育てにおける夫婦関係に関する研究動向. 教育学研究室紀要. 2011 ; 9:37-45.
- 61) 岩尾侑充子, 斎藤ひさ子. 妊娠期の夫婦関係に関連する要因. 日本助産学会誌. 2012, 26(1), 40-48.
- 62) 明野聖子. 妊娠期から乳幼児期における父親の親としての発達に関する文献レビュー. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 2013;9(1):65-71.
- 63) 梅田弘子. 乳幼児を育てる共働き夫婦の育児における協働の構成因子. 母性衛生. 2018;58(4):541-548.

- 64) 大関信子, 大井けい子, 佐藤愛. 乳幼児を持つ母親と父親のメンタルヘルス: 夫婦愛着と自尊感情との関連. 女性心身医学. 2014;19(1):189-196.
- 65) 澤岬千晶, 小西清美, 永嶺絵里子, 仲村美津枝. 乳幼児を持つ父親の家事・育児への意識と役割行動. 沖縄の小児保健. 2014;41:45-48.
- 66) 高城智圭, 星旦二. 乳幼児をもつ父親の Quality of life と構造的にみた関連要因. 社会医医学研究. 2014;31(1):87-94.
- 67) 藤田優一, 西村明子, 勝田真由美, 石原あや, 末原紀美代, 大橋一友. 産後4か月の乳児をもつ父親の夫婦関係満足度への影響要因. 日本看護学会論文集母性看護. 2014;44:34-37.
- 68) 及川裕子, 久保恭子, 後藤恭一. 乳幼児を持つ親のメンタルヘルスと関連要因. 園田学園女子大学論文集. 2014;48:53-64.
- 69) 勝谷紀子, 亀山晶子, 坂本真士. 育児中の夫婦は互いの育児ストレスを正しく認識するか: 育児ストレス経験における透明性の錯覚と観察者の過度の推測. ストレス科学. 2013;28(1):44-52.
- 70) 藤岡奈美, 加藤菜実, 濱田菜摘. 1歳児の母親が抱く育児困難感と夫の育児参加に対する満足度との関係: 1歳6ヵ月健診受診時の実態調査より. 母性衛生. 2013;54(1):173-181.
- 71) 藤生君江, 吉川一枝, 神庭純子, 和田裕子, 山口明子. 乳幼児を持つ夫婦間の育児機能の特徴: 夫が正職員の場合における妻の就労の有無による比較. 岐阜医療科学大学紀要. 2012;6:67-75.
- 72) 西嶋真理子, 大野美賀子, 矢野知恵, 井出彩子. 1歳7ヵ月児養育者における出生順位別にみたパートナーとの協力と養育状況の分析. 日本地域看護学会誌. 2011;13(2):69-76.
- 73) 井出紀子, 幸松美智子. 夫婦間愛着スタイルと子育ての関係. 日本看護学会論文集: 母性看護. 2010;40:21-23.
- 74) 井出紀子, 幸松美智子. 乳幼児を持つ父親の愛着傾向が夫婦関係および子育てに与える影響. 看護学会論文集: 母性看護. 2008;39:105-107.
- 75) 宮本政子. 乳幼児を養育する母親および父親の育児支援に関する研究: 育児ストレス構造の特徴と対処行動との関連. 小児保健研究. 2008;67(5):729-737.
- 76) Meleis, A. I. Transitions Theory Middle-Range and Situation-Specific Theories in Nursing Research and Practice. Springer Publishing Company, New York. 2010.
- 77) 前掲 76)
- 78) 前掲 11)
- 79) 三上由美子, 井村真澄. 親への移行期における夫婦関係の良好さを支援するプログラムの効果. 女性心身医学. 2021;26(2):165-179.
- 80) 大橋幸美. 育児期の親性と家族機能の関連および親性に影響する要因の検討. 愛知母性衛生学会誌. 2017;34:14-22.

- 81) 稲桂, 森恵美, 坂上明子. 初産婦による仕事復帰後のワーク・ライフ・バランスの実現に向けた心理社会的・実践準備. 母性衛生. 2019;59(4):745-753.
- 82) 清水嘉子. 育児期にある夫婦ペアレンティング調整パターンと関連要因. 母性衛生. 2020;61(2):430-351.
- 82) 菅野幸恵. 母親が子どもをイヤになること: 育児における不快感情とそれに対する説明づけ. 発達心理学研究. 2001;12(1):12-23.
- 83) 荒生有花, 藤田愛, 山口咲奈枝. 未就学児を持つ母親の子育てと仕事を両立するための夫婦. 日本母性衛生, 2018;59(2):432-440.
- 84) 橋千恵, 中村絵里子, 中島夕美, 石田貞代, 萩原結花. 夫の家事育児行動の特徴と子どもへの愛着, 夫婦関係満足との関連. 母性衛生. 2008;49(1):65-73.
- 85) 山根一郎. 心理的距離の動態. 人間関係学. 2012;11:69-80.
- 86) 周玉慧. 夫婦関係に及ぼす葛藤対処方略の影響: 行為者-パートナー相互依存モデルに基づく検討. 対人コミュニケーション. 2017;5:1-22.
- 87) 青木聡子. 幼児を持つ共働き夫婦の育児における協同とそれにかかわる要因: 育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して. 発達心理学研究. 2009;20(4):392-392.
- 88) 前掲 78)
- 86) 中垣明美, 千葉朝子. 産後3・4か月の母親の母親役割獲得と妊娠における産後の身体的変化イメージや産後の身体的変化イメージや産後の生れる・育児に対する夫婦間調整との関連性. 日本助産学会誌. 2012;26(2):211-221.
- 87) 桑名佳代子, 細川徹. 1歳1ヵ月児をもつ親の育児ストレス. 東北大学大学院研究科年報. 2007;256(1):247-263.
- 88) 久世恵美子, 秦久美子, 中塚幹也. 産後1か月の母親の「育児上ネガティブな出来事」の実態と背景因子—第1報:「育児上ネガティブな出来事」の体験. 母性衛生. 2015;56(2):338-348.
- 89) 鈴木浩子. 母親の「育児困難」の概念分析. 日本保健科学学会. 2014;17(3):127-134.
- 90) 塩野悦子. 初めて子どもを育てる夫婦の産後3ヵ月までの相互作用. お茶の水医学雑誌. 2010;58:107-117.
- 91) 中山美由紀, 三枝愛. 1歳6ヵ月児を持つ母親に対する父親の育児行動. 母性衛生. 2003;44(4):512-520.
- 92) 鈴木由紀乃, 小林康江. 産後4か月の母親が母親としての自信を得るプロセス. 日本助産学会誌. 2009;23:251-260.
- 93) 飛田操. 青年期の恋愛行動の進展について. 福島大学教育学部論集. 1991;50:43-53.
- 94) 桑名行雄, 桑名佳代子. 1歳6ヵ月児をもつ父親の育児ストレス. こころの健康. 2006;21(1):42-54.

- 95) 中村朋子, 富安俊子, 田邊康恵他. 生後1週間の子どもをもつ父親の育児支援に関する研究. 2018;59(2):469-476.
- 96) 佐々木裕子, 高橋真理. 父親から見た第一子出生 前後における夫婦関係の評価-家族イメージ法による分析を中心に-家族看護研究. 2007;13(1):53-59.
- 97) 小島藍, 九十可奈子, 酒井美幸. 父親の育児に対する意識と行動が家族機能および母親の育児負担感に及ぼす影響. 小児保健いしかわ. 2010;3:14-22.
- 98) 尾関友佳子. 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂:トランスアクションナルな分析に向けて. 久留米大学大学院比較文化研究科年報. 1993;1:95-114.
- 99) 三井(中浦)由紀子, 喜多淳子. 第1子の早期育児期における父親の家庭内役割行動及びその関連要因. 神戸大学医学部保健学科紀要. 2005;21:63-77.
- 100) 愈幌欄. 対人葛藤に関する研究動向と課題. 東北大学大学院教育学研究科研究年報. 2016;64(2):105-120.
- 101) 東海林麗香. 持続的関係における葛藤への意味づけの変化:新婚夫婦における反復的な夫婦間葛藤に焦点を当てて. 発達心理学研究. 2009;20:299-310.
- 102) 岩藤裕美. 葛藤生起場面における夫婦間コミュニケーション・スタイル-尺度の作成と妥当性の検討-. 人間文化創成科学論業. 2008;11:183-193.
- 103) 得律慎子. 中途障害者家族の地域生活に見る家族レジリエンスのプロセス. 対人援助学. 2017;6:89-102.
- 104) 前掲 101)
- 105) 吉浪世華. 未婚カップルにおける葛藤対処方略が関係の変化をもたらすプロセスの検討-20代女性へのインタビューを通じた考察-. 跡見学園女子
- 106) Billig, Michael. Kurt Lewin's Leadership Studies and His Legacy to Social Psychology: Is There Nothing as Practical as a Good Theory. Action Research. 2006; 4(4):367-388.
- 107) McHale, J. P. & Rasmussen, J. L. Coparental and family group-level dynamics during infancy: Early family precursors of child and family functioning during preschool. Development and Psychopathology. 1998;10:39-59.
- 108) 加藤道代, 黒澤泰, 神谷哲司. 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と育児期による変化の横断的検討. 心理学研究. 2014;84(6):566-575.
- 109) 前掲 37)
- 110) 尾関友佳子 1990 大学生のストレス 自己評価尺度質問紙構成と質問紙短縮 について. 久留米大学大学院紀要比較文化研究. 1990; 1:9-32.
- 111) 中島久美子, 早川有子, 常磐洋子. 妊娠期の妻が満足と感じる夫の関わり に影響する要因の検討. 母性衛生. 2015;55(4):668-675.
- 112) Feinberg, M. (2003). The internal Structure and ecological context of coparenting. A framework for research and intervention. Parenting: Science and Practice, 12, 1-21.
- 113) Roy, K. M., & Dyson, O. L. (2005). Gatekeeping in context:

- Babymama drama and the involvement of incarcerated fathers. *Fathering: A Journal of Theory, Research, and Practice about Men as Fathers*, 3, 3, 289-310.
- 114) Brien, TB ., DeLongis, A., Pemaki, G., Puterman, E ., & Zwicker, A, (2009), *Couples coping with stress: The role of empathic responding* . *European Psychologist* , 14, 18- 28.
- 115) Marchand, J. F, & Hock, E. (2000). *Avoidance and attacking conflict - resolution strategies among married couples : Relationsto depressivesymptoms and marital satisfaction* . *Family Relations*, 49, 201-206.
- 116) 田中恵子. 1歳児をもつ子育て初体験の家族内ケア. *母性衛生*. 2014 ; 55(2) : 317-324.
- 117) 青木聡子. 幼稚園児をもつ夫婦の協同育児が主観的幸福感に及ぼす影響: 育児の計画における連携・調整に着目して. *国士舘大学文学部人文学会*. 2013;45:1-35.
- 118) 中村瑛一, 有本梓, 田高悦子他. 3歳児をもつ父親と母親における親役割達成感の関連要因. *日本地域看護学会*. 2016;19(1):4-13.
- 119) 三井(中浦)由紀子, 喜多淳子. 第1子の早期育児期における父親の家庭内役割行動及びその関連要因. *神戸大学医学部保健学科紀要*. 2005;21:63-77.
- 120) 矢吹理恵. 日米国際結婚夫婦における葛藤課題の調整過程: 課題の認知の言語化をめぐる質的分析. *家族心理学研究*. 2012;26(1):54-68.
- 121) 伊藤陽, 鈴木由美. 共働きの男性大学教員における父親役割獲得に影響する要因. *国際医療福祉大学学会誌*. 2023;28(1):60-71.

表1 育児期の夫婦の役割・調整に関する 文献の概要

No	筆者名 (発行年)	分類	目的	方法 対象	結果	考察
1 9)	梅田 (2018)	相談	乳幼児を育てる共働き夫婦の育児における協働の構成因子を明らかにし、育児支援の示唆を得る	無記名自記式 質問紙調査 保育園に通う乳幼児を育児中の共働き夫婦1081組	274組548名(回収率25.3%)の夫婦ペアデータを分析対象 育児の協働因子「相談と共有」「公平性の調整」「相手からの気遣い」「効率性の追求」「相手からの制御」が見いだされた。	共働き夫婦の育児の協働においては夫婦間の相談と共有が重要である。
2 10)	及川ら (2014)	相談	乳幼児をもつ親のメンタルヘルスの表態とその関連要因を明らかにする。	無記名自記式 質問紙調査 乳幼児を持つ夫婦580組	129組(回収率22.2%)母親の方がメンタルヘルスはよくない傾向であった。	夫婦間での子育てに関する情報交換や子育ての方針についての話し合いなどの時間をもつことが重要である。
3 11)	井手ら (2008)	相談	乳幼児を持つ父親の愛着傾向が 夫婦関係および子育てに与える影響	無記名自記式 質問紙 乳幼児を持つ両親255名	145人(回収率56.9%)128人分析対象育児負担を多くしている父親が、労働時間が短く、子どもを上手に育てていると感じ、妻との会話も多かった。	夫婦それぞれの役割をどう分担していくかという話し合いの必要性を再認識してもらうことが必要である。
4 12)	稲 ら (2019)	相談	初産婦による仕事復帰後のワークライフバランスの表現に向けた心理社会的・実践的準備を明らかにし、看護の方向性への示唆を得る。	半構造化面接法 出産後の仕事復帰から6ヵ月程度以内の初産婦12名	「仕事に向けた情報収集」「自分なりの働く母親像の模索」「夫婦の協力体制の再構築」「家庭外の支援体制の調整」「仕事復帰後に向けた生活の調整」の5つのテーマが導かれた。	仕事復帰予定の初産婦は夫婦の協力体制の再構築を妊娠中、出産後に行うことが重要である。
5 13)	荒生ら (2012)	相談	未就学児を持つ母親が子育てと仕事を両立するための工夫の因子構造を明らかにする	無記名自記式 質問紙調査	188名(回収率37%)未就学児を持つ母親が子育てと仕事を両立するための工夫の因子構造として「家事育児を分担するための夫とのコミュニケーション」「子育てをしやすくするための地域社会との積極的な関係作り」「出産・育児にあわせた雇用形態の変更または社会制度の利用」「子どもと過ごす時間を確保するための職場との調整」「調理時間を短縮するための食材準備の工夫」5つの因子が抽出された。	日頃から夫と会話をする時間を取り、気持ちや子育てに関することを共有し役割の分担と調整を行っていくことが子育てと仕事を両立するための一つである。
6 14)	加藤ら (2014)	相談	母親の認識する父親の子育て関与への促進・批判行動および父親の認識する母親から父親の子育て関与への促進・批判行動について分析する。	無記名自記式 質問紙調査	父親443名(回収率88.6%)母親432名(回収率86.4%)母親による児童期の促進行動は乳幼児期と同様に他の時期に比べて多い。父親は児童期の促進は乳幼児期より有意に少ない。	夫婦のペアレンティングは両者のやり取りがベースになって夫婦間で調整されている
7 15)	金澤ら (2018)	相談	第1子誕生に伴う夫からみた夫婦関係の変化の過程を明らかにする	グループフォーカ スインタビュー (FGI)	夫は「育児の大変さを理解し妻をサポートする役割の追加」夫婦は「夫婦関係のバランスを保つ工夫や再調整」「親になるお互いの受け入れ様とする姿勢の出現」変化の課程を繰り返しながら変化の過程を生じていた。	夫婦は再調整を行うことにより、親になるために共に成長していくことの必要性に気づき、双方が親になることを受け入れようとする姿勢を持つ。
8 16)	田中 (2014)	相談	1歳児をもつ子育て初体験夫婦の家族内役割を明らかにする。	半構造化面接法 1歳児をもつ子育て初体験夫婦10組	家庭内ケアでは、夫は妻の育児負担の軽減に働きかけ、妻は夫に子どもの世話行動について働きかけていた。情緒面の働きかけは夫婦共通に行われていた。	父親が積極的に関われば、育児の難しさを認識するため夫婦のコミュニケーションを豊かにしていくことが大切である。

No	筆者名 (発行年)	分類	目的	方法 対象	結果	考察
9 17)	加藤 (2018)	相談	母親の認識する父親の子育て関与への促進・批判行動および父親の認識する母親から父親の子育て関与への促進・批判行動についてが1年後の父親母親双方の認識の影響についてA P I Mの分析する。	無記名自記式 質問紙調査 第1子が幼児、児童期、思春期、青年期の夫婦ペア	父親の認する母親からの促進に対するパートナー効果、父親の認識する母親からの批判に対するパートナー効果以外全て有意であった。	子育てはお互いに促進または抑制により、全体として夫婦ペアレンディングを夫婦間で調整されている
10 18)	澤岬 (2014)	役割	出生率の高い沖縄県B市での父親の家事・育児参加への父親役割に対する父親の意識や役割行動の実態を明らかにする。	無記名自記式 質問紙調査 保育園に通う、0歳から6歳までの乳幼児をもつ父親131名	回収数66通（回収率51.1%）9割以上の父親が家事・育児へ積極的に参加しており、父親の家事・育児への意識の高さや妻との良好な関係性がみられた。	家庭での父親の家事・育児への参加が重要な役割を担う
11 19)	藤岡ら (2013)	役割	育児困難感、育児行動および「夫の育児参加」に対する母親の満足感を調査し、関連性を明らかにした。	無記名自記式 質問紙調査 1歳6か月健診を受信するために来所した母親	169人 「夫の育児参加」への満足度が高いほど低いことが明らかになった。「夫の育児参加」への不満足内容のは、「多忙から育児ができない」「育児に不慣れ」などと延べ夫の主体的育児参加や母親への精神的支えという父親の役割を遂行してほしいという内容が記載されていた。	母親は、夫への主体的育児参加や母親への精神的支えという父親の役割を遂行してほしいと願っている。
12 20)	藤生ら (2012)	役割	妻の就労の有無による乳幼児を持つ夫婦の育児機能の特徴を明らかにし、養育期の家族への支援のあり方の示唆を得ること	無記名自記式 質問紙調査 保育園児を持つ父母 373世帯	200世帯（回収率53.6%）有効回答158世帯分析対象120世帯 「主婦」の夫婦の特徴は「有職」の夫婦に比較し、家族の協力が得られにくい核家族、育児の世話が多い3歳以下の子どもが多かった。「有職」の夫婦の特徴は「主婦」の夫婦に比較し、拡大家族が多く、3歳以下の子どもが少ない。育児満足度は「有職」妻の方が有意に高く教育的機能内容も「子どもとのスキンシップ」であった。	「主婦」の夫婦は、夫婦揃って子育ての喜びを感じられるよう、社会における育児支援体制の強化が重要「有職」の夫婦は、夫婦間の意識は共通した因子が多く、役割分担も主婦のように明確ではない。育児負担感には「主婦」妻に強く家族内社会における育児支援体制の強化が重要である。「有職」の夫婦間の育児に関する役割分担が主婦のように明確でない。
13 21)	西嶋ら (2011)	役割	1歳7ヵ月児の主養育者の育児やパートナーとの協力の状況から家族支援に関するアセスメントの手がかりを得ること	無記名自記式 質問紙調査 1歳6ヵ月健診対象者の主養育者743名	269名回収（回収34.9%） 241名分析対象 第1子はパートナーとの協力関係は高く、出生順位が下がるほどパートナーとの関係が良好な層と層でない層に分かれる傾向がある。	第1子の段階から肯定的な養育態度を認めながら、パートナーとの協力関係も視野に入れて、養育者自身の健康支援や子どもの成長に応じた家族支援を行うことの必要性が示唆された。
14 22)	中垣ら (2012)	役割	産後の生活や育児に関する妊娠中の夫婦間の調整の有無およびその他の要因との関連を検討し、母親役割獲得に必要な妊娠中の支援策を探索すること	無記名自記式質問紙調査 3, 4ヵ月健診に参加した348名	113名（回収率32.5%）育児の調整と「肯定的受容では「児の世話」「児の相手」「児のお風呂」が有意に高かった」妊娠中の育児に関する調整は肯定的受容を高める。	夫婦での生活や育児への調整を促進するような働きかけが重要である

No	筆者名 (発行年)	分類	目的	方法 対象	結果	考察
15 25)	青木 (2009)	役割	育児における夫婦間の協力に着目し、協同育児としてそれに関わる要因を明らかにする。	無記名自記式質問紙調査 幼児を持つ共働き夫婦 623組	185組(回収率37.9%)を分析対象 夫は「配偶者からの育児の相談や調整の期待」を感じ取って「相互理解・調整」や「遊び相手の分担のバランス」が促進される。	配偶者という重要な他者からの育児に関する役割期待を感じ取ることが、協同育児につながる。
16 24)	高城ら (2014)	夫婦満足度	乳幼児を育てる父親のQOLと関連する要因とその関連要因について構造的に明らかにする。	無記名自記式質問紙調査 第3回全国家族調査の若年調査対象者のうち0~5歳の子どもをもつ男性 290人	父親のQOL関連構造は夫婦の関係性が基盤となり、夫婦の満足度を経路して間接的にQOLに関連していることが明らかになった。	父親のQOL関連構造は夫婦の関係性が基盤となり、夫婦の満足度を経路してQOLを高める方向に影響する可能性が示唆された。
17 25)	藤田ら (2014)	夫婦満足度	産後4か月の乳児をもつ父親の夫婦関係満足度の影響要因について明らかにする。	無記名自記式質問紙調査 生後4か月の乳児健康診査を受診した父親および母親 1980組	735組(回収率37.1%) 分析対象 726組夫婦満足度平均値21.4(SD=2.8)父親の夫婦満足度点を従属変数とした重回帰分析では8要因が採択され、八は親の夫婦関係満足度点の影響が最も大きく、次いで対児感情の接近の影響が大きかった。	父親は子どもに対して肯定的な感情を持って肯定的な感情は育児に対しての理解を示すことが、家族との関係を保つひとつの方法である。夫婦関係の満足度は相互に高めあう関係または低めあう関係である。
18 26)	井手 (2008)	夫婦満足度	夫婦の愛着を測定し、その愛着傾向が、夫婦関係および子育てにどのような影響を及ぼすかを明らかにする。	無記名自記式質問紙調査 乳幼児を持つ両親 255名	300人回収(回収率58.8%)113組分析対象 夫婦愛着スタイルと母親の育児不安との間に有意な差を認めた。夫婦間の愛着スタイルと母親の「今日の出来事をお互いに話す」に有意な差を認めた。	夫婦関係が上手くいけば、人間関係もうまく行くようになり、安定した子育てが望める
19 27)	橋ら (2008)	夫婦満足度	1歳半児をもつ夫の育児家事行動の特徴とその行動に関連する要因を主に子どもへの愛着、夫婦関係満足度の視点から妻との比較で明らかにする	無記名自記式質問紙調査 1歳半健診に未だ夫婦270組540人	59組118人(有効回答率21.9%)家事育児得点は夫が妻に比べて有意に低い。夫は平日子どもと関わる時間が多いほど育児家事得点が高い傾向があった。	夫の育児家事行動を高めるには、夫婦関係を良好にしたり、子どもへの愛着を高めたりする動きの強化が必要である。
20 28)	青木 (2013)	夫婦満足度	協同育児のどのような側面が配偶者の育児に対する評価に反映されるのかまた、協同育児と配偶者の育児への満足度は主観的幸福にどのような影響を及ぼすのか。	無記名自記式質問紙調査 幼稚園および保育園を通じて0~5歳児クラスの幼児を持つ夫婦 496組	248組(回収率50.0%)配偶者と育児の計画における連携や調整を図り、育児に関する情報や互いの考えを共有していることが配偶者の育児に対する満足度の高さに繋がっていた。	配偶者と育児における連携、調整を図り、互いの考えを共有することは育児に対する満足度の高さにつながる。
21 29)	神谷 (2013)	夫婦満足度	家庭内役割観が相互に調整されていない夫婦の関係性を明らかにする。	無記名自記式質問紙調査 保育園に通う未就学児をもつ父母 489組	276組(回収率56.4%)家庭内役割観タイプとして相互役割高群、相互役割低群視点格差群、が抽出された。	役割が調整されていない夫婦であっても必ずしも不和をもたらすのではなく、共感的なかわりによって関係性を維持している。
22 30)	勝谷ら (2013)	メンタルヘルス	1. 透明性の錯覚がみられるかを育児中の夫婦を対象に検討する。 2. 育児中の夫婦において過度の推測がみられるかを検討する。	無記名自記式質問紙調査 生後6か月から3歳までの乳幼児を持つ育児中の夫婦 61組	育児ストレスの経験に対して透明性の錯覚はみられなかった。しかし、透明性の錯覚がある夫婦とない夫婦に分けて分析すると妻において問う目生の錯覚がある夫婦では妻のサポート期待が高い。	妻において透明性の錯覚がある夫婦では、妻のサポート期待が高いほど夫の抑うつが高い。
23 31)	吉本 (2008)	メンタルヘルス	乳幼児を養育する母親と父親の育児支援について検討する	無記名自記式質問紙調査 1歳6か月健診を受診した児の母親および父親502名	母親164名(回収率37.8%)、父親135名(回収率26.9%) 母親は父親に比べ育児による制約感や育児情報の混乱などが育児ストレスに影響していた	母親や父親の育児ストレスと夫婦関係や自己の健康認識が影響するので、夫婦関係に着目した健康管理プログラムの開発が必要である。
24 32)	大橋 (2017)	メンタルヘルス	親性と家族機能との関連および親性に影響する要因を明らかにする	無記名自記式質問紙調査 育児期の親354名 638組	254名(回収率16.8%)親性と家族機能とは関連がある。親性に影響する因子としては、「親の性別」「心身の状態」「子育て・生活・経済的不安の有無」「育てにくさの有無」「養育体験」「家族形態」が確認できた。	親の心身の状態と親の不安の有無、親を取り巻く生活環境をアセスメントすることが必要である
25 33)	大関ら (2014)	メンタルヘルス	乳幼児をもつ母親と父親のメンタルヘルス状態夫婦愛着、及び自尊感情との関連を明らかにする	無記名自記式質問紙調査 6歳未満の子どもを持つ父母552組	180部(有効回収率16.3%)母親のGHQ得点とQMIとSESとに有意な相関関係あり、「父親の子育てに満足」の要因は母親のQMI得点に最も関連していた。	夫婦愛着が母親の自尊感情を高め、結果的に母親のメンタルヘルス向上に関連する

図 1

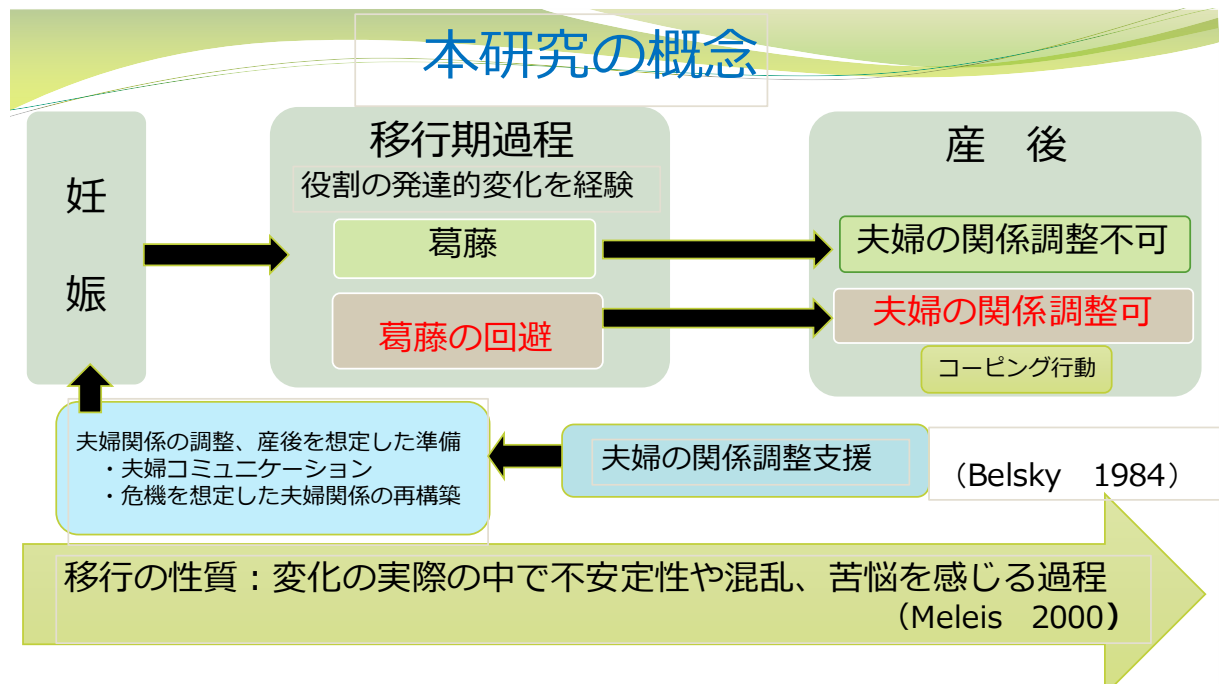


表 2 対象者属性 注：育休中（ ）

	例数	平均年齢	職業		子ども月令 平均
			無職者	有職者	
初産 ±9.6	25	35.8 ± 3.9	14	11 (8)	12
経産 ±14.8	8	34.5 ± 5.1	4	4 (0)	21

表 3 対象者の背景

No	初産経産	母親の年齢	職業	家族構成人数	家族形態	性別	出生体重 (g)	子どもの月齢 (か月)
1	初	42	有職 (フルタイム)	3		男児	2800	39
2	初	31	有職 (フルタイム)	3	核家族	男児	2587	16
3	初	29	有職 (フルタイム)	3	核家族	男児	3112	15
4	初	32	有職 (育休中)	3	核家族	女児	3400	6
5	初	38	有職 (育休中)	3	核家族	男児	2950	4
6	初	33	有職 (育休中)	3	核家族	男児	3160	8
7	初	40	有職 (育休中)	3	核家族	女児	2734	9
8	初	40	有職 (育休中)	3	核家族	女児	3168	5
9	初	30	有職 (育休中)	3	核家族	男児	3540	5
10	初	38	有職 (育休中)	3	核家族	男児	3661	6
11	初	34	有職 (育休中)	3	核家族	女児	3540	7
12	初	37	無職	3	核家族	女児	3045	27
13	初	35	無職	3	核家族	女児	2800	7
14	初	31	無職	3	核家族	男児	3412	16
15	初	36	無職	3	核家族	男児	3724	5
16	初	34	無職	3	核家族	女児	2924	7
17	初	39	無職	3	核家族	女児	2620	8
18	初	28	無職	3	核家族	男児	2798	4
19	初	35	無職	3	核家族	男児	3381	7
20	初	29	無職	3	核家族	女児	3321	9
21	初	38	無職	3	核家族	男児	3240	32
22	初	35	無職	3	核家族	男児	3381	7
23	初	35	無職	3	核家族	女児	3731	5
24	初	37	無職	3	核家族	女児	3150	28
25	初	32	無職	3	核家族	女児	2876	18
26	1 経	29	有職 (フルタイム)	4	核家族	男児	3100	14
27	2 経	37	有職 (フルタイム)	5	核家族	男児	2960	14
28	2 経	38	有職 (フルタイム)	5	核家族	男児	3200	24
29	2 経	38	有職 (育休中)	5	核家族	男児	2760	28
30	2 経	37	無職	5	核家族	男児	3696	3
31	2 経	24	無職	5	核家族	女児	2812	42
32	3 経	37	無職	6	核家族	女児	2856	4
33	3 経	36	無職	6	核家族	男児	2496	39

平均 (標準偏差) 3119.2 (349.7) 14.1 (11.5)

表 4

時期	カテゴリ	サブカテゴリ	コード	行動ごとの 単位数 (%)	発話音節数 (記載文字数)	コミュニケーションの 種類	
出産直後期	1. 出産後の困難と妻の受け止め	1.1 家事・育児の困難に直面	1.1.1. 子育ては思い通りにできない 1.1.2. 眠いのを我慢をして 1.1.3. 子育ては想像以上に辛い 1.1.4. 身体は辛いけどできる範囲で頑張る	2(12.5%)	3,291	葛藤	
		1.2 妻の受け止め	1.2.1. 育児に追われて心に余裕がない 1.2.2. 日頃の思いは夫に伝えている 1.2.3. 自分自身が充実している		1,771	依存・接近	
混乱期	2. 子どもが生まれてからの夫の言動・態度	2.1. 夫の無理解な態度	2.1.1. 育児は代われない。おまえは1日家にいるんだろ	3(31.3%)	1,268	威圧	
			2.1.2. 俺も仕事で大変なんだ				
			2.1.3. 家事・育児はおまえがやるのが当たり前				
			2.1.4. 自分の仕事ではないけど、仕方がないのでやってやっている				
		2.2. 夫の無神経な態度	2.2.1. 一日何していたの。1日家にいたんだよね		1,582	威圧	
			2.2.2. ご飯できていないの				
			2.2.3. 汚いね、掃除してないよね。(指でなぞる)				
			2.2.4. 赤ちゃんが泣いているよ。おむつぬれていないいるんじゃない。				
			2.2.5. おっぱいが足りないんじゃないの				
			2.2.6. 話しかけても何も言ってくれない				
2.3. 夫の理解のある対応	2.3.1. 家事や育児を代わりにしてくれる	1,245	共感				
	2.3.2. 毎日大変だねと労ってくれる 2.3.3. 率先して助けてくれる						
3. 夫との関わりから感じる妻の葛藤	3.1. 夫の言動からの妻の葛藤	3.1.1. わかってこない 3.1.2. 辛い(精一杯なのに) 3.1.3. 私の話を聞いてくれない。一日中子どもと一緒に大人と話をしていないことをわかってこない。	2(12.5%)	1,690	葛藤		
		3.1.3. 夫の言い方に苛立つ					
	3.2. 夫への期待と諦めの気持ちの揺らぎ	3.2.1. 本当はやって欲しいが文句を言われるので、頼むのを躊躇する 3.2.2. 夫には期待しているが諦めることが多い 3.2.3. 大変だけどやっていけそうと思うこともある		982			
		4. 夫との対話を求めて夫への働きかけ		4.1. 私を受け入れてくれない夫の対応 4.1.1. 夫はこれ以上何を求めているのかと言う 4.1.2. 夫はぼんやりしたことを言われても 4.1.3. 夫が威圧的態度なので何も言えない		2(12.5%)	1,293
4.2. 私を受け入れてくれる夫の対応	4.2.1. 私の気持ちを夫は受け止めてくれる 4.2.2. 面と向かって言ってくれないけどメールで気持ちを伝えてくれる	2,641	共感				
学習期	5. 夫の態度に応じた対処行動	5.1. 妻から夫への依頼方法の学習	5.1.1. 今までは、夫に苦手なことを頼んだから、これからはできることを頼もう	2(18.8%)	1,003	相手の理解	
			5.1.2. 今までの夫への態度が悪かったのかと振り返る				
		5.2. 夫に対する自分の気持ちの	5.2.1. 夫には本心を言えないことがある 5.2.2. 夫に言いたいことが言えず八つ当たりをしてしまう 5.2.3. 夫に自分の気持ちを打ち明けたいができるときとできないときがある。 5.2.4. 夫には言ってもわかってこないで、自分の気持ちを夫以外に伝えている		894	依存・接近	
			6. 葛藤の持続/葛藤の回避		6.1. 夫の妻への対応が変化しない	6.1.1. 俺がやることではない。おまえの役目だと夫は言う 6.1.2. 夫は私の言ったことしかやらない。それも渋々 6.1.3. どうせやってもやっても私に文句を言われると思っているので夫は何もやらない 6.1.4. 頼もうとすると夫はいなくなる	3(12.5%)
6.2. 大変なのは自分だけではないと言うことに気がつく	6.2.1. 私の思うようにやってくれないけどできることはやってくれるようになった 6.2.2. このままでいいのか 6.2.2. 大変なのは自分だけではなく、夫も大変なんだからできることは一人でやろうと思う	2,039	無視・回避				
	6.3. 相手への理解と譲歩	6.2.3. こんなに疲れているんだ 6.2.3. 気にしてくれることもある 6.2.4. 今までは何もしなかったけれど、手伝ってくれるようになった 6.2.5. 直接言ってくれないけど何も言わない。できることをしてくれるようになった	1,992	歩み寄り			
7. 新たな関係性の構築		7.1. 夫婦の関係性の硬直	7.1.1. もう頼まない 7.1.2. 一人でやっていくしかない	2(18.8%)	965	諦め	
			7.2. 夫婦の歩み寄り				
		合計				14	

表5 事例に対応する分析結果

カテゴリ	サブカテゴリ	概念	定義	コード () 叙述の発言者	対応行動	
1. 出産後の困難と妻の受け止め	家事・育児の困難に直面	1. 思い通りにできない (4)	妻の思い通りに家事を処することができずに苛立ちが生じる。	「子どものことで他に手が回らなくて、食事の準備をしたくてもできない」 (12:初産無職) 「どうして泣いているかわからない」 (5:初産無職、9:初産無職、20:初産無職) 「望んで預かった子なのに何でイライラするんだろう」 (15:初産無職、17:初産無職) 「赤ちゃんはずっと寝ていると思っている。」 (5:初産無職、15:初産無職)	できないから仕方がない 何もできない イライラしてつい夫にあたってしまふ思っていること違う私も泣きたい	
		2. 我慢をして (3)	夫の家事協力の仕方には納得できないが、我慢して受け入れようとしている。	「大変だけど家事・育児するのは自分の役目だから仕方がない」 (18:初産無職、19:初産無職) 「洗濯物を干してくれるけど乾かない干し方をする。やり直しするのも悪いし」 (17:初産無職) 「流し台を掃除してくれるけど汚い。そのことを言うと言ってくれなくなる。」 (22:初産無職)	自分でやる 黙っている 見ているしかない	
		3. 想像以上に辛い (5)	子どもにひどく泣かれ、睡眠不足で想像以上に辛くイライラが募る。	「子育ては、実際にやってみると想像以上に辛い」 (4:初産有職/育休中、5:初産有職/育休中、8:初産有職/育休中13:初産無職) 「子育てでこんなに睡眠が削られるとは思ってなかった」 (6:初産有職/育休7:初産有職/育休、17:初産無職) 「赤ちゃんは寝ているものだと思っていた。」 (15:初産無職) 「寝不足が軽くとイライラが募る」 (16:初産無職) 「子育ては楽しいことだけではない」 (16:初産無職)	辛いと思っている	
		4. できる範囲で頑張る (4)	自分のできる範囲で家事・育児を頑張るしかないと思っている。	「慣れない育児をするのは大変だけどやるしかない」 (4:初産有職/育休中、9:初産有職者/育休中) 「掃除、洗濯、食事の準備を今までのようにはできないけど」 (3:初産有職、27:経産有職) 「子どもが生まれたので、母親として役目を果たさない」と (6:初産有職者/育休中、18:初産無職) 「毎日授乳で起こされて辛いくらい頑張らないと」 (5:初産有職者/育休中、8:初産有職者/育休中)	自分のできる範囲で行っている 今までのようにはできないことを夫に伝えている 授乳やおむつ交換など 自分の時間を削っている 寝不足で大変だけど母乳で育てたいのでやるしかない	
	2. 妻の受け止め	5. 心に余裕がない (3)	子どものことで余裕がなくなり、イライラする。イライラする中で自分のことで精一杯であり、相手に対して思いやりの気持ちを持つことができないでいる。	「自分自身がいららしている」と相手思いやることできない (31:経産無職) 「なんで自分ばかり大変なんだろう」 (28:経産有職者/育休中) 「欲しくて授かった子なのにどうしてかわいく思えないんだろう」 (10:初産有職者/育休中、11:初産有職者/育休中)	いららして、優しい気持ちになれないでいる 自分ばかりと大変だと思ってしまう 子どもがかわいく思えないでいる。本当はかわいく思えないのになら思っている	
		6. はげ口で心が落ち着き (3)	日頃の思いを誰かに伝えることで妻の気持ちが充実している。	「頼る人が近くにいないと助かる」 (32:経産無職) 「ママ友の情報を大切にしている」 (19:初産無職) 「子育てをしている姉・妹に愚痴を言っている」 (24:初産無職33:経産無職)	近くの人を頼っている ママ友と交流している 姉・妹に話をしている	
		7. 自分自身が充実している (3)	自分自身が充実しているが大変なことでも乗り越えられる。	「自分自身が満たされていれば、大変なことでもできる」 (26:経産有職) 「子どもには私が必要とされている」 (28:経産有職) 「家事・育児は私の役目かな」 (6:初産有職者/育休中8:初産有職者/育休中9:初産有職者/育休中)	妻自身の気持ちが満たされている 子どものためがんばる 妻・母としての役目だと思っている	
	3. 子どもが生まれてからの夫の対応	夫の対応：無理解	8. 代われない (5)	自分ではできないと思っており、やろうとしない	「得意な人がやればいい」 (10:初産有職/育休中) 「俺は家事はできない」 (13:初産無職) 「お母さんでないと泣き止まない」 (19:有職/育休中) 「俺は家事はできない」 (13:初産無職) 「おむつ交換はできない」 (25:初産無職)	夫は家事・育児をやってくれないので、自分でやるしかない
			9. 俺も大変なんだ (3)	家事育児を行うことなく、自分のことを優先して、また労ってもらえない。	「俺は仕事をしているんだ」 (23:初産無職) 「家事、育児は俺の役目ではない」 (22:初産無職) 「俺は仕事で疲れているんだ」 (13:初産無職)	なんで自分の主張ばかりするのだから。私も大変なんだけど妻は思っている。
			10. おまえがやるのが当たり前 (5) (威圧的)	夫は家事育児を行うのは夫の役割ではなく、妻がやるのは当然と思っており、態度と発言に現れている。	「家事をほとんどやらない」 (7:初産有職/育休中、14:初産無職) 「俺の仕事はお金を稼いでくれることだ (12:初産無職) 「おれは食事の準備はできない (9:初産有職/育休中) 「1日中家にいるんだよね」 (4:初産有職/育休中) 「俺の稼いだお金で生活しているんだ (25:初産無職)	主婦だから仕方がないけど、一人暮らしをしていたからできるはずだと思うことがある。 私が働いていないから仕方がないわっているのにそこまで言わないでほしいと思っている
		夫の対応：理解	11. 無関心 (6)	何もしない代わりに、文句も言わない	「何も言ってくれない」 (31:経産無職) 「ご飯おいしいのか、まずいのかも言わない」 (12:初産無職) 「おかずが少なくても文句は言わない」 (32:経産無職) 「子どもが泣いていても何もしない」 (14:初産無職) 「日頃から省エネで生きているひとだから」 (29:経産有職) 「部屋が汚れていても気にしない」 (33:経産無職)	妻はなんらかの反応を求めており、関心を持ってほしいことに裏腹を感じている。
			12. 家事や育児を代わりにしてくれる (4)	夫ができることを、やろうとしてくれること	「妻は忙しいので、少しでもできることがあればやる」 (33:経産有職) 「何をしたらいいかわからなくもとりあえずやる」 (17:初産無職) 「自分(夫)は不満を言わない代わりに家のことをやっている」 (3:初産有職) 「手伝えない代わりに私(妻)が育児をやりやすいようなものを買ってくれる」 (19:初産無職)	夫はできることをやってくれるようになったと思っっている。
			13. 大変だねと労ってくれる (4)	妻の家事育児の大変さを理解して労ってくれる。	「いつもありがとうといってくれる」 (21:初産無職) 「おいしいご飯を作ってくれて嬉しい」 (23:初産無職) 「部屋を片付けてくれありがとう」 (25:初産無職) 「直接言ってくれないけどメールで労ってくれる」 (14:初産無職)	実際にやってもらわなくても夫が妻をねぎらってくれることをうれしく思っている
	夫の姿勢	14. 率先して助けてくれる (4)	夫が家事育児を行うのは当然と思っており、率先して行う。	「自分から子どもをお風呂に入れてくれる」 (27:経産有職) 「私が言わなくても、できるときはゴミ出しや買い物に行ってくれる」 (2:初産有職) 「子どもの面倒は見られないけど、食事は作ってくれる」 (30:経産無職) 「育児はできないけど、家事ならできるよ」 (3:初産有職)	夫行っていることに妻はとも助かっている	
		15. 自分の仕事ではないけど (3)	夫は家事育児を自分の仕事ではないけどいいながらも	「何かやることあるの？やろうか (ゲームをしながら)」 (1:初産有職、25:初産無職) 「口に出してやってほしいことをようやくやってくれる」 (19:初産無職) 「手伝おうか。俺の仕事じゃないけど」 (10:初産有職/育休中)	やってくれるだけままだと思っっている。自分から率先してやってくれればもっといいけどと思っっている。	

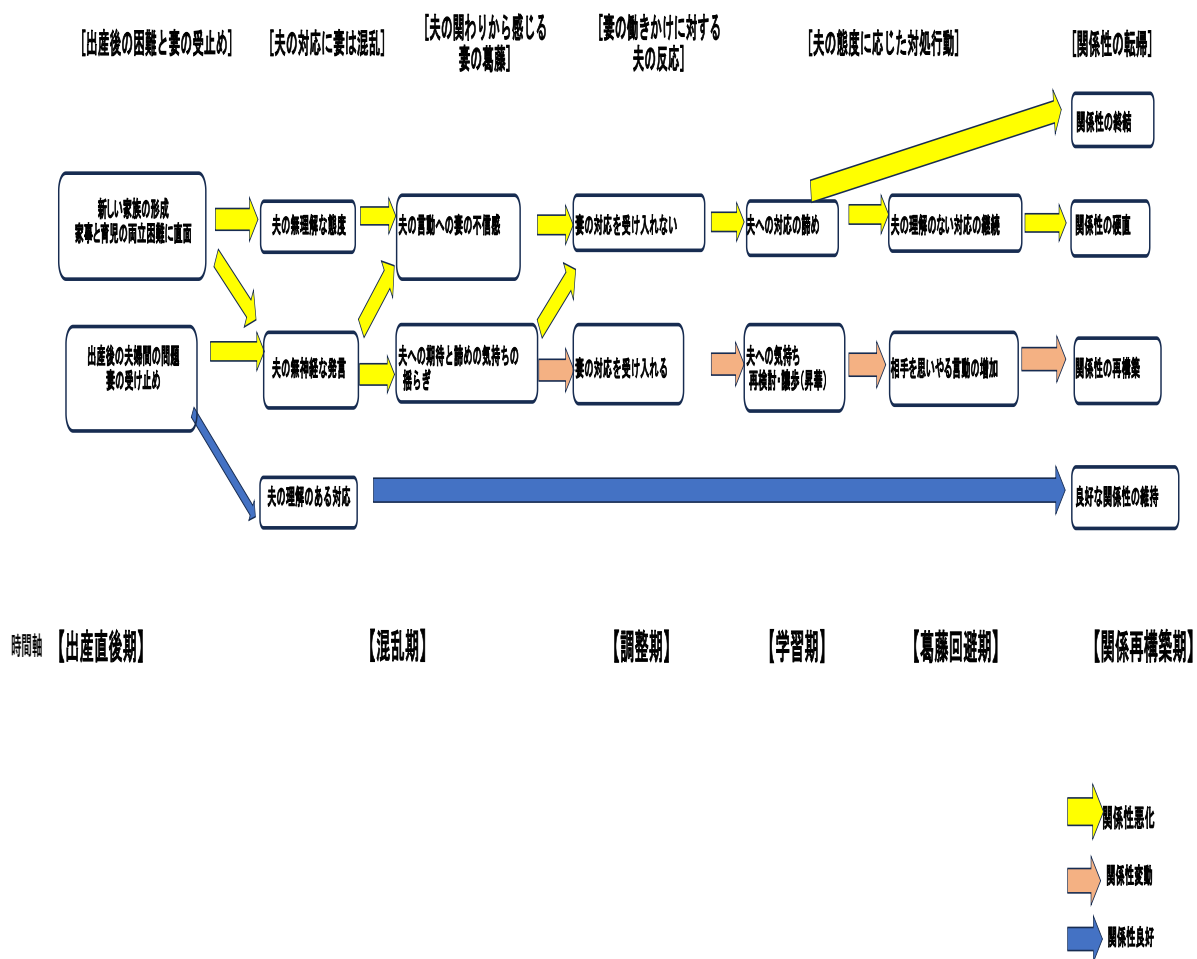


図4 育児という新しい家族形成への移行期にある妻の夫への葛藤・回避のプロセス（結果図）

表 6 夫婦ペアレンティング調整尺度

(支持・尊重・激励)

1. 夫（妻）に相手にしてもらっていることで、子どもがとても喜んでいると夫（妻）に伝える。
2. 子どもの相手をしてくれてありがとうと夫（妻）に伝える
3. 夫（妻）がよい親だということを夫が聞いているときに他人に伝える
4. 夫（妻）が一人で子どもと関わる時間を持つようにする
5. 夫（妻）をほめる（例：あなたは私より子どもの相手がうまい）
6. 手を貸してくれるように夫（妻）にお願いする
7. 子どものことについて夫（妻）の考えを尋ねる
8. 夫（妻）と子どもと一緒に過ごせるように手配や準備をする
9. “あなたはよいお父さんだ”と夫（妻）に伝える

批判行動（拒否・避難）

10. 子どもに対する夫（妻）の関わりで気に入らない行動を他に人に話す
 11. 夫（妻）がやっていることを取り上げて、自分のやり方でやる
 12. 怒っていることやいらいらしていることを夫（妻）に対する態度や表情に表す
 13. “あなたのしたことは間違っていると思う”と夫（妻）に言う
 14. “お父さんはおかしいよね”と子どもに向かって言うことで間接的に夫（妻）に伝える
 15. 夫（妻）を避難する（例：子どもの気持ちがわからないの？）
 16. ムツとして、あきれた顔を夫（妻）にむける
-

表 7 夫婦コミュニケーション態度尺度

質問項目	
威圧	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日常生活に必要な要件を命令口調で言う 2. 話の内容に気に入らないとすぐに怒る 3. あなたより一段上に立って小ばかにした受け答えをする 4. あなたが話しているのに「要するに」といって結論をせかす 5. あなたが心情を訴えても、まともにとりあわない
共感	<ol style="list-style-type: none"> 1. あなたの悩み事の相談に対して、親身になって一緒に考える 2. あなたに元気がない時優しい言葉をかける 3. あなたが相談すると、有益で参考になる意見をくれる 4. あなたの立場に共感しながら、誠実に耳を傾ける 5. あなたがおしゃれをしたとき、気づいて褒める
依存・接近	<ol style="list-style-type: none"> 1. ご主人自身の悩み・迷いごとがあるとあなたに相談する 2. 重要なことの決定はあなたの意見に従う 3. 会話が途切れると相手の方から話題を提供する 4. うれしいことがあると、真っ先にあなたに報告する 5. あなたに心を開いて内面的な突っ込んだ話をする 6. 会話が弾むように感情を豊かに表す 7. 1日のあなたの過ごし方などを相手の方から尋ねる
無視・回避	<ol style="list-style-type: none"> 1. あなたの話にいい加減な相づちをうつ 2. 他の事をしながら上の空で聞く 3. 都合の悪い話になると、黙り込む 4. あなたの態度・行動で変えて欲しいことがあっても黙っている

表 8 コーピング尺度

質問項目

問題焦点型

1. 現在の状況を変えるように努力する
2. 人に問題解決に協力してくれるように頼む
3. 問題の原因を見つけようとする
4. 自分のおかれた状況を人に聞いてもらう
5. 情報を集める

情動焦点型

1. 自分で自分を励ます
2. 物事の明るい面を見ようとする
3. 今の経験はためになると思うことにする

回避・逃避型

1. 先のことをあまり考えないようにする
2. なるようになれと思う
3. 時の過ぎるのにまかせる
4. 大した問題ではないと考える
5. 何らかの対応ができるようになるのを待つ
6. こんな事もあると思ってあきらめる

表 9 年齢別の人数分布

					人数 (%)	
	29 歳以下	30～34 歳	35～39 歳	40 歳以上	計	平均±S.D
夫	22(18.0)	43(35.2)	31(25.4)	26(21.3)	122 (100.0)	34.84±5.67
妻	28(23.0)	46(37.7)	35(28.7)	13(10.7)	122 (100.0)	33.31±4.65
全体	50(20.5)	89(36.5)	66(27.0)	39(16.0)	244 (100.0)	34.07±5.23

表 10 職業別の人数分布

	人数 (%)						計	有意確率
	会社員	公務員	自営業	専業主婦	無職	その他		
夫	75 (61.5)	35 (28.7)	9 (7.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (2.5)	122 (100.0)	p<.001
妻	50 (41.0)	19 (15.6)	5 (4.1)	34 (27.9)	3 (2.5)	11 (9.0)	122 (100.0)	
29 歳以下	24 (48.0)	13 (26.0)	2 (4.0)	8 (16.0)	2 (4.0)	1 (2.0)	50 (100.0)	n.s.
30～34 歳	54 (60.7)	19 (21.3)	4 (4.5)	8 (9.0)	0 (0.0)	4 (4.5)	89 (100.0)	
35～39 歳	28 (42.4)	14 (21.2)	3 (4.5)	12 (18.2)	1 (1.5)	8 (12.1)	66 (100.0)	
40 歳以上	19 (48.7)	8 (20.5)	5 (12.8)	6 (15.4)	0 (0.0)	1 (2.5)	39 (100.0)	
全体	125 (51.2)	54 (22.1)	14 (5.7)	34 (13.9)	3 (1.2)	14 (5.7)	244 (100.0)	

表 11 就業形態別の人数分布
(%)

人数

	常勤	非常勤	不定期	その他	無回答	計	有意確率
夫	113 (92.6)	2 (1.6)	6 (4.9)	0 (0.0)	1 (0.8)	122 (100.0)	P<.05
妻	71 (58.2)	9 (7.4)	6 (4.9)	1 (0.8)	35 (28.7)	122 (100.0)	
29 歳以下	36 (72.0)	4 (8.0)	2 (4.0)	0 (0.0)	8 (16.0)	50 (100.0)	n.s.
30~34 歳	72 (80.9)	4 (4.5)	4 (4.5)	0 (0.0)	9 (10.1)	89 (100.0)	
35~39 歳	47 (71.2)	3 (4.5)	3 (4.5)	1 (1.5)	12 (18.2)	66 (100.0)	
40 歳以上	29 (74.4)	0 (0.0)	3 (7.7)	0 (0.0)	7 (17.9)	39 (100.0)	
全体	184 (75.4)	11 (4.5)	12 (4.9)	1 (0.4)	36 (14.8)	244 (100.0)	

表 12 学歴別の人数分布

	人数 (%)							有意確率	
	高校卒業	専門学校卒業	短期大学卒業	大学卒業	大学院卒業	その他	無回答		計
夫	22 (16.6)	13 (18.6)	4 (5.5)	65 (66.3)	16 (13.1)	2 (1.6)	0 (0.0)	122 (100.0)	n.s.
妻	11 (9.0)	24 (19.7)	7 (5.7)	67 (54.9)	10 (8.2)	2 (1.6)	1 (0.8)	122 (100.0)	
29歳以下	9 (18.0)	10 (20.0)	0 (0.0)	28 (56.0)	1 (2.0)	2 (4.0)	0 (0.0)	50 (100.0)	p<.05
30～34歳	11 (12.4)	13 (14.6)	0 (0.0)	55 (61.8)	9 (10.1)	1 (1.1)	0 (0.0)	89 (100.0)	
35～39歳	7 (10.6)	8 (12.1)	7 (10.6)	31 (47.0)	11 (16.7)	1 (1.5)	1 (0.0)	66 (100.0)	
40歳以上	6 (15.4)	6 (15.4)	4 (10.3)	18 (46.2)	5 (4.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	39 (100.0)	
全体	33 (13.5)	37 (15.2)	11 (4.5)	132 (54.1)	26 (10.7)	4 (1.6)	1 (0.4)	244 (100.0)	

表 13 同居人数の人数分布
数 (%)

人

	0 人	1 人	2 人	3 人	4 人	5 人	計	有意確 率
29 歳以 下	0 (0.0)	4 (8.0)	31 (62.0)	14 (28.0)	0 (0.0)	1 (2.0)	50 (100.0)	
30 ~ 34 歳	0 (0.0)	11 (12.4)	38 (42.7)	30 (33.7)	8 (9.0)	2 (2.2)	89 (100.0)	
35 ~ 39 歳	1 (1.5)	6 (9.1)	24 (36.4)	24 (36.4)	9 (13.6)	2 (3.0)	66 (100.0)	n.s.
40 歳以 上	0 (0.0)	3 (7.7)	19 (48.7)	9 (23.1)	7 (17.9)	1 (2.6)	39 (100.0)	
全体	1 (0.4)	24 (9.8)	112 (45.9)	77 (31.6)	24 (9.8)	6 (2.5)	244 (100.0)	

表 14 子育てに関する相談できる人の有無別の人数分布 人数 (%)

	はい(いる)	いいえ(いない)	無回答	計	有意確率
夫	111 (91.0)	10 (8.2)	1 (0.8)	122 (100.0)	p<.01
妻	121 (99.2)	1 (0.8)	0 (0.0)	122 (100.0)	
29 歳以下	50 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	50 (100.0)	n.s.
30～34 歳	86 (96.6)	3 (3.4)	0 (0.0)	()	
35～39 歳	60 (90.0)	5 (7.6)	1 (1.5)	66 (100.0)	
40 歳以上	36 (92.3)	3 (7.7)	0 (0.0)	39 (100.0)	
全体	222 (91.0)	11 (4.5)	1 (0.4)	244 (100.0)	

表 15 現在の生活の充実感別の人数分布

	満足	どちらでも	不満	計	人数 (%) 有意確率
夫	102 (83.6)	16 (13.1)	4 (3.3)	122 (100.0)	p < .05
妻	92 (75.4)	29 (23.8)	1 (0.8)	122 (100.0)	
29 歳以下	37 (74.0)	11 (22.0)	2 (4.0)	50 (100.0)	n. s.
30～34 歳	73 (82.0)	13 (14.6)	3 (3.4)	89 (100.0)	
35～39 歳	56 (84.8)	10 (15.2)	0 (0.0)	66 (100.0)	
40 歳以上	28 (71.8)	11 (28.2)	0 (0.0)	39 (100.0)	
全体	194 (79.5)	45 (18.4)	5 (2.0)	244 (100.0)	

表 16 相手（夫・妻）の対応で辛いと感じることがある別の人数分布
人数（%）

	時々	たまに	全くない	無回答	計	有意確率
夫	21 (17.2)	52 (42.6)	49 (40.2)	0 (0.0)	122 (100.0)	n.s.
妻	22 (18.0)	50 (41.0)	43 (35.2)	7 (5.7)	122 (100.0)	
29 歳以下	8 (16.0)	15 (30.0)	24 (48.0)	3 (6.0)	50 (100.0)	n.s.
30～34 歳	16 (18.0)	37 (41.6)	33 (37.1)	3 (3.4)	89 (100.0)	
35～39 歳	12 (18.2)	33 (50.0)	20 (30.3)	1 (1.5)	66 (100.0)	
40 歳以上	7 (17.9)	17 (43.6)	15 (38.5)	0 (0.0)	39 (100.0)	
全体	43 (17.6)	102 (41.8)	92 (37.7)	7 (2.9)	244 (100.0)	

表 17 夫婦関係に満足別の人数分布

					人数 (%)	
	満足	どちらでも	不満	無回答	計	有意確率
夫	93 (76.2)	25 (20.5)	4 (3.3)	0 (0.0)	122 (100.0)	n.s.
妻	88 (72.1)	30 (24.6)	3 (2.5)	1 (0.8)	122 (100.0)	
29 歳以下	37 (74.0)	12 (24.0)	1 (2.0)	0 (0.0)	50 (100.0)	n.s.
30～34 歳	65 (73.0)	20 (22.5)	3 (3.4)	1 (1.1)	89 (100.0)	
35～39 歳	52 (78.8)	11 (16.7)	3 (4.5)	0 (0.0)	66 (100.0)	
40 歳以上	27 (69.2)	12 (30.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	39 (100.0)	
全体	181 (74.2)	55 (22.5)	7 (2.9)	1 (0.4)	244 (100.0)	

表 18 夫婦の会話の頻度別の人数分布

人数 (%)

	話しを良くする	時々する	まったく話しをしな い	計	有意確率
夫	105 (86.1)	17 (13.9)	0 (0.0)	122 (100.0)	n.s.
妻	104 (85.2)	18 (14.8)	0 (0.0)	122 (100.0)	
29 歳以下	45 (90.0)	5 (10.0)	0 (0.0)	50 (100.0)	n.s.
30～34 歳	76 (85.4)	13 (14.6)	0 (0.0)	89 (100.0)	
35～39 歳	56 (74.8)	10 (15.2)	0 (0.0)	66 (100.0)	
40 歳以上	32 (82.1)	7 (17.9)	0 (0.0)	39 (100.0)	
全体	209 (85.7)	35 (14.3)	0 (0.0)	244 (100.0)	

表 19 夫婦ペアレンティング調整尺度

	度数	平均値	標準偏差	平均値の差	t 値	自由度	有意確率 両側検定
促進行動							
夫	106	4.78	.89255	-.25157	-2.209	210	p<.05
妻	106	5.03	.76018				
抑制行動							
夫	106	2.40	.96154	-.71159	-5.057	210	p<.001
妻	106	3.11	1.08352				

図 2

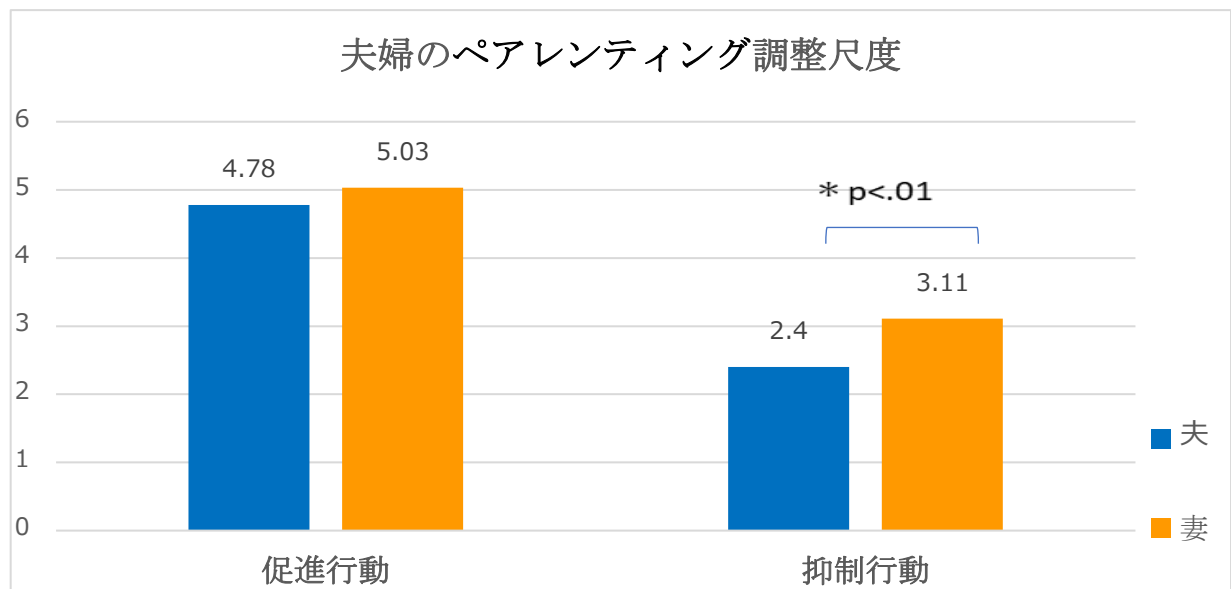


表 20 夫婦コミュニケーション態度尺度（自分への相手への態度）

	度数	平均値	標準偏差	平均値の差	t 値	自由度	有意確率 両側検定
威圧							
夫	105	1.59	.557	.121	1.67	208	.05<p<.10
妻	105	1.46	.498				
共感							
夫	105	3.06	.683	.068	.71	208	n.s.
妻	105	2.99	.697				
依存・接近							
夫	105	3.03	.546	-.353	-5.12	208	p<.001
妻	105	3.39	.448				
無視・回避							
夫	105	2.03	.577	-.411	-4.78	208	p<.001
妻	105	2.44	.666				

図 2

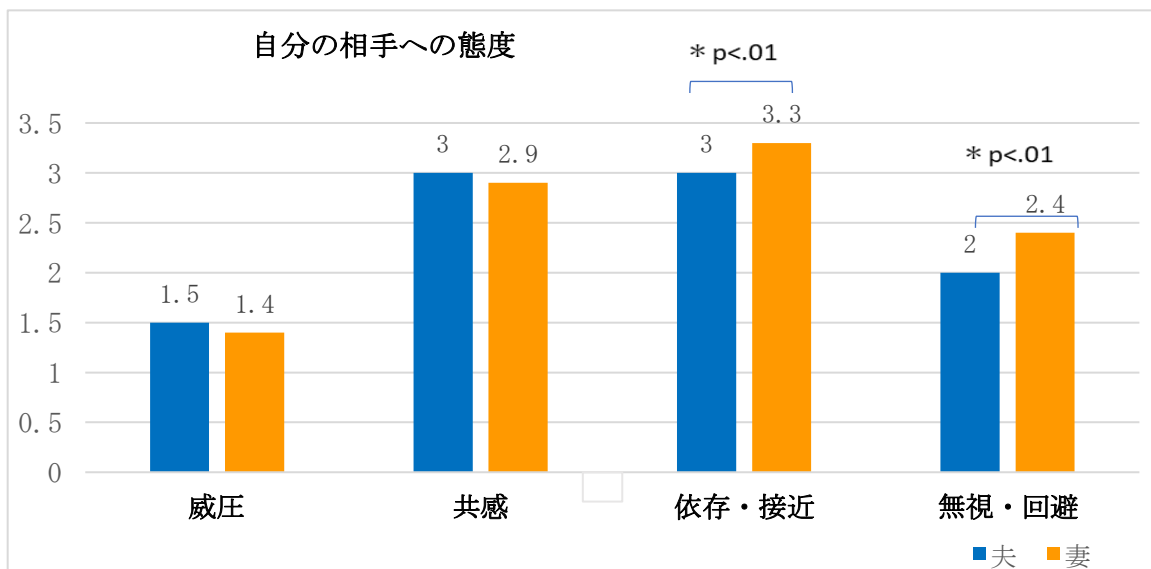


表 21 夫婦コミュニケーション態度尺度（相手の自分への態度の受け止め）

	度数	平均値	標準偏差	平均値の 差	t 値	自由度	有意確率 両側検定
威圧							
夫	105	1.76	.6005	.0629	.777	208	n.s.
妻	105	1.70	.5712				
共感							
夫	105	2.98	.6233	-.2133	-2.702	208	p<.01
妻	105	3.19	.5159				
依存・接近							
夫	105	3.03	.5465	-.3537	-5.128	208	p<.001
妻	105	3.39	.4484				
無視・回避							
夫	105	2.42	.6375	-.3024	3.222	208	p<.01
妻	105	2.12	.7198				

図 4

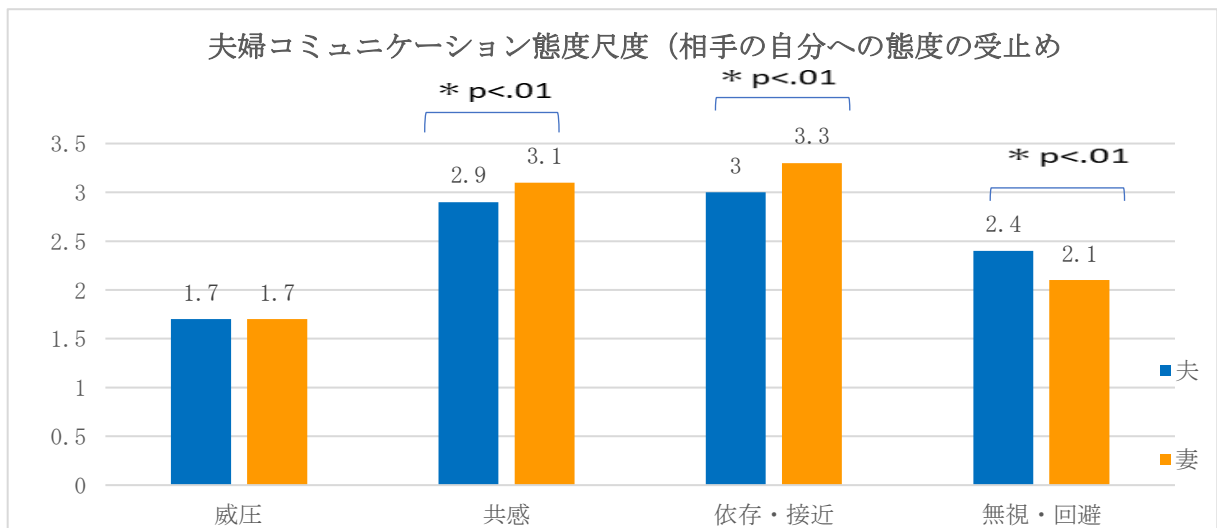


表 22 コーピング尺度

	度数	平均値	標準偏差	平均値の差	t 値	自由度	有意確率 両側検定
問題焦点型							
夫	94	1.496	.6563	-.1915	-1.820	186	.05 < p < .10
妻	94	1.687	.7807				
回避逃避型							
夫	94	1.539	.5914	-.0745	-.814	186	n.s.
妻	94	1.613	.6614				
情緒焦点型							
夫	94	1.805	.7224	.1064	1.034	186	n.s.
妻	94	1.699	.6880				

図 5 コーピング尺度

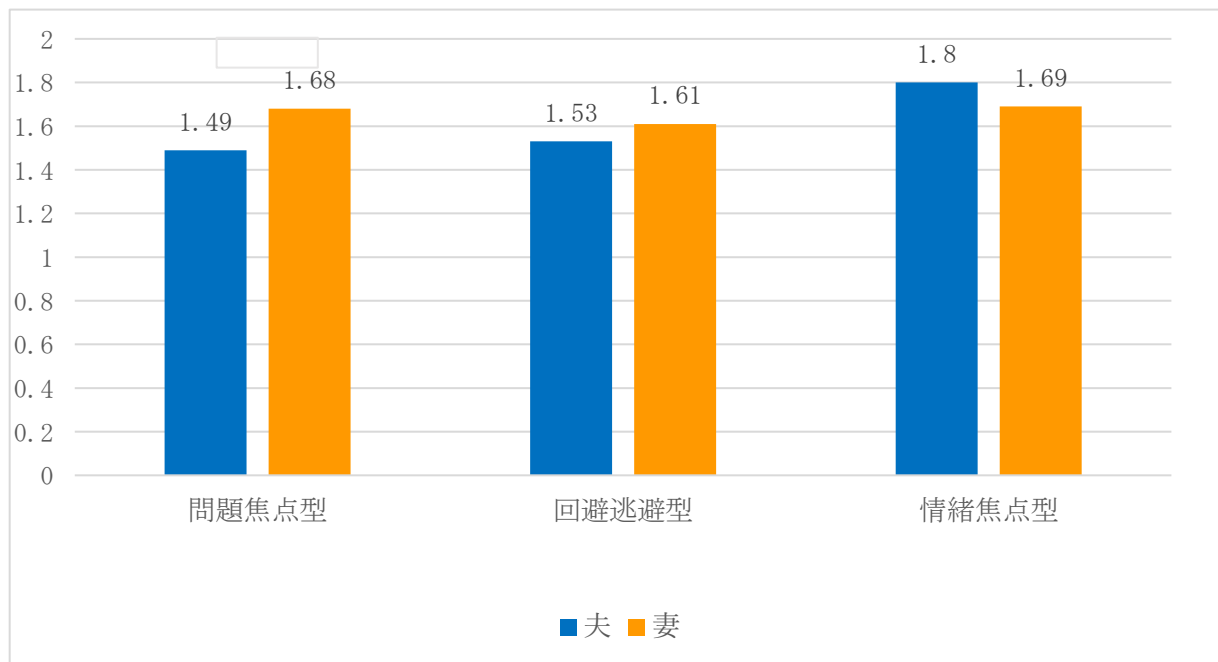


表 23 支援プログラムの内容

プログラムの内容	
目的	妊娠期から育児への移行期にある夫婦が産後を意識した夫婦関係の再構築を促進する
内容	<p>導入</p> <p>参加者への動機づけ 子どもが生まれてから想像していること 出産後を想定した夫婦での準備状況の把握 周囲からの支援の有無</p>
	<p>情報提供</p> <p>出産後のライフスタイルの変化に伴う夫婦関係について ・家族発達のライフサイクルについて 情報提供 ・妊娠期から産後の生活を意識するための情報提供</p> <p style="text-align: right;">➡ 夫婦間での話題作り</p>
	<p>対処 行動のイメージ化</p> <p>夫婦の関係調整の必要性を考える導入を実施するための夫婦コミュニケーション態度尺度の下位項目に合わせた事例を通してのお互いの意見の交換 <場面1> 「妻が夫へ家事・育児のサポートを求める場面」 (威圧、依存・接近) <場面2> 「妻が夫へ情緒的サポートを求める場面」 (共感) <場面3> 「妻の苛立ち場面」 (無視・回避)</p> <p style="text-align: right;">お互いの 思ったこと 言葉伝える</p> <p style="text-align: right;">夫婦のコミュニケーションを通して、夫婦関係の強化</p>
	<p>対処行動準備</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夫婦で事例を通して、お互いの意見交換を行うことでお互いの思いを知ることができる。 ・産後の生活をイメージできる。(現実には起こっていないことのため感情的にならない) ・産後までにお互いの行動を考えることができる。(夫婦間での調整) ・出産後の時間がないなかでうまくコミュニケーションを維持する工夫

表 24

夫婦ペアレイティング調整尺度_促進行動のプログラム実施前後の変化
人数(%)

	プログラム後_中央値 未満	プログラム後_中央値 以上	計	二項分布確率
夫				
夫_プログラム前	3 (42.9)	4 (57.1)	7 (100.0)	
_中央値未満				.375
夫_プログラム前	1 (33.3)	2 (66.7)	3 (100.0)	
_中央値以上				
夫_全体	4 (40.0)	6 (60.0)	10 (100.0)	
妻				
妻_プログラム前	1 (50.0)	1 (50.0)	2 (100.0)	
_中央値未満				1.000
妻_プログラム前	1 (12.5)	7 (87.5)	8 (100.0)	
_中央値以上				
妻_全体	2 (20.0)	8 (80.0)	10 (100.0)	
全体				
プログラム前	4 (44.4)	5 (55.6)	9 (100.0)	
_中央値未満				.453
プログラム入前	2 (18.2)	9 (81.8)	11 (100.0)	
_中央値以上				
全体	6 (30.0)	14 (70.0)	10 (100.0)	

表 25

夫婦ペアレイティング調整尺度_抑制行動のプログラム実施前後の変化 人数 (%)

	プログラム後_中央値 未満	プログラム後_中央値 以上	計	二項分布確率
夫				
夫プログラム前 _中央値未満	5 (83.3)	1 (16.7)	6 (100.0)	
夫プログラム前 _中央値以上	3 (75.0)	1 (25.0)	4 (100.0)	.625
夫_全体	8 (80.0)	2 (20.0)	10 (100.0)	
妻				
妻プログラム前 _中央値未満	2 (66.7)	1 (33.3)	3 (100.0)	
妻プログラム前 _中央値以上	4 (57.1)	3 (42.9)	7 (100.0)	.375
妻_全体	6 (60.0)	4 (40.0)	10 (100.0)	
全体				
プログラム前 _中央値未満	7 (77.8)	2 (22.2)	9 (100.0)	
プログラム 前_中央値以上	7 (63.6)	4 (36.4)	11 (100.0)	.180
全体	14 (70.0)	6 (30.0)	10 (100.0)	

表 26 プログラム実施ごと産後 3, 4 ヶ月後の夫婦ペアレイティング調整尺度

	度数	平均値	標準偏差	平均値差	平均値の差の標準偏差	t 値	自由度	有意確率 両側検定
促進行動								
夫								
プログラム (前)	10	39.10	12.53	-5.500	8.086	-2.151	9	.05 < p < .10
プログラム (後)	10	44.60	7.44					
妻								
プログラム (前)	10	48.10	3.69	.300	4.900	.194	9	n.s.
プログラム (後)	10	47.80	6.94					
抑制行動								
夫								
プログラム (前)	10	20.90	7.21	4.800	4.917	3.087	9	p < .05
プログラム (後)	10	16.10	5.89					
妻								
プログラム (前)	10	27.30	6.65	4.100	11.068	1.172	9	n.s.
プログラム (後)	10	23.20	8.01					

表 28 夫婦コミュニケーション態度尺度（相手の自分への態度の受け止め）

	度数	平均値	標準偏差	平均値の差	平均値の差の標準偏差	t 値	自由度	有意確率 両側検定
威圧								
夫	11	8.27	3.197	-.455	2.945	-.512	10	n.s.
プログラム前								
プログラム後	11	8.73	4.407					
妻	11	9.73	3.467	-.182	2.562	-.235	10	n.s.
プログラム前								
プログラム後	11	9.91	4.700					
共感								
夫	11	15.36	2.420	-.455	2.115	-.713	10	n.s.
プログラム前								
プログラム後	11	15.82	2.857					
妻	11	14.55	3.174	-.545	3.475	-.521	10	n.s.
プログラム前								
プログラム後	11	15.09	3.700					
依存・接近								
夫	11	20.73	3.003	-1.364	2.580	-1.753	10	n.s.
プログラム前								
プログラム後	11	22.09	3.208					
妻	11	22.27	2.687	-.836	2.580	-.818	10	n.s.
プログラム前								
プログラム後	11	22.91	3.562					
無視・回避								
夫	11	8.64	3.042	-.182	3.157	-.191	10	n.s.
プログラム前								
プログラム後	11	8.82	4.513					
妻	11	8.09	2.166	.636	1.286	1.641	10	n.s.
プログラム前								
プログラム後	11	7.45	2.841					

表 29 夫婦コミュニケーション態度尺度「威圧」のプログラム前後の変化 人数(%)

	プログラム後_中央値 未満	プログラム後_中央値 以上	計	二項分布確率
夫				
プログラム前_中央値 未満	4 (57.1)	3 (42.9)	7 (100.0)	.625
プログラム前_中央値 以上	1 (25.0)	3 (75.0)	4 (100.0)	
夫_全体	5 (45.5)	6 (54.5)	11 (100.0)	
妻				
プログラム前_中央値 未満	3 (75.0)	1 (25.0)	4 (100.0)	1.000
プログラム前_中央値 以上	1 (14.3)	6 (85.7)	7 (100.0)	
妻_全体	4 (36.4)	7 (63.6)	11 (100.0)	
全体				
プログラム前_中央 値未満	7 (63.6)	4 (36.4)	11 (100.0)	.688
プログラム前_中央 値以上	2 (18.2)	9 (81.8)	11 (100.0)	
全体	9 (40.9)	13 (59.1)	22 (100.0)	

表 30_夫婦コミュニケーション態度尺度_「共感」のプログラム前後の変化 人数(%)

	プログラム後 _中央値未満	プログラム後_ 中央値以上	計	二項分布確率
夫				
プログラム前_中央値未満	2(50.0)	2(50.0)	4(100.0)	1.000
プログラム前_中央値以上	1(14.3)	6(85.7)	7(100.0)	
夫_全体	3(27.3)	8(72.7)	11(100.0)	
妻				
プログラム前_中央値未満	4(80.0)	1(20.0)	5(100.0)	1.000
プログラム前_中央値以上	0(0.0)	6(100.0)	6(100.0)	
妻_全体	4(36.4)	7(63.6)	11(100.0)	
全体				
プログラム前_中央値未満	6(66.7)	3(33.3)	9(100.0)	.625
プログラム前_中央値以上	1(7.7)	12(92.3)	13(100.0)	
全体	7(31.8)	15(68.2)	22(100.0)	

表 31_夫婦コミュニケーション態度尺度「依存・接近」のプログラム前後の変化 人数(%)

	プログラム後_ 中央値未満	プログラム後_ 中央値以上	計	二項分布確率
夫				
プログラム前_中央値 未満	2 (50.0)	2 (50.0)	4 (100.0)	
プログラム前_中央値 以上	0 (0.0)	7 (100.0)	7 (100.0)	5.000
夫_全体	2 (18.2)	9 (81.8)	11 (100.0)	
妻				
プログラム前_中央値 未満	3 (60.0)	2 (40.0)	5 (100.0)	
プログラム前_中央値 以上	1 (16.7)	5 (83.3)	6 (100.0)	1.000
妻_全体	4 (36.4)	7 (63.6)	11 (100.0)	
全体				
プログラム前_中央 値未満	5 (55.6)	4 (44.4)	9 (100.0)	
プログラム前_中央 値以上	1 (7.7)	12 (92.3)	13 (100.0)	.375
全体	6 (27.3)	19 (72.7)	22 (100.0)	

表 32 夫婦コミュニケーション態度尺度「無視・回避」のプログラム前後の変化 人数(%)

	プログラム後_中央 値未満	プログラム後_中央 値以上	計	二項分布確率
夫				
プログラム前_中央値 未満	4(80.0)	1(20.0)	5(100.0)	3.75
プログラム前_中央値 以上	4(66.7)	2(33.3)	6(100.0)	
夫_全体	8(72.7)	3(27.3)	11(100.0)	
妻				
プログラム前_中央値 未満	3(100.0)	0(0.0)	3(100.0)	5.00
プログラム前_中央値 以上	2(25.0)	6(75.0)	8(100.0)	
妻_全体	5(45.5)	6(54.5)	11(100.0)	
全体				
プログラム前_中央値 未満	7(87.5)	1(12.5)	8(100.0)	1.25
プログラム前_中央値 以上	6(42.9)	8(57.1)	14(100.0)	
全体	13(59.1)	9(40.9)	22(100.0)	

表 33_夫婦コミュニケーション態度尺度_

	自分の態度「威圧」のプログラム前後の変化			人数(%)
	プログラム後_中央値 未満	プログラム後_中央値 以上	計	二項分布確率
夫				
プログラム前_中央値 未満	4(80.0)	1(20.0)	5(100.0)	1.000
プログラム前_中央値 以上	2(33.3)	4(66.7)	6(100.0)	
夫_全体	6(54.5)	5(45.5)	11(100.0)	
妻				
プログラム前_中央値 未満	2(66.7)	1(33.3)	3(100.0)	1.000
プログラム前_中央値 以上	2(25.0)	6(75.0)	8(100.0)	
妻_全体	4(36.4)	7(63.6)	11(100.0)	
全体				
プログラム前_中央 値未満	6(75.0)	2(25.0)	8(100.0)	.688
プログラム前_中央 値以上	4(28.6)	10(71.4)	14(100.0)	
全体	10(45.5)	12(54.5)	22(100.0)	

表 34 夫婦コミュニケーション態度尺度

	自分の態度「共感」のプログラム前後の変化			人数 (%)
	プログラム後_中央値 未満	プログラム後_中央値 以上	計	二項分布確率
夫				
プログラム前_中央値 未満	3 (75.0)	1 (25.0)	4 (100.0)	1.000
プログラム前_中央値 以上	0 (0.0)	7 (100.0)	7 (100.0)	
夫_全体	3 (27.3)	8 (72.7)	11 (100.0)	
妻				
プログラム前_中央値 未満	3 (60.0)	2 (40.0)	5 (100.0)	1.000
プログラム前_中央値 以上	1 (16.7)	5 (83.3)	6 (100.0)	
妻_全体	4 (36.4)	7 (63.6)	11 (100.0)	
全体				
プログラム前_中央 値未満	6 (66.7)	3 (33.3)	9 (100.0)	.625
プログラム前_中央 値以上	1 (7.7)	12 (92.3)	13 (100.0)	
全体	7 (31.8)	15 (68.2)	22 (100.0)	

表 35 「夫婦コミュニケーション態度尺度」

	自分の態度「依存・接近」のプログラム前後の変化			人数(%)
	プログラム後_中央値 未満	プログラム後_中央値 以上	計	
夫				
プログラム前_中央値 未満	4(66.7)	2(33.3)	6(100.0)	1.000
プログラム前_中央値 以上	1(20.0)	4(80.0)	5(100.0)	
夫_全体	5(45.5)	6(54.5)	11(100.0)	
妻				
プログラム前_中央値 未満	3(75.5)	1(25.0)	4(100.0)	1.000
プログラム前_中央値 以上	0(0.0)	7(100.0)	7(100.0)	
妻_全体	()	()	11(100.0)	
全体				
プログラム前_中央 値未満	7(70.0)	3(30.0)	10(100.0)	.625
プログラム前_中央 値以上	1(8.3)	11(91.7)	12(100.0)	
全体	()	()	22(100.0)	

表 36 夫婦コミュニケーション態度尺度

	自分の態度「無視・回避」のプログラム前後の変化			人数 (%)
	プログラム後_中央値 未満	プログラム後_中央値 以上	計	
夫				
プログラム前_中央 値未満	4 (80.0)	1 (20.0)	5 (100.0)	1.00.
プログラム前_中央 値以上	2 (33.3)	4 (66.7)	6 (100.0)	
夫_全体	6 (54.5)	5 (45.5)	11 (100.0)	
妻				
プログラム前_中央 値未満	5 (83.3)	1 (16.7)	6 (100.0)	1.000
プログラム前_中央 値以上	2 (40.0)	3 (60.0)	5 (100.0)	
妻_全体	7 (63.6)	4 (36.4)	11 (100.0)	
全体				
プログラム前_中央 値未満	9 (81.8)	2 (18.2)	11 (100.0)	6.88
プログラム前_中央 値以上	4 (36.4)	7 (63.6)	11 (100.0)	
全体	13 (59.1)	9 (40.9)	22 (100.0)	

表 37 コーピング尺度

	度数	平均値	標準偏差	平均値の差	平均値の差の標準偏差	t 値	自由度	有意確率 両側検定
問題焦点型								
夫								
プログラム前	10	9.00	3.432	1.200	3.458	1.097	9	n.s.
プログラム後	10	7.80	2.936					
妻								
プログラム前	10	8.30	3.713	.500	3.342	.473	9	n.s.
プログラム後	10	7.80	3.360					
回避逃避型								
夫								
プログラム前	10	7.90	4.864	.100	3.458	-1.897	9	n.s.
プログラム後	10	7.80	3.327					
妻								
プログラム前	10	8.30	4.598	.000	5.207	.000	9	n.s.
プログラム後	10	8.30	4.111					
情緒焦点型								
夫								
プログラム前	10	4.20	1.989	.300	1.767	.537	9	n.s.
プログラム後	10	3.90	1.663					
妻								
プログラム前	10	6.40	2.413	.400	2.413	.524	9	n.s.
プログラム後	10	6.00	1.491					

表 38 プログラム実施直後の夫と妻の意見

夫の意見

- ・初めての子育ての時、妻は大変だったことを初めて知った。
 - ・その時になれば何とかなると思っていたけど、今日知ってよかった。
 - ・先輩からは、子どもが産まれてからの大変さを教えてくれなかった。
自分が
そんなにやらなくても何とかなると思っていたけど、自分は協力しなければと
思った。
 - ・子育てをする妻の気持ちがわかった。
 - ・事例に出てきたことは、子どもが産まれてなくてもある。子どもが産まれたら
もっと大変なのかなあ。
 - ・今回の事例のようなことは全部はかさならない。大なり小なり似たようなことは
ある。
 - ・両親学級では、産後の夫婦関係についてまで教えてくれなかった。
 - ・妻に対しての講義等があるが、夫対象のものは少ないので今回のものは役立った。
-

妻の意見

- ・産後の夫婦生活がイメージできた。
 - ・第 1 子の時の気持ちを夫がわかってくれた。あの時は大変だった。
 - ・二人目になると子どもが産まれてからのことがわかるけど、第 1 子の時の気持ちを夫に知ってもらうことができた。
 - ・夫に私の気持ちを伝えることができた。
 - ・このプログラムを受けて、二人でやってきそうな気がする。
 - ・今回のことをきっかけに夫婦で産後のことを話すことができた。
-

表 39 プログラム実施後 3, 4 か月後の夫婦の意見

<p>夫の意見</p> <ul style="list-style-type: none">・プログラムで体験した場面が実際にあったが事前に話し合っていたので、スムーズに対応できた。・妻の気持ち寄り添うことができた。・実際はもっと大変な場面があったけど、二人で話すことができていたので乗り越えられた。・2 回目の出産のため、あまり役立たなかった
<p>妻の意見</p> <ul style="list-style-type: none">・私が困っていると夫から話しかけてくれる。・産後は、自分のことで精一杯だったけれど、夫が関わってくれたので助かった。・夫と一緒に育児をされていて気がした・夫に察して欲しいと思っではいけない・事前に予想できるので、対応ができるようになったと思う。

Development of a relationship-alignment program based on the difference in perception on housework and child-rearing in married couples who are in the transitional period from pregnancy to parenting

Abstract

Background

For married couples, the period from pregnancy to parenting is a transitional period of the family-development process for parenthood. During this period, much time is spent for housework and child-rearing, and both husbands and wives have less time to sufficiently communicate with each other. That could easily lead to a crisis in family-development formation. The couples in the parenting period are requested to align the relationship by, e.g., knowing the difference in value and communication patterns each other and learning how to accept the other's mind or thinking.

In the USA, an extensive childbirth preparatory education program is being actively prepared assuming a possible crisis in the family-development formation and expecting husbands' participation for smooth transition to parenthood, which is intended to decrease possible troubles, e.g., conflicts between the couples, strengthen the relationship, and let married couples think about the role allotment of housework and child-rearing. In Japan, the childbirth preparatory education program does not include measures implemented in other countries but focuses only on the pregnancy process and preparation for delivery with husband present.

Thus, this research aims to clarify the reality of conflicts between the couples who are in the transitional period from pregnancy to parenting, based on the difference in perception on housework and child-rearing. It also aims to develop a program to align the relationship and assess the effects of the program.

Objective

The purpose was to develop a program to facilitate relationship-alignment between married couples who are in the transitional period from pregnancy to parenting, to assess the effects of the program, and to suggest some desirable interventional supports by midwives.

Methods

This research consists of the following three studies:

1. Study 1: "Study on relationship-alignment in married couples in the transitional period from pregnancy to parenting through the role allotment of housework and child-rearing – Conflicts perceived by wives against husbands in the parenting period and the conflict-avoidance process", a qualitative and descriptive study.

Supports for the couples were investigated by clarifying wives' conflicts against husbands in the parenting period and the process from conflict to avoidance.

2. Study 2: "Study on the reality of perceptions of married couples in the transitional period from pregnancy to parenting through housework and

child-rearing”, a quantitative study (but free description data were qualitatively analyzed).

Supports for the couples were investigated by clarifying the reality of relationship-alignment between the couples who are in 3-4 months after childbirth when the parenting behavior is said to become stable.

3. Study 3: “Development of a program for relationship-alignment formation between married couples in the transitional period from pregnancy to parenting”.

A program for relationship-alignment and supports for the couples was developed and the effects were assessed.

Results and Discussion

1. In Study 1, from the results of the interview, the time course of the relationship-alignment process was assorted to “Soon-after-birth stage”, “Confusing stage”, “Adjustment stage”, “Leaning stage”, “Conflict-avoidance stage”, and “Relationship-alignment stage”. By reviewing the contents of conflicts and avoidance in each stage, it was found that the process consists of the following 7 items: [Difficulty after childbirth and wives’ perception], [Husbands’ response], [Wives’ conflict], [Asking for conversation], [Coping with husbands], [Conflict/resolution], and [New relationship].
2. In Study 2, the score for the facilitating behavior for parenting-alignment was higher in wives than in husbands. The score for own behaviors against the partners tended to be higher in husbands than in wives concerning “Overbearing” and “Neglect/avoidance”, suggesting that the communication between the couples could be insufficient because wives’ thoughts seem to be oppressed and neglected by husbands. For the coping behavior, wives tended to be less active than husbands in the problem-focus type, suggesting that support by husbands is necessary.
3. In Study 3, experienced by the couples was the program to align the relationships in advance in the pregnancy period anticipating some problems which can occur after childbirth. This simulated experience was considered to have become a good opportunity for the couples to consider mutual communications on child-rearing and the postnatal relationships of the couples, leading to relationship-alignment between them.

Conclusions

1. Wives usually have wishes that husbands understand wives’ difficult feelings and accept them, and it was suggested to be important for wives

to convey their thoughts and wishes for housework and child-rearing directly to husbands, not just want them to infer such (Study 1).

2. The time course of the relationship-alignment process was shown to be “Soon-after-birth stage”, “Confusing stage”, “Adjustment stage”, “Leaning stage”, “Conflict-avoidance stage”, and “Relationship-alignment stage” in this order. And it was considered necessary, for the relationship-alignment, to provide some supports focusing on the “Conflict-avoidance stage” and those tailored to the latter stages than “Relationship-alignment stage” (Study 1).
3. It was suggested that differences exist in each of wives and husbands about the thoughts and wishes, aspects of communication, and the coping behavior with stress. (Study 2).
4. In case the couples show difficulty in alignment of their relationship, a simulated experience to be conducted during the pregnancy-stable period about communications on possible postnatal problems and situations of the couples was considered effective for alignment of their relationships (Study 3).

Key words: pregnancy period, transition period to parenting, married couple, relationship-alignment between married couple